

戦後の混乱期入学の生徒と先生の足跡



6・3・3制度の第1回生徒と先生の過去・現在

新制小田原市市立酒匂小学校1回生記念誌刊行会

まえがき

昭和 22 年（1947 年）4 月に小田原市立酒匂小学校に入学した私達は、この地で生まれた子供達だけでなく、都会から疎開してきた家族の子供達、海外から引揚げてきた家族の子供達、また大蔵省印刷局工場が酒匂地区に建てられ操業開始したことから、22 年に多くの子供達が官舎に住むようになった。

子供達は、新制の小学校で一緒に授業を受けた。六、三、三制が施行された新制度の第 1 回生である。私達の学年は 150 人あまりで、1 年生の時に 1 組、2 組、3 組に編成された。ひとつのクラスは 50 名あまりで、3 年生の時に 1 時期 4 クラスになったが、多くの疎開児童が転校して、再び、3 クラスになった。また、ほぼ 6 年間にクラス移動はなく、同じクラスメイトと過ごした。

昭和 22 年 4 月に国民学校から全員入学の新制小学校・新制中学の義務教育が発足し、国民学校の先生方の幾人かは中学校に移られた。そのために新制酒匂小学校には、多くの若い先生方が、戦後の動乱期の波乱のなかで赴任された。

新しい教育として、級長にあたる学級委員は選挙で選ばれホームルームの時間が設けられた。フォークダンスは 6 年生の時から始まった。バスツアーや鎌倉・江の島研修旅行（改称）、1 泊の林間学校も私達が最初であった。私達は、これらの先駆けの行事に関わった。

昭和 22 年 4 月には 7 歳であった私達は、今年、喜寿の歳（満 77 歳）になり、小学校の頃のことは、記憶が薄れつつある。時代は刻々と変わっているが、戦中・戦後の記憶、幼い頃からの事柄を書き残し、後世に残す必要があろう。

この記念誌を作成するにあたり、増田昭一先生とお会いした時、「戦後の生活は苦しかったが、子供達は、皆、明るかったなー！」と言われた。どんな記憶でも、興味深い物語になり、また、貴重な歴史的資料になるであろう。我々を指導された増田昭一先生と鈴木昇太郎先生は 90 歳に近い。梶塚カツコ先生は、健康を崩されており思い出を書かれる状況ではないと聞く。

多くの投稿と、多くの写真が同窓生から届き、この記念誌ができた。

新制小田原市立酒匂小学校 1 回生記念誌刊行会

世話人代表 大野正夫・塩海洋介

目 次

カラーグラビア： 還暦の同窓会・喜寿の同窓会	
増田昭一先生と鈴木昇太朗先生とともに	
酒匂と小八幡の由来と歴史	鈴木昇太郎 2
戦後の年表とトピック	4
酒匂小学校の記録	21
校 歌	渋谷 武文 22
酒匂小学校の歩み	鈴木昇太朗 24
新制酒匂小学校に関わる出来事	26
若い先生の赴任・男女席を同じく・PTA活動・教科書・海人草とDDT 児童会 給食・ホームルーム・電鈴・フォークダンス・校林間学校・学芸会・運動会 遠足・図書室	
印刷局小田原工場と国府津駅管区官舎	38
懐かしき記録	42
紙芝居・キティ台風・定置網・地引網・大相撲・鞍馬天狗・少年雑誌発売 ボン菓子/セルロイド・そろばん塾	
懐かしき遊び	46
面子遊び・ビー玉遊び・ベイゴマ・おはじき遊び	
正月の遊び・春の祭り・夏休みの遊び	48
凧揚げ遊び・独楽回し・羽根つき遊び・手毬・お手玉・カルタ遊び すごろく遊び・どんど焼き・春の祭り・将棋・蝉取り・プール・盆祭り	
小学校の思い出を綴る	53
野入節・大野 正夫・塩海 洋介・青木 正勝 渋谷 武文・山下 洋一郎 思いつくままに	増田 昭一 85
教え子へ語る増田先生の半生・満州から小学校赴任	大野 正夫 93
酒匂小学校から教員半生の回想	鈴木昇太郎 108
アルバム： 6年間の集合写真・ 喜寿同窓会に参加して	大野 正夫 131
友遊会	133
思い出の地を歩く	134
あとがき	大野正夫 塩海洋介 140

酒匂と小八幡の由来と歴史

鈴木昇太郎

酒匂川は、富士山の東麓と丹沢山地の西南部を主な源流とし、御殿場線と並走するよう流れ、丹沢山地と箱根山の間を抜け足柄平野を南下して、小田原市で相模湾へと注ぐ。下流の足柄平野付近では川幅も広がり、周辺には水田や住宅地が多くなる。酒匂の語源を川に注いだところ酒の匂いがしばらく収まらなかつたという説、「匂」は「勾」の誤りであり、川の逆流による逆川（さかがわ）にちなむという説、川の曲折を指す「さかわだ」にちなむという説がある。小八幡は、資料には「古来、小八幡八幡神社周辺を呼び、近在には丘陵が散在して八重岡村（やえおかむら）とも言っていたが、後に「開墾し田畠とし小八幡村と改めた」とも言われている。



浮世絵 酒匂川（小田原駅内に掲げられている）

1889年（明治22年）4月1日町村制の施行により、酒匂村、小八幡村、網一色村、山王原村が合併して足柄下郡酒匂町発足。1940年（昭和15年）12月20日網一色村と山王原村が小田原市に合併し、残りの村は足柄下郡酒匂町酒匂と小八幡になった。1954年（昭和29年）12月1日に小田原市に編入して小田原市酒匂と小田原市小八幡となつた。酒匂と小八幡地区の広大な相模湾砂丘台地は、砂防林（松林の小高い丘）で囲まれており、その高いところ（台地）が国道東海道となつていていた。

明治 40 年～昭和 20 年（1945）の酒匂・小田原・足柄下郡地区の主な出来事

明治 40 年（1907）3 月 新橋一国府津間、急行列車の運転開始。3 月小田原魚市場開設。
小田原町立小田原女学校開校。東京汽船航路（国府津—伊東）開始。

明治 41 年（1908）4 月 芦子村、二川村、久野村、清水村が合併して足柄村となる。
8 月 町立小田原女学校が、高等学校に改称

明治 41 年（1908）8 月酒匂川が氾濫、十文字橋、流失。箱根宮城野小学校全壊。

8 月 松田と道了尊の間、乗合馬車運行 10 月大磯～二宮間の馬車軌道が流失

明治 45 年（1912） 川辺正之介氏、小八幡漁場にブリ大敷網設置。小田原で米の
価格の暴騰、小田原町民救済会が結成。

大正 3 年（1914）8 月 台風により早川が氾濫。上郡、下郡が大被害。

大正 5 年（1916 年）熱海線工事開始。足柄下郡立図書館開館（現小田原市立図書館）
小田原町周辺の町・村の漁民が生活困窮。不穏の動きがあり、米問屋組合は、米 1 升
35 銭で毎日 35 石を販売

大正 8 年（1919 年）5 月 小田原町万年町大火、479 戸焼失。

10 月 富士屋自動車が、国府津～箱根町間の乗合自動車開業。

大正 9 年（1920）2 月 東京～箱根間 大学駅伝競走開始。
10 月 21 日 熱海線 国府津～小田原間開通。

大正 11 年（1922 年）5 月 10 月 12 月熱海線、真鶴まで延長。早川、根府川駅開設

大正 12 年（1923 年）9 月 1 日 関東大震災。足柄下郡、上郡の全壊・全焼 28,782 戸、
死者 2,006 人。酒匂小学校の杉坂タキ先生（23 歳）は、「御真影奉護」で殉職。

大正 13 年（1924）2 月ブリの大漁。1 日で各漁場ともに 5,000 匹の漁獲

大正 14 年（1925）熱海線（国府津～熱海）全線開通

大正 15 年・昭和元年（1926 年）5 月 21 日 酒匂橋（コンクリート）開通

昭和 15 年 12 月小田原町と足柄町、大窪村、早川村、山王原村、網一色村が合併して、
小田原市が誕生、人口 54,699 人、世帯数 10,749 世帯、面積 5754 k m²

昭和 17 年 4 月足柄下郡酒匂村が、酒匂町となる。
太平洋戦争下、小田原で初めて「空襲警報」が発令された。

昭和 20 年 2 月頃、戦局が一段と緊迫。7 月に酒匂町にも B29 来襲。8 月 13 日～15 日、
各地で、焼夷弾投下、13 日だけで、死者 30 名、防空壕への至近弾で 13 名も犠牲者が
でた。ああ、何たる不運、終戦直前の悲しい出来事であった。

昭和 20 年 8 月 15 日 天皇陛下 NHK ラジオ放送で、終戦のご勅語を全国放送した。
私は、学徒動員差秋の寒川の相模海軍工廠で聞いた。茫然目失！

戦後の年表とトピック

昭和 20 年 8 月 15 日 終戦

私達の記憶は、太平洋終結、あるいは敗戦の頃から始まる。多くの都市は空襲で焼け野原になったが、小八幡に軍需工場、酒匂に大蔵省印刷局工場があったので、農漁村の町であったが空襲があり、民間家屋が流れ焼夷弾で被弾した。海外からの引揚げは、満州から 21 年 6 月 4 日コロ島の集結港から始まった。同時に韓国、台湾からの引揚げも始まった。満州からは 22 年から大連港からも始まり。22 年はソ連領からの引揚が続いた。シベリアからの引揚は 22 年 4 月から始まった。22 年 12 月から南方諸国からの引揚げが始まった。海外からの引揚者総数は、約 500 万人と言われている。



子供には戦争が終わったことなど理解できなかったが、ジープと MP の写真は記憶の最初にあろう。外国語で最初に思えた言葉のひとつがジープである。田舎の町にはジープも MP もあまり来なかつた。しかし、新聞の写真にはよく掲載されていた。いろいろの思いを持つ戦後の占領下の日本の象徴が、この写真ではなかろうか。

社会現象：東京大空襲、沖縄戦、原爆投下、本土決戦、1 億玉碎、連合軍占領、一億総懺悔（ざんげ）、戦災孤児。GHQ より戦時教材の除去と教科書改訂を命じられたが、紙不足で新しい教科書が用意できず、教科書の軍事主義的内容の部分を墨でぬりつぶして使用した。

GHQ と MP という言葉：米国を中心とした戦勝国よりつくられた連合国軍最高司令官総司令部は、第二次世界大戦終結に伴うポツダム宣言を執行するために、日本で占領政策を実施した連合国軍機関であった。日本では総司令部（General Head Quarters）の頭字語である GHQ や進駐軍という通称が用いられた。総司令官は、マッカーサー元帥であった。支配ではなくポツダム宣言の執行が、本来の役目であった。日本と外国との間の人・物資・資本の移動は GHQ の許可によってのみ行われた。治安維持は GHQ の軍事警察である MP（Military Police）と日本政府の警察と共同で行われた。

孤児：空襲、原爆などで両親を殺された戦災孤児。外地からの引揚げ中に孤児になつた引揚孤児。空襲で両親が行方不明になつた孤児。昭和23年2月1日の厚生省の「全国孤児一斉調査」では123,511人の孤児が確認された。そのうち施設に収容された孤児は12,200人と孤児総数の約1割であった。孤児施設のほとんどが民間の施設であり、国の施設は既存の養育院と乳幼児孤児収容のため、わずかの施設がつくられたのみであった。約10万人以上にものぼる孤児たちは、困窮した親戚に押しつけられたり、知人宅で労働力にされたり、養子にだされ働くされたり、子供だけで生活したりと、ごく一部を除き凄惨な人生を送った。餓死、凍死や病死で死んでいった孤児も多かった。孤児は圧倒的に小学生年代の孤児が多く、当時は学童疎開が行われていたため都市に住む親



家族が、空襲で亡くなつたため孤児になつたものが圧倒的に多数であった。多くの戦災孤児の収入は靴磨きであったようだ。どこの駅の前でも、多くの靴磨きの箱を前に座っている子供を見かけた。お客様の多くは米軍の兵士であったのも皮肉である。国から放置された孤児達の浮浪児の大量発生という事態に陥り、大きな社会的問題に発展してゆき、強制的収容も行われた。

戦災孤児たちの靴磨き（上野駅）

ガード下の靴磨き（昭和30年ヒット曲）

作詞：宮川哲夫 作曲：利根一郎 歌：宮城まり子

戦後ではないと言われた昭和30年に歌われて大ヒット。戦後10年経てもガード下に少年靴磨きをする子はいた。その頃、駅では、白束姿でアコードオンを引く傷痍軍人をみかけた。昭和30年はまだ日本は貧しく戦後の苦しさ思い出させた歌であった。

- 歌詞：1) 紅い夕陽にガードを染めえて ビルに向こうに沈んだら
街にやネオンの花が咲く おいらは貧しい靴磨き
ああ 夜になつても帰れない
「ネ、小父さん、みがかせておくれよ、ホラ、まだ これっぽちさ
てんでしけてんだ エ お父さん？ 死んじゃったー お母さん 病気なんだー」
- 2) 墓に汚れたポケットのぞきや 今日も小さなお札だけ
風の寒さやひもじさにや 馴れているから泣かないが

ああ 夢のない身が つらいのさ

- 3) 誰も買ってはくれない花を 抱いてあの娘（こ）が泣いてゆく
可哀そうだよ お月さん なんでこんな世の幸福（しあわせ）が
ああ みんな そばつを向くんだろう

昭和 21 年（1946）の出来事 6 歳（入学前）

1/1 天皇陛下、人間宣言。1/5 GHQ が軍国主義者の公職追放。1/19 NHK ラジオで「のど自慢素人音楽会」放送開始。1 月に東京の闇市 6 万店。2/1 第一次農地改革実施。2/17 金融措置令発布、新円切り換え、食料緊急処置令発動。天皇陛下の全国巡幸が始まる。4/28 公職追放令公布実施。8/9 プロ野球再開。5/1 メーデーが 11 年ぶりに復活。5/3 極東国際軍事裁判（東京裁判）開廷。5/12 皇居前で米よこせデモ。5/19 日皇居前広場で食糧メーデー。天皇陛下が、全国民にむけて食糧事情に関して録音放送。5/22 第一次吉田茂内閣成立。農林省食糧配給を 1 か月に 10 日間の中止を発令（食糧事情最悪）。6/1 台湾より引揚開始。6/1 满州よりコロ島から引揚げ開始。5 月広島・長崎に白血病患者出始める。6/8 日極東国際裁判で、キーナン裁判長が天皇陛下を戦犯として裁かずと宣言。8/9 第 1 回国民体育夏季大会開催。10 月上野駅前に引揚者による『アメ横』誕生。11 月に露店『秋葉原電気街』となる。11/3 日本国憲法公布指令（22/5/3 新憲法施行）。12/1 当用漢字 1850 字を文部省が決める。現代仮名遣いとなる。12/5 横浜開港第一船函館入港。12/8 シベリアから抑留者第一船舞鶴入港。

社会現象：天皇陛下の人間宣言。小作人が自作農民になる。誰も彼も食うのが精一杯。金があれば「ヤミ市」で何でも手に入る奇妙な現象。止まることを知らないインフレで物価は上がるばかり。インフレーションが加速度的に進行。新円を発行。外地から引揚げ開始した

歌謡曲：リンゴの唄/並木路子 東京の花壳娘/岡晴夫 悲しき竹笛/近江俊郎・奈良光枝 かえり船/別れ船/田端義夫 麗人の唄/霧島昇 **邦画**：GHQ より剣劇映画禁止したが、映画の人気が高い。大曾根家の朝（松竹）わが青春に悔なし（東宝）**洋画**：我が道を往く（米）運命の饗宴（米）疑惑の影（米）エイブ・リンカーン（米）南部の人（米）キュリー夫人（米）王国の鍵（米）カサブランカ（米）肉体と幻想（米）**書籍**：「旋風二十年」森正蔵 「愛情はふる星のごとく」尾崎秀実 「完全なる結婚」ヴァン・デ・ヴュルデ 神吉・原訳「凱旋門」レマルク 井上勇訳 「自叙伝」河上肇 **野球**：優勝 近畿グレートリング 首位打者：金田正泰（大阪）本塁打王：大下弘（セネタース）

農地解放：1945年（昭和20年）12月9日、GHQの最高司令官マッカーサーは日本政府に「農地改革に関する覚書」を送り、日本政府はGHQの指示により農地改革法を作成、同法は1946年（昭和21年）2月に成立した。この法律の下、農地は不在地主の小作地の全て。在村地主3町歩まで所有を認める。農地の買収・譲渡は1947年（昭和22年）から1950年（昭和25年）までに行われ、最終的に193万町歩の農地が、延237万人の地主から買収され、延475万人の小作人に売り渡された。当時の急激なインフレーションと相まって、農民（元小作人）が支払う土地代金と元地主に支払われる買上金は、その価値が大幅に下落し、実質的にタダ同然で譲渡されたに等しかった。このため、農地改革はGHQによる戦後改革のうち最も成功した改革と言われた。

タケノコ生活：物資統制とインフレの結果、国民はヤミ物資を求めるためには現金の使用が極端に減り、不足していた衣類と食糧の物々交換がヤミ物資取引の主流となった結果、国民は日々物々交換のために衣服と交換した。成長するタケノコが、毎日、その外皮を脱ぎ捨て竹になって行く様に似ている。今着ている服さえも明日は脱いでヤミ物資に替えなくてはならなかったことから、風刺された言葉である。5月より食糧配給が1か月に20日分しかなく配給もサツマイモがほとんどで食糧事情は戦後最悪となった。

ヤミ商人・ヤミ市：消費者が農家等へ直接行って物々交換（買出し）を望んでも相手にされないため、慣れた顔見知りの人が個人の規模で買出しや消費者からの買出し依頼の代理人となって行った。それらの人々は、当時流行のリュックサック（軍隊からの復員時に支給されたもの）などに入るだけのヤミ物資を仕入れて、自家消費、依頼された分以外の物資はヤミ市や近所などで売りさばくようになった。本来の意味は仕入・物流の部門を担当したヤミ市商人。個人のヤミ商人もいた。物資統制令によってこれらの行為は違法とされ、経済警察による取締が輸送中の鉄道の中などで実施されて、現行犯逮捕された者には物資の没収や罰金、懲役刑など処罰が行われていたので、非合法な危険な仕事であった。多くの町にヤミ市が繁盛した。

リンゴの唄の流行秘話：サトウハチローがこの詞を作ったのは戦時中であったが、「戦時下に軟弱すぎる」という理由で検閲不許可とされた。戦争直後に人々を勇気づける歌として大ヒットした。

歌詞：

- 赤いリンゴに くちびるよせて だまってみている 青い空。リンゴはなんにも いわないけれど リンゴの気持は よくわかる
リンゴ可愛(かわ)いや可愛いやリンゴ。
- あの娘(こ)よい子だ 気立てのよい娘 リンゴによく似た かわいい娘。

どなたが言ったか うれしいうわさ かるいクシャミも とんで出る
リンゴ可愛いや 可愛いやリンゴ。

3. 朝のあいさつ タベの別れ いとしいリンゴに ささやけば。

言葉は出さずに 小くびをまげて あすもまたネと 夢見顔
リンゴ可愛いや 可愛いやリンゴ。

可憐な少女の思いを並木路子が、赤いリンゴに託して歌う歌詞が終戦後の焼け跡の風景や戦時の重圧からの解放感とうまく合っていたのと、敗戦の暗い世相に打ちひしがれた人々に明るくさわやかな歌声がしみわたり、空前の大ヒットとなった。「リンゴの唄」吹き込みの際、作曲者の万城目正は、度々ダメを出し、「もっと明るく歌うように」と指示した。しかし、この注文は当時の並木には酷で、並木は戦争で父親と次兄、3月10日の東京大空襲で母を亡くしていたため、とてもそんな気分にはなれなかつたのである。

その事を聞いた万城目は、「君一人が不幸じゃないんだよ」と諭して並木を励ましたという。そしてあの心躍らせるような明るい歌声が生まれた。レコードは1945年（昭和20年）12月14日に録音され、1946年（昭和21年）1月に、日蓄工業株式会社から「コロムビアレコード」として発売された。レコード売上は、発売から1年で約33万枚に達した。

木炭自動車（薪炭自動車）：代用燃料車の一つで、木炭を燃料とする。ガソリン車でガソリン・ガスを圧縮、爆発させるのに対し、木炭自動車では木炭ガス発生炉で木炭を燃焼させて木炭ガス（一酸化炭素）を発生させて用いる。エンジン機関そのものには根本的な違いはない。燃料に薪を利用する薪自動車とともに、これらの自動車を木炭自動車と呼んでいた。1950年代初頭まで全国的に使われていた。

木炭車は、よくエンストをした。すると、運転手が降りて、くの字型の鉄棒を前の発動機の穴に差し込み、手回しで幾度か回していると、再びエンジンがかかった。乗客はエンジンが掛かるのを、気長に待った。



左：木炭
バス
右：木炭
バス
皇居に
入る。

昭和 22 年（1947）の出来事（小学校 1 年生）

1/20 全国主要都市で学校給食実施、アメリカから脱脂粉乳を提供。2/1GHQ ゼネスト中止命令。4/1 6・3・3 学制発足。4/20 第 1 回参議院議員選挙。4/25 第 23 回衆議院議員選挙。5/3 新憲法施行。6/1 片山哲内閣成立。8/9 古橋広之進水泳 400m 自由型で世界新記録。8/14 浅間山大爆発。10/11 配給量だけの生活を守った山口良忠判事、栄養失調で死亡。11/1NHK ラジオのクイズ番組「二十の扉」が放送開始。11/25 第 1 回共同募金始まる。

社会現象：アメリカより脱脂粉乳届く。ゼネスト宣言。停電が常習化。買いたし列車転覆 184 名死亡。集団見合い流行。運賃、郵便、電気、酒、タバコが 4 倍以上の値上げを行いインフレが続く。物資不足で餓死者は出る。ヤミ買いも生きるために常識となる。大相撲が再開される。

歌謡曲：悲しき口笛/美空ひばり 雨のオランダ坂/渡辺はま子 夜のプラットホーム/
二葉あき子 夜霧のブルース/ディック・ミネ 港が見える丘/平野愛子 夢淡き東京/
藤山一郎 誰か夢なき/竹山逸郎・藤原亮子 とんがり帽子/川田正子 星の流れに/菊池章子 炭坑節/日本橋きみ栄 **書籍**：「人生論ノート」三木清「キュリー夫人伝ヴァ・
キュリー」 川口・河盛・杉訳 「播州平野・風知草」官本百合子 「ノンちゃん雲に
乗る」石井桃「斜陽」太宰治「青い山脈」石坂洋次郎 **邦画**：戦争と平和（東宝）今ひ
とたびの（東宝）紳士録（松竹）女優（東宝）素晴らしき日曜日（東宝）銀嶺の果て（東
宝）
洋画：断壁（米）荒野の決闘（米）心の旅路（米）町の人気者（米）百万人の音楽
(米) ブルックリン横丁（米）影なき殺人（米）永遠の処女（米）右の花（ソ連）ガス
燈（米）
野球：優勝巨人 首位打者：大下弘（東急）本塁打王：大下弘（東急）打点王：
藤村富美男（大阪）盗塁王：河西俊雄（南海）最多勝：別所昭（南海）最優秀防御率：
白木義一郎（東急）沢村賞：別所昭（南海）MVP：若林忠志
大相撲：6 月優勝 横綱羽黒山 11 月優勝 横綱羽黒山

6・3・3・制の新教育始まる：アメリカは民主化政策の一環として教育制度の改革を勧告した。米国で普及している 6・3・3 制の適用を提案した。これを受け小学校・中学校と呼び、義務教育とした、その上に高等学校を設けた。改革の狙いは義務教育を戦前の 6 か年から 9 か年に伸ばし、すべての小学校卒業者を進学の機会を均等に与えることにした。しかし急遽の勧告で新中学生が小学校に同居し教室がたらず、野外授業や 2 部授業も行われ、全国的な混乱が起きた。

「鐘の鳴る丘」：ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」に、大人も子供も、土曜日、日曜日の午後5時15分から待ちかねて、ラジオのスイッチを入れた。テーマソング「とんがり帽子の時計台」は作詞菊田一夫・作曲：古関裕而で広く歌われた。

歌詞

1. 緑の丘の赤い屋根、とんがり帽子の時計台、鐘が鳴りますキンコンカン、メイメイ小山羊も鳴いてます、風がそよそよ丘の家、黄色いお窓はおいらの家よ。
2. 緑の丘の麦畑、おいらが一人でいる時に、鐘が鳴りますキンコンカン、鳴る鳴る鐘は父母の元気でいろよという声よ、口笛吹いておいらは元気。
3. とんがり帽子の時計台、夜になつたら星が出る、鐘が鳴りますキンコンカン、おいらはかかる屋根の下、父さん母さんいないけど、丘のあの窓おいらの家よ。
4. おやすみなさい空の星、おやすみなさい仲間たち、鐘が鳴りますキンコンカン、昨日にまさる今日よりも、あしたは もっと しあわせにみんな仲よくおやすみなさい。

このドラマで、作者菊田一夫を一躍有名にした。このドラマは、15分間ドラマであった。菊田一夫作のNHKラジオドラマ『鐘の鳴る丘』は、戦災孤児が社会問題になっていた背景として、昭和22年（1947）7月に始まった。3年7か月、790回にわたって放送された。昭和23年（1948）には、松竹によって映画化され、全部で3本作られ、文部省の初の特選映画となった。ドラマは、戦争が終り、復員してきた若者・加賀見修平がガード下で浮浪児にカバンを奪われそうになるところから始まる。その浮浪児は隆太と言った、修平は、隆太やその仲間、修吉、ガンちゃん、クロ、みどりなどと交流するようになっていった。

彼らの惨めな境遇を知った修平は、何とかしなければと考え、浮浪児たちも彼を慕いました。そして、修平の故郷が信州だったところから、孤児たちと力を合わせて信州の山あいに「少年の家」を作り、共同生活を始めた……。敗戦とそれに続く苦しい生活にうちひしがれていた大人たちも、このドラマによって、明日への希望を育てたといわれる。酒匂小学校全校生徒が、初めて先生の引率で歩いて、国府津駅前映画館へ行った。

あなたの意見を「街頭録音」：20年9月29日から22年まで続いた人気番組は、「街頭録音」であったアナウンサーが、マイク片手に街頭で意見を聞く時代を象徴する番組であった。第1回放送は：「あなたはどうして食べていますか」であった。配給制度、引揚者の救援など、当時の世相が記録に残されている。「尋ね人の時間」「復員だより」「引揚者の時間」の3番組は、聴取者から送られた第二次世界大戦（太平洋戦争）の混乱の中で連絡不能になった人物の特徴を記した手紙の内容をアナウンサーが朗読し、消息を知る人や、本人からの連絡を番組内で待つ内容であった。やがて『尋ね人』に集約

した。放送期間中に読み上げられた依頼の総数は 19,515 件であり、その約 1/3 にあたる 6,797 件が尋ね人を探し出せたと記録されている。依頼人の手紙の内容が端的にまとめられ、番組の題に即した要旨がアナウンサーによって淡々と抑揚なく読み上げられた。具体的には、次のような読み上げが行われた。

- シベリア抑留中に〇〇収容所で一緒だった〇山〇夫と名乗った方をご存じの方は、日本放送協会の『尋ね人』の係へご連絡下さい。
- 旧満州国竜江省チチハル市の〇〇通りで鍛冶屋をされ、「△△おじさん」と呼ばれていた方。上の名前（あるいは、苗字）は判りません。この放送は、1957 年（昭和 32 年）3 月まで続いた。

箱根駅伝：箱根駅伝は正月行事で欠かせない。1947 年より復活した。復活当時は正月 3



が日明けの日に行われ 10 チームも集まらず、応募大学は全校疾走したという。小学校の時代に、読売新聞社のマークが付いた旗をもらい沿道で声援をおくった。冬休みの縮めくくりの年中行事で、早稲田大学、日本大学、中央大学がトップを争っていた。

伴走者もいる箱根路を走る選手

美空ひばり



22 年 10 月に 12 歳で映画主演を果たした『悲しき口笛』（松竹）が大ヒットした。主題歌は 45 万枚売れた（当時の史上最高記録）。子供から大人まで親しまれた国民的な子供歌手となった。この時の「シルクハットに燕尾服」で歌う映像は小さい時の美空ひばりを代表するものである。彼女が横浜の魚屋の娘であったことが、庶民の子として、酒匂小学校の私達には、貧しい生活をしながらも、“やればできる”という励みになり、また親しみを感じた。25 年にヒットした「東京キット」は、

東京での孤児児童の生活を歌って、当時の世相を表現していた。「角兵衛獅子の歌」は、越後の貧しい子供達が舞う踊りを寂しく歌っている。

昭和 23 年（1948）の出来事（小学 2 年生）

1/1 二重橋 23 年ぶり開放。国民の一般参賀許可。1/26 帝銀事件 12 人毒殺。2/10 片山内閣総辞。4/1 新制高校発足。4/4 祝祭日の国旗掲揚を許可。4/28 夏時刻法公布（4 ～9 月サマータイム, 27/4. 11 廃止）。5/1 10 歳の美空ひばり国際劇場デビュー。7/15 GHQ の新聞の事前検閲廃止。5/9 金環日食。7/29 第 14 回オリンピック・ロンドン大会開催。日本参加は不許可。8/17 プロ野球ナイター開始。10/1 警視庁「110 番」を設置。10/19 第二次吉田内閣成立。11/12 極東国際軍事裁判判決（7 人に絞首刑、12. 23 執行）。

社会現象：新制高校、新制大学発足。GHQ が国旗掲揚を認める。相変わらず 4 倍から 5 倍の公共料金の値上げが続く。ピースは 60 円、1 ドル 270 円と改定。生活は苦しく公務員の大々的ストが相次ぎ、GHQ が介入し国家公務員法が改正され給与闘争は困難となる。世情不安定で、踊る宗教が出現。若者のアロハシャツ、ロングスカートが流行。

歌謡曲：長崎のザボン売り／小畠実 フランチェスカの鐘／二葉あき子 流れの旅路／津村謙 三百六十五夜／霧島昇・松原操 湯の町エレジー／近江俊郎 異国の丘／竹山逸郎・中村耕造 憧れのハワイ航路／岡晴夫 さよならルンバ／二葉あき子 東京の屋根の下／灰田勝彦 **書籍**：新書太閤記／吉川英治「罪と罰」／ドストエフスキイ／米川正夫訳 「親鸞」／吉川英治「この子を残して」／永井隆 **邦画**：酔いどれ天使 手をつなぐ子等 夜の女たち 蜂の巣の子供たち わが生涯の輝ける日／王将 **洋画**：ヘンリー五世 我等の生涯の最良の年逢びき 海の牙 旅路の果て 美女と野獣 悪魔が夜来る **野球**：優勝：南海 首位打者：青田昇（巨人） 本塁打王：青田昇（巨人） 川上哲治（巨人） 沢村賞：中尾碩志（巨人） MVP：山本一人（南） **大相撲**：5 月優勝 横綱東富士 11 月優勝 関脇増位山

「異国の丘」大ヒット：のど自慢大会でシベリアからの抑留者が歌ったのが始まりであった。竹山逸郎の歌が大ヒットしたが、作詞・作曲不明で歌われていた。作曲家・吉田正の帰国で彼の作詞（一部訂正）・作曲であることがわかった。吉田正自身も、多くの機会に、この歌を歌い続けた。

歌詞：

1. 今日も暮れゆく 異国の丘に 友よつらから 切なから がまんだ待ってろ
嵐が過ぎりや 帰る日もくる 春がくる
2. 今日も更けゆく 異国の丘に 夢も寒から 冷たから 泣いて笑うて 嘸つ
て耐えりや 望む日が来る 朝が来る
3. 今日も昨日も 異国の丘に 重い雪空 陽がうすい 倒れちゃならない
祖国の土に たどりつくまで その日まで

昭和 24 年（1949 年）の出来事（小学 3 年生）

1/1 GHQ が国旗掲揚許可 3/31 東京消防庁「119 番」設置。4/1 野菜の統制撤廃（セリ売り再開）。4/23 1 ドル 360 円に固定。5/7 飯食店（食堂）の営業再開。5/24 満年齢使用の法律公布。6/6 芥川賞・直木賞復活。6/9 国電スト（～11 日）。7/5 国鉄総裁・下山定則行方不明、翌日死体発見（下山事件）。7/12 国鉄第二次人員整理通告。7/15 三鷹駅で無人電車暴走（三鷹事件）。8/10 警察予備隊発足、警察保安隊発足。8/16 古橋広之進・橋爪四郎ら、全米水上選手権で世界記録。戦後初の国際競技参加。8/17 東北本線で列車転覆事故、3 人死亡（松川事件）。8/31 キティ台風が小田原へ来襲。11/1 「人は右、車は左」の対面交通実施。11/3 湯川秀樹にノーベル物理学賞授賞。11/26 プロ野球、セ・パ 2 リーグに分裂。11/27 全国紙に夕刊復活。12/1 お年玉つき郵便はがき発売。12/1 GHQ 重要物資の統制大幅撤廃。

社会現象：飲食店再開、東京都が失業対策事業の日当 245 円（ニコヨンの語源となる）。サツマイモが自由販売となる。戦後何十年も裁判が続く謎の列車事故事件が、この年に集中的に起こる（下山、三鷹事件など）。アジャパー、駅弁大学が流行語となった。

歌謡曲：三味線ブギウギ/市丸 月よりの使者/竹山逸郎・藤原亮子 青い山脈/藤山一郎・奈良光枝 銀座カンカン娘/高峰秀子 長崎の鐘/藤山一郎 かりそめの恋/三条町子 玄海ブルース/田端義夫 **書籍**：「風と共に去りぬ」マーガレット・ミッ切尔 大久保康雄訳 「長崎の鐘」永井隆 「宮本武蔵」吉川英治 **邦画**： 晩春（松竹）青い山脈（東宝）野良犬（新東宝=映画芸術協会）破れ太鼓（松竹）忘れられた子等（新東宝）女の一生（東宝）静かなる決闘（大映）森の石松（松竹）小原庄助さん（新東宝）
洋画：戦火のかなた（伊）大いなる幻影（仏）ハムレット（英）仔鹿物語（米）
野球：優勝：巨人 首位打者：小鶴誠（大映）本塁打王：藤村富美男（大阪）打点王：藤村富美男（大阪） 盗塁王：木塚忠助（南海）最多勝：V. スタルヒン（大映） 最優秀防御率：藤本英雄（巨人）沢村賞：藤本英雄（巨人） MVP：藤村富美男（大阪）
大相撲：1 月優勝 横綱東富士 5 月優勝 大関増位山 10 月優勝 大関千代の山

全国に社交ダンスホール開設：戦後に流行した社交ダンスが流行した。24 年春に小八幡の浜、今山近病院付近の松林を切り開いてダンスホールができた。こども心にも興味を持ち、友達を誘って、のぞきに行った。もちろん、中などには入らない。窓越しに、若者の男女が抱き合って踊っていることに驚いた。キティ台風で、建物ごと消えていた。その後、ダンスホールは再開されることはない。

フジヤマのトビウオ古橋広之進の新記録：昭和 22 年 8 月 9 日 全日本水上選手権大会



神宮プールの 1 万 5000 人の超満員の観客は、古橋広之進の 400 メートルに 4 分 38 秒 4 の世界新記録を樹立して歓喜の声を上げた。麦飯で頑張り 24 年には 400 メートル、800 メートル、1500 メートルに新記録を塗りかえた、古橋と橋爪らの活躍は暗い世相にともされた希望の灯であった。彼の中指が、勤労動員で失っているのも話題になった。

世界新記録を樹立した時の古橋広之進

昭和 25 年（1950 年）の出来事（小学 4 年生）

1/1 年齢の表記・呼称が満年齢に変更。数え年制が習慣化していたので国民若返り。3/1 池田蔵相「中小企業の一部倒産やむなし」と発言。4/22 第 1 回ミス日本に山本富士子。5/3 吉田首相、南原東大総長の全面講和論は曲学阿世と非難。6/25 朝鮮戦争始まる。7/2 金閣寺、放火のため全焼。7/8 警察予備隊 7 万 5000 人創設。8/10 警察予備隊設置令施行。8/14 8 大都市の小学校でパン完全給食実施を文部省が発表。9/1 公務員のレッドページ（解雇）決定。9/3 ジーン台風、死者・不明 539 人。9/20 衣料統制価格廃止。10/13 GHQ1 万余人の追放解除承認。11/3 「君が代」演奏許可。11/10 政府、旧軍人 3250 人の追放解除。11/10 NHK、テレビジョン実験局、定期実験放送開始。11/15 政府機関のレッドページ 1171 人。12/7 池田勇人蔵相「貧乏人は麦を食え」と発言し非難された。

社会現象：米以外の食糧・綿製品など価格統制撤廃。「トリスウイスキー」（ポケット瓶）を寿屋（現・サントリーホールディングス）が発売。お好み焼きが流行。千円札発行。GHQ の指令で文部省が「国旗掲揚」と「君が代」斉唱を許可した。

歌謡曲：夜来香/山口淑子 イヨマンテの夜/伊藤久男 水色のワルツ/二葉あき子 星影の小径/小畑実 山のかなたに/藤山一郎 赤い靴のタンゴ/奈良光枝 買物ブギ/笠置シヅ子 東京キッド/美空ひばり ダンスパーティの夜/林伊佐緒 桑港のチャイナタウン/渡辺はまり子 白い花の咲く頃/岡本敦郎 越後獅子の唄/美空ひばり **書籍：**「細雪」谷崎潤一郎 潜行三千里」辻政信「きけわだつみのこえ」東大出版部編 「チャクレイ夫人の恋人」（上・下 D. H. ロレンス伊藤整訳「裸者と死者」ノーマン・メイラー 山西英一訳 **邦画：**また逢う日まで（東宝）帰郷（松竹）暁の脱走（新東宝）

執行猶予（芸研プロ） 羅生門（大映） 醜聞（スキャンダル）（松竹） 宗方姉妹（新東宝） 暴力の街（ペン偽らず製作委員会） 細雪（東映） 七色の花（東横映画） 洋画：白雪姫（米国） 黒水仙（米国）、アラビアナイト（米国）、海の征服者（米国） 野球：優勝：毎日（セ） 松竹（パ） 首位打者：大下弘（東急） 藤村富美男（大阪） 本塁打王：別当薰（毎日） 小鶴誠（松竹） 本打点王：別当薰（毎日） 小鶴誠（松竹） 盗塁王：木塚忠助（南海） 金山次郎（松竹） 最多勝：荒巻淳（毎日） 真田重男（松竹） 最優秀防御率：荒巻淳（毎日） 大島信雄（松竹） 新人王：荒巻淳（毎日） 大島信雄（松竹） 大相撲：1月優勝 大関千代の山 5月優勝 横綱東富士 9月優勝 横綱照国

38度線に砲煙：朝鮮動乱が始まり朝鮮特需：25年6月25日日曜日の未明に朝鮮半島に突如戦火が勃発した。南北の境界線となっている38度線付近で、韓国軍と北朝鮮軍が戦闘を開始した。この戦闘は、終焉まで3年を要した動乱となった。この間、国連軍の兵站基地となった日本は、特需という名の外貨流入で、沈滞していた戦後の景気を一挙に吹き飛ばす恩恵をあざかり復興へ大きな分岐点になった。これを朝鮮特需と呼ばれた。

三輪トラック：1950年6月に勃発した朝鮮戦争に伴い、日本はいわゆる朝鮮特需による好況転換で中小零細企業までが一気に活況を呈し、末端の輸送手段としてのオート三輪への需要が高まった。燃料供給事情も急速な改善へと向かった。幅1.9m級、全長6m弱、荷台13尺（約3.9m）。小型車が、荷物を積み狭い市街地道路や林道での材木運搬では重宝された。急速に全国に広がり、戦後の復興最盛期の1トン3輪トラック

のシンボル的な存在となった。1955年代後半になると、道路の拡大、整備が進み、短期間にピークを迎えた軽3輪トラックブームは、1960年代に入ると、4輪トラックが各社で発売されて衰退した。田舎の道は、三輪トラック、今の軽自動車が走れる幅であり、昔の荷車の幅であるのは興味深い。3輪タクシーも出現し、後に東南アジアで広まった。

昭和26年（1951年）の出来事（小学5年生）

1/3 第1回NHK紅白歌合戦放送。3/4 第1回アジア競技大会、日本は5競技に参加。
3/9 三原山大爆発。4/1 米屋の民営復活。4/11 マッカーサー、連合軍最高司令官を罷免される。後任リッジウェイ中将。4/19 ボストンマラソンに日本初参加、田中茂樹優勝。
6/3 NHK、テレビ初の実験実況中継（プロ野球放送）。6/20 政府、第一次追放解除（政財界人2958人）発表。6/21 ユネスコ、日本の正式加盟承認。7/2 朝鮮戦争休戦交渉の

影響で、証券・繊維相場暴落。7/4 第1回プロ野球オールスター戦開催。8/1 日本航空発足。9/1 民間放送開局。9/4 サンフランシスコ講和会議開会。8日対日講和条約、日米安全保障条約調印。9/10 「羅生門」ベニス国際映画祭でグランプリ受賞。10/1 全国紙、朝夕刊セット発行を再開。10/28 メモリアルホール（旧国技館）で日本人初のプロレス試合、力道山対ブラウンズの対戦がラジオ放送中継されて、全国に旋風を巻き起こした。

社会現象：1月3日第1回NHK紅白歌合戦を放送する。木炭タクシー廃止、小型タクシー急増。パチンコが大流行し『軍艦マーチ』が、店内で流された。セロハンに替わってプラスチックという言葉が広まる。500円札が発行された。

歌謡曲：ミネソタのタマゴ売り/暁テル子 私は街の子/美空ひばり トンコ節/久保幸江
アルプスの牧場/灰田勝彦 連絡船の歌/菅原都々子 高原の駅よさようなら/小畠実 東京シーシャインボーカイ/暁テル子 上海帰りのリル/津村謙 あざみの歌/伊藤久男
野球小僧/灰田勝彦 あの丘越えて/美空ひばり **書籍**：「ものの見方について」笠信太郎
「少年期」波多野勤子「戦後風雲録」森正蔵「武蔵野夫人」大岡昇平「山びこ学校」無着成恭 **邦画**：麦秋（松竹）めし（東宝）偽れる盛装（大映）カルメン故郷に帰る（松竹）どっこい生きてる（新星映画）風雪二十年（東映）源氏物語（大映）あゝ青春（松竹）命美わし（松竹）愛妻物語（大映）**洋画**：イヴの総て（米）サンセット大通り（米）わが谷は緑なりき（米）オルフェ（仏）邪魔者は殺せ（けせ）（英）悪魔の美しさ（仏）バンビ（米）霹の中の散歩（伊）チャンピオン（米）黒水仙（英）**野球**：優勝 巨人（セ）南海（パ）首位打者：川上哲治（巨人）大下弘（東急）本塁打王：青田昇（巨人） 大下弘（東急） 打点王：青田昇（巨人） 飯田徳治（南海）盗塁王：土屋五郎（国鉄）木塚忠助（南海）最多勝：杉下茂（名古屋）江藤正（南海）最優秀防御率：松田清（巨人）柚木進（南海）新人王：松田清（巨人）蔭山和夫（南海）MVP：川上哲治（巨人） 沢村賞：真田重男（松竹）**大相撲**：1月優勝 横綱照国 5月優勝 大関千代の山 9月優勝 横綱東富士

食糧統制撤廃：米、小麦粉、砂糖の食糧の配給統制が撤廃されて、パンや菓子類が販売されるようになり、麦御飯ながら毎日の食糧事情が良くなつた。

パチンコの流行：パチンコが、多くの町に急速に広まった。パチンコ店と焼き肉屋の多くは韓国人が経営していたのが特徴である。軍事用のベヤリングを使い1946年に名古屋市内にパチンコ店開店が発祥と言われている。当時、1個1円だった。都道府県条例で許可営業となり、全国的に営業が1952年2月から始まり、庶民の娯楽となつた。

プロレスと力道山：1951年10月ラジオ放送で始まったプロレスは、日本プロレス協会



を設立する。シャープ兄弟を招聘し1954年2月19日から全国を14連戦した初興行は、1953年にテレビ放送が始まったことに追い風を受け、全国民の支持を受けて大ブームとなる。この興行でシャープ兄弟組と戦う時の力道山のタッグパートナーは、戦前戦中に日本柔道史上最強と謳われる木村政彦だった。しかし、木村は相手の技を受ける等のプロレス独特のスタイルに適応でき。シャープ兄弟との戦いで、いつも負け役を担わされて、その木村を力道山が空手チョップで救いだし、相手レスラーを倒すという一連の展開に、木村は嫌気がさし、力道山との間に亀裂が入るようになった。二人の真剣勝負に日本中が沸いた。

昭和27年（1952年）の出来事（小学6年生）

1/18 韓国政府、李承晩ライン設定。38度線が決まる。3/4 十勝沖地震。2月日本が初参加した第19回世界卓球選手権で日本勢が4種目で優勝。3/6 吉田首相「自衛のための戦力は違憲ではない」と答弁。4/1 琉球政府発足。4/1 手塚治虫の漫画『鉄腕アトム』が雑誌「少年」（光文社）で連載開始。4/9 日航機『もく星号』大島三原山に墜落、日鉄社長・三鬼隆、人気漫談家・大辻司郎ら37名全員死亡。4/10 NHKラジオドラマ「君の名は」放送開始。4/28 対日講和条約・日米安全保障条約発効。GHQ廃止。5/1 京国際空港（羽田）業務開始。7/19 第15回オリンピック・ヘルシンキで開催。日本は戦後初参加（75人）。10/15 保安隊発足。11/27 池田勇人通産相、「倒産・自殺もやむなし」と発言し29日辞任した。

社会現象：有楽町・日劇ミュージックホール開場。ラジオ受信契約1000万台突破。ウイスキー流行。スクーター流行、菓子類、文法具類、雑貨など日常品が、広く出回るようになった。キャラメル、子供雑誌、漫画本が広まる。天然色映画が始まる。

歌謡曲：テネシー・ワルツ/江利チエミ リンゴ追分/美空ひばり 白虎隊/霧島昇 山のけむり/伊藤久男 ゲイシャワルツ/神楽坂はん子 お祭りマンボ/美空ひばり ああモンテンルパの夜は更けて/渡辺はま子・宇都美清 赤いランプの終列車/春日八郎 伊豆の佐太郎/高田浩吉 **書籍**：新唐詩選 吉川幸次郎 千羽鶴 川端康成三等重役 源氏鷄太 **邦画**：生きる（東宝） 稲妻（大映） 本日休診（松竹） 現代人（松竹） 真空地帯（新星映画） おかあさん（新東宝） 山びこ学校（八木プロ） 西鶴一代女（新東宝） 働突（東

京プロ) 洋画: 殺人狂時代 (米) 第三の男 (英) 天井桟敷の人々 (仏) 河 (インド) ミラノの奇蹟 (伊) 令嬢ジュリー (スウェーデン) セールスマントの死 (米) 巴里の空の下セーヌは流れる (仏) 陽のあたる場所 (米) 野球: 優勝 巨人 (セ) 南海 (パ) 首位打者: 西沢道夫 (名古屋) 飯島滋弥 (大映) 本塁打王: 杉山悟 (名古屋) 深見安博 (西鉄・東急) 本打点王: 西沢道夫 (名古屋) 飯田徳治 (南海) 盗塁王: 金山次郎 (松竹) 木塚忠助 (南海) 最多勝: 別所毅彦 (巨人) 野口正明 (西鉄) 最優秀防御率: 梶岡忠義 (大阪) 柚木進 (南海) 新人王: 佐藤孝夫 (国鉄) 中西太 (西鉄) 沢村賞: 杉下茂 (名古屋) 大相撲: 1月 優勝 横綱羽黒山 5月 優勝 横綱東富士 9月 優勝 関脇栃錦

サンフランシスコ講和条約: 第二次世界大戦におけるアメリカ合衆国をはじめとする連合国諸国と日本との間の戦争状態を終結させるために締結された平和条約。この条約を批准した連合国は日本国が主権を承認した。国際法上はこの条約の発効により、日本と多くの連合国との間の「戦争状態」が終結した。連合国構成国であるソビエト連邦は会議に出席したが条約に署名しなかった。そのために、現在まで北方領土問題が残されている。いわゆる単独講和と呼ばれた。条約批准後も沖縄在日米軍基地は維持することとなり、沖縄では「屈辱の日」という。羽田空港が再開して日本から世界各国へ渡航がしやすくなった。

白井義男、世界フライ級世界チャンピヨン: プロデビューは戦時中の 1943 年。8 戰全勝の成績を残すが招集されて海軍に従軍し、整備士として終戦を迎えた。復員後 GHQ 職員・生物学者に、その素質を開花させていく。カーンの指導で、栄養豊かな食事を与えられ健康管理を徹底、長い手足と運動神経を活かした防御主体のテクニカルなスタイルに矯正することで白井のボクシングは息を吹き返し、1952 年にダド・マリノ (アメリカ) との世界タイトルマッチ勝利し王座を獲得。以後 4 度の防衛を果たした。敗戦に打ちひしがれた日本人にとって、白井のボクシングの王者獲得と、その後の防衛での活躍は“希望の光”となった。
1952 年 5 月 19 日世界フライ級王座、左はカーン博士



日本卓球の黄金時代: 日本が世界の卓球界にデビューしたのは、1952 年に 2 月に開催された世界卓球ボンベイ大会 (インド) であった。当時、日本は初出場ながら 4 種目で優勝を果たした。それまで世界で活躍していた欧洲勢に日本選手は分厚いスポンジを

貼ったラバー（ボールにスピードが出る）など工夫した用具を使い、攻撃的でスピード重視のプレースタイルで挑んだ。1952年～59年の間に日本が優勝した種目数は24個。男子団体で世界卓球5連勝を達成した。1950年代は日本の卓球は黄金時代で、全国に卓球ブームが巻き起こった。荻村伊智朗氏は、その後の日本卓球界の牽引者になった。

”もう戦後ではない”が流行語：東京にボーリング場ができる。硬貨での公衆電話が登場。ヘルシンキオリンピック開催。ナイロンブラウス、ビニールレインコート、シームレス・ストッキング登場。バイク（ホンダカブ）が若者に流行。魚肉ソーセイジ登場。

戦後は、お菓子がなかった：昭和23年（1948）紙芝居屋は芋飴を売る。昭和24年（1949）キャラメルが許可。昭和25年（1950）練乳粉ミルクの統制撤廃、朝鮮動乱勃発で、物資生産地として日本の景気が回復しつつあった。昭和26年（1951）砂糖の統制撤廃、小麦粉の統制撤廃、この年後半後半期よりキャラメル、チョコレート、菓子類が各社から発売される。



昭和26年後半期より発売されたキャラメルとチョコレート

昭和26年（1951）に全国の多くの老舗の和菓子屋が開店した。江戸向島土手の桜餅、京の和菓子、金沢の和菓子もこの年に再開した、駄菓子屋が全国的に開店した。

総天然色アニメの白雪姫と映画ターザン：「白雪姫」は、ディズニーの長編アニメ映画の第1作、世界初の長編・カラー・アニメーション映画で、映画の題名は「白雪と7人の小人」となっている。1937年に制作されていたが、日本公開は昭和25年（1950）年9月であった。グリム童話の「白雪姫」が原作である。文部省特選で、先生に連れられ歩いて小田原の映画館に行った。白雪姫は、多くの悪女にいじめられるが、多くの人達（小人）たちに助けられて成長する筋書であるが、その時は筋書より美しい総天然色に感動した。現在は、東京ディズニーランドでの看板グッズが、白雪姫に関するものと言われている。

同じ頃、米国で水泳選手として活躍したジョニー・ワイズミュラ主演のたくましい主人公が演じるターザン・シリーズ映画が人気を博した。魔境のターザン、ターザンの怒り、絶海のターザン、ジャングルの宝庫などがヒットしたと言われている。



白雪姫と7人の小人



ジョニー・ワイズミュラ主演のターザン



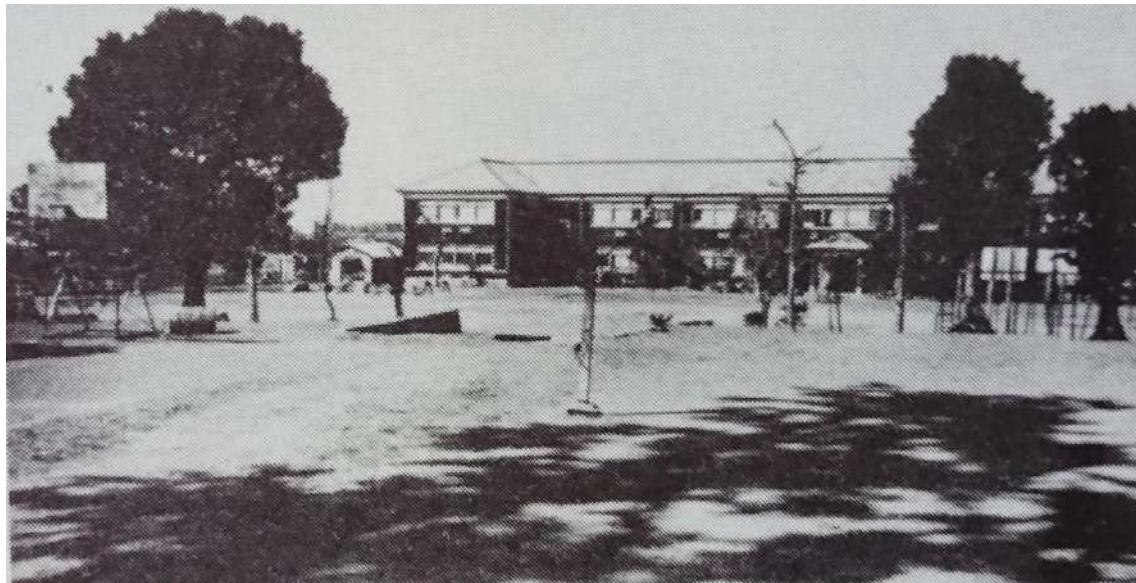
東京ディズニーランドの白雪姫ラウンド

酒匂小学校の記録



校章校章の意味は、3種の神器の一つ、八咫（やた）の鏡に「酒匂」を入れたものである。由来は大正4年10月10日、大正天皇御大典記念に校章が制定され、同年12月、本校児童の帽子微章に使用した。

酒匂小学校は、川瀬庄衛門の家を校舎として明治17年に「浜の南台」に建てられたが焼失。明治26年にいまの位置に新校舎建設された。その時の記念植樹として、今の地に楠を3本、役場の位置に2本が植えられた。私達のいた頃は3本あった。楠の木はその後台風で1本が折れて、今の2本の楠の木が盛り土にして記念樹となっている。その頃は、松葉林の向こうに相模灘、箱根連山の向こうには富士山がみえ、裏は広大な足柄平野の田園が広がっていた。



校舎と運動場。左に銀杏の樹 右に楠の樹
(百年史より、撮影は昭和50年頃と推定)

酒匂小学校の校歌

渋谷 武文

酒匂小学校校歌

一
富士の高嶺を西に見て
南に臨む相模灘
幾重の浪の幾代かけ
酒匂の里は東路の
とぼそとこそは知られけれ

二
あわれ高嶺のうごきなき
清きを己が鏡とし
そこひも知らぬ海原の
ひろきを己が心とし
つとめはげまんいざ我等

作詞 森刃太郎
作曲 井上孝式

大正二年七月十一日制定

「富士の高嶺を西に見て
東に望む相模灘」

この冒頭の詩で始まる校歌の詩とメロディは酒匂小学校で学んだ7歳から12歳までの6年間に何度歌ったのかはわからないが、その後65年間、頭の中に強烈に刻みこまれていて、いつでも歌えるし、実際に家の風呂に入ったときや、墓参りで酒匂に帰って富士山を拝んだ時などつい口ずさんでしまう。

幼少時の脳への刷り込みは何事にあれ、有効であるようだ。しかしこの校歌については無理やり刷り込まれたという記憶はないし、その必然性もなかつたはずだ。

冒頭に続く歌詞は

「幾重の波の幾代かけ
酒匂の里は東路の
とぼそとこそは知られけれ」
と結ばれる。

さすがにすらすらと口から出るのはこの一番だけであるが、実に素晴らしい歌である。しかしある年齢になってから、この校歌を口ずさみながら、どうしてもある一か所が理解できず釈然としないでいた。

「とぼそとこそは知られけれ」の「とぼそ」とは何ぞやと疑問を抱えつつも、多忙な日

常の身には最重要問題でもなかつたので、放置したままになつてゐた。長じて会社生活から引退し、また昔の旧友と再会したりする機会が得られるようになつてからこの疑問が再燃した。

辞書や百科事典で調べてもわからない。もしやと思って、酒匂小学校で2年間担任していただいた鈴木昇太郎先生にお尋ねした。鈴木先生は、すぐに調べてくださり、この校歌が大正2年7月11日に制定され、作詞が森又太郎氏 作曲が 井上孝式氏であることが判明したと連絡をくださいました。また、ほとんど覚えていなかつた2番の歌詞も教えてくださいました。この2番もなかなかよいのである。

「あわれ高嶺の動きなき
清きを己が鏡とし
そこひも知らぬ海原の
ひろきを己が心とし
つとめはげまんいざ我等」

ただ「とぼそ」については鈴木先生も調べがつかず「はてな」とのことだった。

しばらくたつたある時、ふと思いついて、再度「広辞苑」を見直した。「とぼそ」をじ一と見つめると初めの時は見落としていたヒントがそこにあるではないか。広辞苑の「とぼそ」の項の一部を書き写すと次のようになつてゐる。

とぼそ【枢・扃】(「戸臍(とぼそ)」の意①開き戸のかまちに設けた枢(とまら)を受ける穴。俗に(とまら)とも。(和名抄) ②転じて扉または戸の称。

ついでに「東路」も引いてみる。

あずまじ【東路】京都から東国へ至る道。すなわち東海道・東山道などをさす。転じて東国の意。

これで歌詞の意味がようやく分かつた気がする。酒匂は西国から東国(すなわち江戸であろうが)へ向かう者にとっての、改めて心構えを整えて出立するべく開く扉というような意味ではなかろうか。

天下の嶮の箱根を越え、ようやくたどり着いた小田原にて一息入れ、心氣を整えて改めて東国への第一歩の扉を開く場所と解釈すればよく意味が通じる気がする。自分なりの解釈で、本当に正しいか否かはわからないが、少しばかりすっきりして校歌を口ずさむ折によどみなく声を出せるようになったのである。

酒匂小学校の歩み

鈴木昇太郎

明治 5 年 7 月： 学制令公布。足柄上・下郡で初めて、「崇広館第 1 支校」と称して開学、明治 18 年まで 酒匂村長楽寺の仮校舎で小学教育を行う。

明治 18： 崇広館第 2 支校と第 1 支校が合併して、訓令に基づく地名を冠して「酒匂小学校」（山王原、網一色、酒匂、小八幡地区）と称する。

明治 18 年～明治 29 年： 明治 18 年学制変更に、小学校令の改定により、尋常酒匂小学校となる。

明治 29 年～大正 12 年： 高等科を併設して、尋常高等酒匂小学校と称する。

大正 2 年 9 月： 校歌制定

大正 4 年 10 月： 校章制定、

大正 5 年 6 月： スウェーデン体操の取り入れ。杉浦孝一しの助言。以後杉浦孝一氏が体操器具など 1 式寄付

大正 9 年 7 月： 体操優勝校となる。

大正 12 年 9 月 1 日： 関東大震災が起り、全校舎倒壊・焼失。

9 月下旬地震後授業再開。運動場を利用して青空教室。11 月に仮校舎（6 教室

大正 15 年 5 月 21 日： 酒匂橋開橋式、全生徒が、午前中に「渡り初め」

昭和 9 年 7 月 23 日： 「二宮金次郎銅像の除幕式を行う。

昭和 15 年 12 月 30 日： 小田原市制施行により、山王原と網一色地区は、小田原市地区の学校となり、酒匂小学校は、酒匂村と小八幡村の児童となる。

昭和 17 年 4 月 1 日： 国民学校令により酒匂町国民学校となる。

昭和 20 年 12 月： 6.3.3 制の新教育制度決定

昭和 22 年 4 月 1 日： 国民学校廃止（高等科

廃止）学校教育法施行、校名を足柄下郡酒匂小学校と改称された。

昭和 22 年 4 月 30 日： 上法正晴校長着任

昭和 22 年 5 月 1 日： 新制小学校教育開始

昭和 22 年 6 月 28 日： 児童の検便開始、

これより毎年マッチ箱に入れて持参

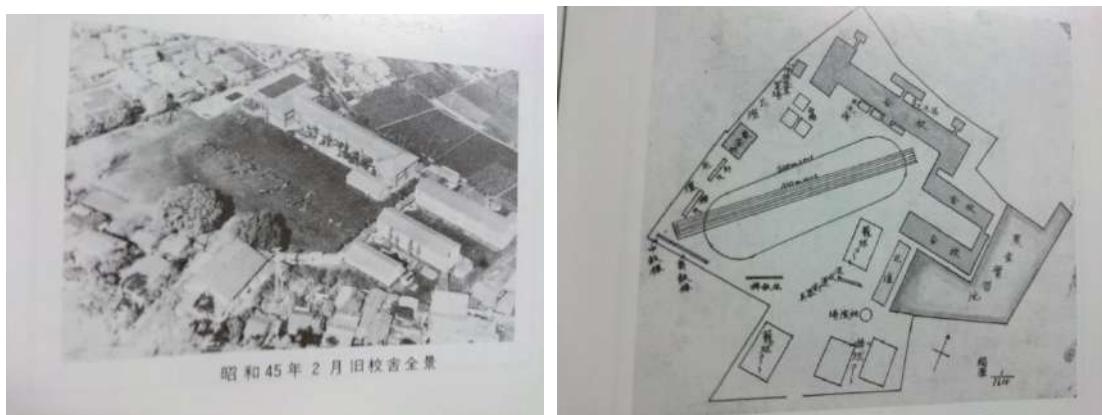
昭和 22 年 10 月 15 日： 秋季大運動会開始



開校百年記念誌（昭和 52 年発行）

昭和 22 年 5 月： 新制中学校制度により高等科児童は中学生となった。小学校生徒は 1 年から 6 年となった。

昭和 22 年 4 月 1 日：学校教育法施行、校名を足柄下郡酒匂小学校と改称された。
昭和 22 年 5 月：各学年で春季遠足が開始される。これより毎年 5 月に遠足実施
昭和 22 年 10 月 15 日：秋季大運動会開始される。これより毎年 10 月に運動会実施
昭和 22 年 12 月 12 日：小田原市と合併、小田原市立酒匂小学校と改称
昭和 23 年 5 月 27 日：PTA 結成総会、以後 授業参観・父兄懇談始まる。
昭和 23 年 7 月 20 日：教育勅語等の資料の返還
昭和 24 年 1 月 18 日：米軍放出物質とララ物質により児童へミルク給食始まる。
昭和 24 年 6 月 14 日：国旗掲揚柱寄贈される。国旗掲揚始まる。
昭和 24 年 12 月 20 日：学校所有農地と交換で運動場拡大
昭和 25 年 1 月 17 日：児童会に「子供銀行」開店
昭和 25 年 5 月 1 日：上法正晴校長転任、金子敏男校長着任
昭和 26 年 1 月 23 日：「児童フォーカダンス」を始め。
昭和 27 年 7 月 21 日：酒匂海岸水泳場始まり、常時監視。
昭和 27 年 12 月 23 日：放送室整備と放送設備完了。全教室放送開始
昭和 27 年 8 月 11 日：図書室改装完了
昭和 27 年 8 月 21 日：箱根仙石小学校夏季林間学校実施
昭和 28 年 3 月 新制酒匂小学校第 1 回生卒業



昭和 20 年 2 月撮影の小学校校舎と周辺の写真と校舎見取り図（百年史より）

本校舎と渡り廊下で結ばれた平屋の 2 棟の校舎があった。この校舎には工作室や吹き抜けの大教室・講堂があり、学芸会や卒業式が行われた。その右側に学校農地がありサツマイモ作りをした。1 年生から順番にサツマイモを作りが行われた。学校所有の田圃もあり、田植えから稲の刈り取りまでの課外授業も行われたが、食糧事情が良くなつた頃に代地で校庭拡張が行われた。

新制酒匂小学校に関する出来事

昭和 22 年度に多くの若い先生の赴任

酒匂小学校の資料によると、昭和 22 年に新制中学校が開設されて、中学校の教員に移る教員がおり、昭和 22 年 4 月には新任教員が多く着任した。特に女性教員の赴任が特徴的であった。新赴任数は昭和 22 年 13 名（女性教師 5 名）、23 年 13 名（女性教師 10 名）24 年 3 名（女性教師 3 名）、25 年 10 名（女性教師 3 名）26 年 2 名（女性教師なし）。のことより、将来の夢を託す若い先生達によって新しい教育が進められた。

男子・女子は席を同じくする

戦前の学校教育では、「8 歳にして男女は席を同じくせず」とされていた。小学生は教室が同じでも男子と女子は席を離して座ることされていた。新制小学校で大きく変わったのは、女子生徒と男子生徒が、ふたりで座る机に男女の生徒が座った。1 年生入学の時から隣の席には女子生徒であった私達は、何の違和感もなかった。低学年の時は、教科書などが隣の席にはみ出したりすると言い争いをしたが、高学年になると、席を同じくした男子・女子生徒は、よい話し相手になった。しかし、まだ昼休み時間には、男子生徒と女子生徒とは、別々に遊ぶことが多かった。毎年、学年始めには席替えがあった。どのように決めたか記憶がないが、背の低い者が前の席に座ったと思う。どの女子生徒が隣の席に来るか、楽しみの一瞬であった。

P T A 活動

PTA の名称は、学校に通う子どもの保護者 (Parent) と教職員 (Teacher) からなる団体 (Association) であることから、各語の頭文字を取ったものである。GHQ の指示により昭和 22 年より文部省通達で、翌年には全国の小学校に PTA が組織されて、父兄のなかから、会長が選ばれて学校の運営にも関わる PTA 活動が始まった。この時から授業参観、父兄と先生の懇談会、先生と親の 2 者面談がもたれるようになった。酒匂小学校は、23 年 5 月より PTA 活動が開始されたと学校史に記録されている。

新しい教科書と成績表の標記の変更

入学すると、最初にザラ紙の教科書が渡された。私達は、新制第 1 回生であるので、戦後の新しい教育方針に従って、初めて作られた教科書を渡された。21 年度の生徒は、軍国的部分が黒塗りされた教科書が使われた。私達に渡された教科書は、急ぎ、紙のない時に作られたためか、街で売られている絵本より悪い“ペラペラ”紙が第一印象であ

った。2年生になると、「教科書は、「兄・姉のいる生徒は、その教科書を使うこと、いなければ、できるだけ近所で持っている者から借りること」と先生に言わされた。6年生まで、新しい教科書を使わなかった生徒がかなりいた。成績表は、明治時代からの「甲・乙・丙」の表記は小学校1年生までであった。2年生から成績表が、クラスのなかで比較評価、5段階法の表記になり、生徒も親も戸惑った。これはGHQの指示かもしれない。

海人草（カイニンソウ）煮汁の服用

戦争直後は、子どもの衛生環境はよくなかった。大抵の子どもは回虫をもつていて、おなかの中に10cmほどの細いミミズのような回虫が繁殖するのである。

「腹が痛い！」と子供が言うと、回虫だと親は思った。畑の隅に、“肥溜が、おかげでいた。昔から人糞を野菜などの肥料で使っていたが。百姓知識として溜めに人糞を溜めて、十分に発酵させて回虫の卵などを殺したものを、肥料に使っていたが、戦後の混乱で、生人糞を使ってしまう農家が多くいたためであろう。

学校では検便があり駆除対策として、いっせいにサントニンと海人草（カイジンソウ）などの虫下しを服用させた。サントニンを飲むと白いもののすべてが黄色く見えた。カイニンソウは回虫駆除効果のあるマクリという海藻を煮出した汁で1口2口はともかく飯茶碗に1杯は苦痛だった。翌日、登校すると下った回虫の数を先生に報告する事になっていた。しかし、学校でいくら駆除対策を実行しても、畑の野菜に糞尿を撒くことはどこの農家でもやっていた。



学校で虫下しのカイニンソウ煮汁を飲む（ネットより）

DDT粉末の散布

衣ジラミや毛ジラミが、特に終戦直後に蔓延した。特に女の子の髪には毛ジラミが発生していると言われた。シラミは発疹チフスを媒介するために、DDT粉剤が進駐軍により持ち込まれて、各学校でも使用した。えり首から散布器を差し込んでDDT粉剤を吹き込んでもらった時、粉の冷ややかな感触を味わった。女の子は髪の毛にも散布されて、姉さんかぶりをして帰宅した。しかし、苦情が多く、すぐに学校でのDDT散布は中止された。当時、人畜無害とされたDDTの危険性がレイチェル・カーソンの著書「沈黙の春」で、初めて明らかになるのは、この時から約20年後のことである。

学校給食は、まずかった脱脂粉とコッペパン

学校給食は、昭和 22 年（1947）1 月 20 日に始まった。GHQ が子供達に栄養を与える施策であった。アメリカの慈善組織ララ（LARA）が援助物資を送ってきた。



生徒が手に持つアルミボールのカップ（ネットより）

脱脂粉乳は、全国の都市部 300 万人の児童に配布されたと記録されている。資料によると子供の栄養を考えて、「小麦」か「ミルク」のどちらかを選ぶことになった。背を伸ばすため動物性タンパクを与えようとの結論から

「脱脂粉乳」という粉ミルクが提供されることになったという。酒匂小学校では昭和 24 年より脱脂粉乳とコペパン給食が始まった。当番が冷えた脱脂粉乳の入ったバケツを教室に運び、アルミ椀で飲むまずかった味は、戦後の思い出に強く残っている。高学年になると、脱脂粉乳が不味くなくなったように思う。主食のコッペパンは、アメリカから提供された小麦を使い、大きくて太い、ずんぐりしていた。コッペパンは給食のために、日本が作り上げたオリジナルのパンであると言われている。これに紙に包まれたマーガリンやジャムも付くようになった。

後に、「パン、ミルク、おかず」の完全給食が始まった。「おかず」で思い出すのがクジラ肉である。硬くてうまくなかった。また、給食用の食器はアルミニウム製でかなり大きかった。しかし、まだ食糧格差のあった時代に、学校給食は、貧しさに関係なく、親が安心して子供を学校に行かせることができた一因であった。

昭和 25 年 1 月より授業の開始・終了が鐘から電鈴となる

入学した時から玄関にあったが鐘がなり、カーン・カーンと授業の開始を終了と校内に響いた。校史によると 25 年、4 年生の時より校舎内に電鈴のリーンというベルの音になった。今は電鈴に慣れてしまったが。小田原駅の発車には童謡が流れる。電鈴が、再び鐘の音に変わらないものかと郷愁を感じる。

生徒が選挙で選ぶ児童会

第二次世界大戦の終了に伴い、GHQ による民主主義定着政策の一つとして、学校における生徒の自主活動が推進され、小学校では「児童会」という名称になった。指導要領

には次のように書かれている。「学校の全児童をもって組織され、教員の適切な指導の下に、学校生活の充実と向上のために諸問題を話し合い、協力してその解決を図る活動を行う。発達途上にある児童を対象とする組織であるため、児童会の運営は、主に高学年の児童が行う。級長という制度は廃止し、全クラスから各種委員を選挙で選び、その中から代表委員を選ぶ。級長から学級委員に名称が変わったのが、GHQの指令とは知らなかつたが、記憶では小学校3年頃から選挙で各種委員を選ぶようになった。男女一人ずつの学級委員がクラス全員の選挙で選ばれた。学級委員をクラスのなかでは級長とも呼んでいた。昭和25年に貯蓄委員による子供銀行も開店したと校史に書かれている。26年に校内放送設備が整い放送部ができて、放送部員による学内放送が始まった。下校時間に全教室から“のばら”的メロディが流れた。図書委員は、放課後、図書室に詰めて貸し出しと返本の作業をした。新刊の購入も多くなり、新刊書の裏に貸し出しの紙を張った。

ホームルームの時間が設けられた

昭和26年（1951）の学習指導要領で『教科課程』と言っていたものを『教育課程』と改めたと資料に書かれている。そこで小学校の特別授業（ホームルーム）として、

1. 心身の調和のとれた発達、個性の伸張
2. 協力してよりよい生活を築く（自主的・実践的）=態度
3. 集団の一員としての自覚→集団のなかのメンバーとしての、責任感・連帯感を持たせる時間が設けられた。

ホームルームの時間で、何をしたかはあまり記憶がないが、小学校3年生の時に、クラスは4クラスになり席が四角に並べられ、いくつかの班に分かれて座り、班ごとにあるテーマで議論した記憶がある。このようなことが、ホールルームの先駆けだったのだろうか。

学級委員が議長で教壇に座り、先生が窓際に座って、いろいろの課題については、クラス全員で話あったような記憶があるが、よく覚えていない。これが「生徒みんなで考える自主学習・教育は先生方も、困惑して1年間で終わり、この机の並べ方では教えにくいと思ったか、4年生になって、元の2列ずつの机配列に戻った。生徒達には知らないところで、先生方は新しい教育法を試行錯誤していた。ホールルームには、教科書がなく、各クラスで、先生の考え方で行う自由時間であったように思う。

学 芸 会

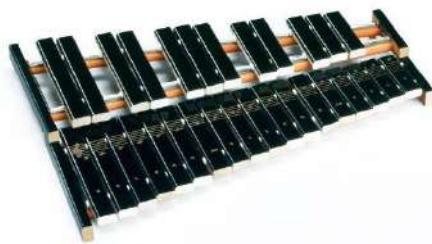
野入 節

学芸会は、毎年3月に行われました。本校舎と渡り廊下で行ける2棟の平屋校舎の一つが講堂になった長い教室で、高くて広い舞台があり、卒業式などの行事もここで行われました。学芸会は、学年ごとに行われていたと思います。演劇、ダンス、器楽演奏、合唱などが行われたと思います。学芸会では、皆、1種目には参加して、全生徒は学芸会まで長い練習日が続きました。演劇では、衣装を整えるのに、先生方は苦労されました。なにしろ、十分に衣装などを調達できない時代でした。学芸会には、父兄も見学にきました。

学芸会の記憶は、この時着ていた白い衿（えり）付きブラウスと黒の吊り紐付きひだスカートでした。長いストッキングは初めてで、うれしくて、うれしくて。

渡り廊下で、出番を待っている間、ストキングに手をふれてワクワクしていた記憶があります。ダンスだった、演劇だったか思い出せません。あるいは、器楽部の演奏だったかもしれません。

器楽部に入っていて田代（和田）先生が、当時、遠かった浜松のカワイ楽器店まで、木琴を買いに一緒に行って下さいました。半音付き木琴は大きくて美しい光沢があり、大切な宝物になりました。その時に買った「器楽伴奏」、23曲の楽譜教本は昭和28年文部省発行となっており、21cmx30cmで、全部で厚さが約20cm、ほぼ1kgもあり、定価は180円となっております。6年生の時でした。65年を経ても「ドレドレミソラソ」で始まるドボルザークの「ユーモレク」、シューマンの「樂しき農夫」など、いまでも暗譜で歌え、音楽好きになった私の原点は酒匂小学校にありました。





音楽室で、5年生、6年生合同の器楽部の練習

指揮；二見長平副校長先生、ピアノ伴奏；梶塚カツ子先生（水谷久香さん写真提供）



2年生の芸能祭に参加者全員の記念写真 沖津（大山）弘子さん提供

運動会

運動会は、毎年10月に行われた。まだ、ミカンが青くて酸っぱい時期だった。運動会の練習は一か月も前から行われ、前日は全校生徒総出でリハーサルをした。それぞれの学年で、いろいろな種目の練習をして、日が暮れる頃に帰宅した。徒競走、玉いれ、



pixta.jp - 3266226

高学年になると組み立て体操、騎馬戦があった。女子生徒はダンスや遊戯などを行った。

徒競争では、全員に何かの賞品がでた。酒匂には竹作りの物差しが特産であり、1等賞は物差しであった。ノートや鉛筆なども賞品になった。全員に何かがもらえるので必死に走った。ものがなかった時代の運動会である。

組み立て体操（ネットより）

現在、多くの小学校の運動会で組み立て体操はされていないそうだが、子供達の体力づくりと団結力を鍛えられるので、スポーツ保険をかけてでも実施した方がよいと思う。

母親達は、米を運動会のために貯めておき、お寿司やおにぎりを作り、お昼休みに合わせて来てくれた。母親と兄弟。姉妹が輪になって食べた。なぜか運動会に合わせて、運動靴を新調してくる者が多かった、新しい運動靴を履いて、朝、家を飛び出した。

遠 足

遠足は、毎年、5月に実施されていた。1年生の時は、学校から歩いて小田原城址公園であった。新しい教育か、先生の指示で左右に男女が分かれて、手をつないで東海道1号線を歩いて行った。小田原城は荒廃していて、手入れがされていず、天守閣の近くの小高いところに草原の坂があり、滑って遊んだ。

2年生の時は、酒匂川の土手を歩いて、二宮尊徳の実家の見学を行った。出発の時に誰



酒匂川の土手の道

と手をつなぐか、ワクワクしたが、先生は背の高さによって順番に列を作っていた。しかし、手をつないだのは最初でだけで、あとは手を離して、わいわいと話しながら歩いた。よく歩いた思い出の遠足であった。昼食は、土手の草原でとった。

3年生の時は、東海道線で熱海駅にゆき、乗り換えて伊豆駅で下車、そこからの遠足であった。どのように歩いたのか記憶はないが、淨蓮の滝が思い出に残っている。高さ25mの小高い山の上から激しく白い水が広い池に流れ落ちる景観が素晴らしいかった。崖から白い糸を引くように流れる瀧をみたのは、この時が始めてであった。



4年生時は、箱根の登山鉄道に乗って、強羅から大湧谷へ行った。細い線路を走る登山電車が、スイッチバックすると聞かされていたので、それを体験するのを楽しみにしていた。その場所はレールが2本になっていた。強羅から岩肌の細い道を登り、地獄谷にたどり着くと、地獄のように草木がない光景が眼下に現れて白い煙をだしていた。



強羅にて、4年1組



強羅にて、4年2組



強羅にて、4年3組 (井上正勝さんのお母さんもご一緒)

5年生の時は、丹奈トンネルを超えて静岡に行った。旅行に行く前に授業で丹奈トンネル工事が難関な工事であって、何人も人が死んでおり、出口に慰靈の碑があると聞かされて、入口も出口も、じっと眺めたが見つけることはできなかった。清水にある「三保の松原」の砂浜からみる富士山の美しさに魅了された。静岡市の「久野山東照宮」にも参拝したが、あざやかな神社という強い印象を思っている。

一番気に入ったところは、デパートであった。明るく広い大きな売り場に驚いた。2階に行くに、エスカレーターがあった。初めてみる動く階段であった。エスカレーターの快適さはに驚いた。確かに、あまりに皆が何回も乗ったり、下りたりするので、先生に怒られた記憶がある。

さらに驚いたのは、レコードによる録音実演であった。レコード盤があり、その前にマイクがあつて、誰かがしゃべると、即座にレコードにその音が吹きこまれていた。

どのようにセットされているか理解できなかつたが、生徒達は多く集まり、自分の声を吹き込んで楽しんだ。5年生の遠足では、多くの観光地を訪れたが、強く記憶に残つているのは、デパートのなかを歩いたことであった。

初のバスツアー遠足



小学校 6 年の時には、鎌倉の寺院と江の島の見物であった。学校からのバスによる遠足は、初めての試みであったと校史に記録されている。長谷観音大仏は、石段を登ると大仏像が忽然と現れて感激した。江の島には橋が架かっており、島の中の細い階段を登った。

長谷の大仏さんは、周囲に建物がない自然の森の中に鎮座していた。

フォークダンス

昭和 26 年小学校 6 年生の時に、フォークダンスの練習が始まったと小学校の年表には書かれている。男子生徒と女子生徒とが、腕を組んでの踊りは最初照れ臭かったが、やってみると、手を握り合うことで“うきうき”とし楽しさがわいてきた。フォークダンスは難しい技能はいらず、ヨーロッパで民族衣装を着て輪になって踊っている。彼らも笑顔で楽しく踊っている。日本においては GHQ の占領政策により、フォークダンスは教育普及活動として行われるようになり、米国で踊られているものが多く踊られた。日本で踊られているフォークダンスはポピュラーな楽曲として「マイム・マイム」「藁の中の七面鳥」「ジェンカ」などがある。英国のスコティッシュ・カントリー・ダンス) や米国のスクエアダンス、ラウンドダンスもフォークダンスとして踊られた。今は小学校運動会での行事に一貫として定着しているようであるが、ここまで GHP の日本の教育指導が徹底しているとは驚きであり、我々の学年が、フォークダンスの先駆けであったのは興味深い。



フォークダンス開始世代（ネット） 酒匂小学校のアルバム

箱根仙石原中学校学校で、夏季林間学校始まる



昭和 27 年 8 月 21 日、小学校 6 年生の夏に林間学校 があった。校史によると我々の学年が、最初の試みであったことがわかった。食糧事情が良くなつたとは言え、生徒各人、お米を袋に詰めて持参した。御殿場駅で降りて草原の尾根を歩いて、仙石原小学校に夕方に着いた。

現在の箱根仙石小学校（ネットより）

印象に残っているのは、校庭が広く大学生がラクビーの練習をしていた。広大なグラウンドを全速で走り、また団子になって転がる姿に驚いて、こんなスポーツがあるとは知らなかつた。この競技がラクビーであることを先生から聞かされた。教室に布団が敷かれて雑魚寝であった。

翌朝は快晴で、乙女峠を通って金時山の登山をした。今では、箱根金時山は、日本百名山の一つとなっている。最後の急な上り道はきつかったが、頂上に金時娘（小見山妙子さん）がいると先生から言われて、楽しみに、金時娘はどんな姿かと想像して登った。

頂上に着くと茶屋があり、そこに小太りの美しい若い女性がいた。小見山さんは、気安く、私達の記念写真に入ってくれた。思い出に残る写真となっている。



日本百名山の秀峰、金時山。この尾根を登った。



金時山頂上の岩のてっぺんで、金時娘・小見山妙子さん

図 書 室

校史には昭和 27 年に図書室改装完了と書かれている。本は重いので、床を変えたのだろうか。職員室の隣が図書室に改装された。その時、私達は 6 年生であった。いくつかの書棚があり、一番前の書棚には、厚い辞典、大判の本が並べられており、戦前の古い教科書もあった。資料室にもなっていたのだろう。そこで黒塗りのある教科書をみた覚えがある。いくつもの書棚が部屋いっぱいに並び、理科、歴史、社会、小説などのコーナーに分けられた。酒匂小学校は空襲に合わなかつたので、戦前の貴重な本も残っているに違いない。今はどのように整理されているのだろうか。毎月、ヨーロッパの紋章のデザインのカラーケースに入った講談社版の「世界名作全集」が 2~3 冊づづ毎月刊行された。種々の書籍も、多く購入されていった。。図書委員は、購入された本の背と本の最後の頁にラベルと貸出票を張った。貸出係も順番に行った。

大蔵省印刷局小田原工場

大蔵省印刷局小田原工場は、戦後間もない1947年5月24日より操業を開始したと記録されている。小田原空襲は、太平洋戦争末期の1945年（昭和20年）にアメリカ軍により行われた神奈川県小田原市に対する空襲があつたが、じゅうたん爆撃はなかった。この空襲で酒匂と小八幡には印刷局工場と軍需工場があり、焼夷弾がこの2か所に落下し、軍需工場は全壊・焼失したが、印刷局工場は大きな被害がなく、戦後直ちに操業が始されたと記録されている。



昭和1958年頃の小田原工場の全景



最近の国立印刷局小田原工場の本館、（ホームページより）

この写真では、コンクリートの塀が巡らされているが、昭和 22 年の頃は、金網の塀がめぐらされていただけであった。中には入れなかつたが塀の中に壊れた建物がみられ、なかで働く人達もみられるので、塀沿いある細い道を歩いて中をのぞいた。その頃、印刷局小田原工場は、ひとつの街を作っていた。小学校に近い方面は、いくつかの 2 階建て官舎棟が建ち並び、工場の表出口の前には 2 階建て一戸建の官舎が並んでいた。

小田原工場には、敷地内に職員用の各種の商店が入ったマーケットの建物があり、一般にも開放した。多くの商品が並び、街に商店の少ない時代に便利なマーケット街となつた。当時は、各家庭にお風呂のない時代で、大きな銭湯ができ、一般にも開放して親やこどもは利用した。銭湯の大壁にはおなじみの富士山の絵が描かれていた。小八幡・酒匂の子供達は、遊びを兼ねて連れたった銭湯に行くのが楽しみであった。

印刷局の酒匂・小八幡の人達への最大の貢献は、総合病院が設置されたことである。酒匂にも小八幡には、内科医院しかない時代。病気となると印刷局病院に通院、入院した。入院施設も整い名医の外科医がおられて、後に町内に林外科病院を開業した。後に 2 年先輩の御長男の林龍一郎さんが林病院を次ぎ、娘さんは我々の同級生の林マリ子さんであった。現在は、杏林堂クリニックとして、国道に面した大きな施設になり、医療とともに高齢者時代のリハビリ施設の中核となっている。

銭湯の横に広場があり、盆踊りの櫓が立ち、皆が浴衣姿で踊った。また、時には野外映画劇場にもなつた。思い出に残るのは、野外映画劇場で、レ・ミゼラブル「ジャンバルジャン」である。この映画はフランスで 1933 年に制作された名画であった。字幕であったが、このような洋画を上映したこと、街ではチャンバラ映画の全盛時代に、素晴らしい名画を上映していた。いつも洋画であった。

印刷局の中も外も桜の木が植えられている。子供の頃は、あまり、気にはならなかつたが、今は、桜の開花の季節には、花見の名所になっている。印刷局の職員の多くの家庭の子弟は、他所からの移住者であり、身だしなみや言葉つかいも地元育ちの子供と少し違い、良い刺激を与えた。

印刷局は、酒匂・小八幡地区の住民にとって、多くの面で貢献した。酒匂小学校の生徒の学力・習慣など活力向上にも、大きく寄与したのではないだろうか。また印刷局工場では、事業の拡大で、町内の多くの住民、特に若者を多く採用した。

国鉄国府津駅管区官舎

小八幡の八幡宮の隣接するところに、広い国鉄国府津駅官舎があった。平屋のいくつかの棟が広い道を隔てて、かなりの棟が建てられた。この官舎には、地元生まれでない生徒が多くいた。同級生には稻毛孝行君や関田順一君など幾人かいた。

この官舎敷地内には大きな広場があり遊び場にもなっていた。夏休みに野外映画会が、上映されるのが恒例であり、上演の日時を楽しみに待った。大きな布のスクリーンであり、星空の下で寝転びながら、みられるのが快適であった。国鉄の民営化で官舎はなくなり、今は広い道路で区切られた一個建てにきれいに区画された住宅街になっている。



瀬戸君代 水墨画 酒匂の松（遊友展出品）

懐かしき記録

紙芝居：GHQ は、日本における「紙芝居」の重要性を認め推奨し、紙芝居がアメリカの学校にも普及した。そのために英語の紙芝居も制作されたという。紙芝居は社会教育や学校教育にも積極的に利用された。そのような上層部の思惑とは関係なく子供達は紙芝居が好きであった。



紙芝居は昭和初期の日本で誕生し流行した。戦後、第二の黄金期を迎える。全国で約5万人の紙芝居師がいたという。自転車でやって来る「紙芝居のおじさん」には、失業者や戦地からの復員兵も多かった。拍子木を鳴らして人を集め、芋飴、後には水あめやソース煎餅、酢イカや酢昆布といった駄菓子を販売。そこで、ようやくお待ちかねの紙芝居が始まる。演目は「黄金バット」のようなヒーローものや時代劇、怪談など幅広く、物語の佳境で「続きは明日のお楽しみ」と期待をあおった。テレビなどの登場後、街頭紙芝居は急速に衰退したが、教育目的の紙芝居は、現在も小学校、図書館や保育園・幼稚園で親しまれている。

海岸を変えたキティ台風来襲：昭和 24 年（1949 年） 8 月 31 日～9 月 1 日。死者 135 名、行方不明者 25 名、負傷者 479 名住家全壊 3,733 棟、半壊 13,470 棟キティ台風は、8 月 28 日に南鳥島近海で発生し、31 日 10 時頃八丈島を通過後、進路を北寄りに変え、19 時過ぎ神奈川県小田原市の西に上陸した。その後東京西部、埼玉県熊谷市付近を通って 9 月 1 日 00 時頃新潟県柏崎市付近から日本海に進んで、温帯低気圧となった。

この台風により、八丈島（東京都八丈町）では最大風速 33.2m/s（最大瞬間風速 47.2m/s）、横浜で 32.5m/s（同 44.3m/s）を観測するなど、東海、関東、北日本の日本海側で暴風が吹いた。山岳部では降水量が多くなり、小河川の氾濫が多く、群馬県東村沢入では土砂災害で 32 名が生き埋めになった。また台風の通過が満潮時刻と重なったため関東地方では高潮となり、横浜港では推算潮位より 1 m 以上高くなつて、浸水や船舶の被害が多数発生した。小田原では、早川の河口が洪水になった。酒匂や小八幡の

海岸にあった施設の多くは流されてしまった。楽しみであった。

小八幡の定置網：小八幡の定置網はいずれも 200 年以上の歴史がある。小田原では昭和の初め頃から相海（そう かい）漁業という定置網漁の経営体があつて、お金持ちが資



本投下して漁場をいくつか持つた。後に漁業組合もできて、定置網漁業が行われている。農業は個人の土地のなかで経営しているが、漁業は国の財産のなかで行われている。漁場は個人の所有にはならない。あくまでも漁業権免許をもらってやる。相模湾の漁場は漁場的にはいい漁場といわれている。

木造船の頃の定置網（鰯が捕れて）

酒匂・小八幡の定置網漁場は、酒匂川と国府津の中央の小八幡にあり、大きな定置網漁船が砂浜に幾槽も並んで置かれていた。定置網に乗り込む漁業者も多くいた。私達が小学生の頃は、大きな木造船を、1 隻 10 数名くらいで、櫓を漕いで沖に向かった。大型船は 2 隻であり、小舟も出していた。大きな船が波を切って浜から海面にでる時は、船を移動させる太い丸太を、順番に前に敷き、船は砂浜を海に向かって動くのは壮観であった。ちょうど、学校から家に帰る時に、出漁を見ることができた。鰯の季節には、子供達は、鰯を掴み、浜を走って運ぶ手伝いもした。しかし、浜もなくなり、このような光景は、今は無い。

地引網漁業：定置網の船から 1 km くらい離れたところに、地引網の小舟が、幾槽も並んでいた。地引網は、稚魚が沿岸にくる春から夏が漁期のようであった。網を沖に広く広げて、砂浜でロープを二手に分かれて引っ張る。小学生。中学生、女人達が、天気が良



く風もない朝に地引網の網引きを行った。網をみんなで引くだけで楽しかった。いろいろな子魚も網に入るが、イワシの子のシラスを捕る主な目的である。魚の仕分けが終わると、網を引いた子供達に少しづつ、シラスがもらえるので、小さい網籠を腰にぶら下げて網を引き、一握りほどのシラスをもらって喜んで家に帰った。しかし、今は無い。

大相撲: 戦後の家庭で家族団らんの一番の話題は、新聞やラジオで知る大相撲であった。



大相撲は、ラジオと新聞で子供たちも興味を高めて、学校でも、休み時間には、楠の周りが砂場であり相撲を取り合った。1組の杉本好男君は、相撲のラジオ中継の物まねが上手で、休み時間に、先日の相撲結果を、ラジオのアナウンサーと“行事と呼び出し”から始まり、皆に聞かせて楽してくれた。

鈴木正一君が、2017年3月に亡くなつたが、片桐努君が「正一君と小学校時代に、楠の下で、東富士と羽黒山となって取り合つたこと」を追悼していたという。

東富士 1950年夏場所優勝

鞍馬天狗とチャンバラごっこ：昭和25年、鞍馬天狗の映画の再開とともに、子供達は好んで映画を見て、皆、鞍馬天狗の格闘場面が遊びとなつた。“遊び”は竹を刀にして、きり合う、「ちゃんばらごっこ」をするのであった。腕を青くはらして家に帰つたこともあった。

一番人気の鞍馬天狗と角兵獅子

幕末を舞台に「鞍馬天狗」を名乗る神出鬼没の勤王志士が、幕藩方の新撰組の行く手を阻んで縦横に活躍をするさまを描いた。戦前からの大衆小説の代表的作品であった。舞台は主に京都・大坂が中心となっているが、作品によっては江戸も舞台なつたものもあった。

生麦事件や蛤御門の変といった歴史上の事件を背景とした作品もある。個々の作品の間には明確な関連性が見られない。主人公は、嵐寛寿郎（アラカン）演ずる倉田典膳（くらた でんぜん）を名乗っているが、本名ではない。その素性は謎が多く、容姿は、「身長五尺五寸ぐらい。中肉にして白皙（はくせき=色白）、鼻筋とおり、目もとはすすし」と描写されている。



日本の将来に思いをめぐらす勤王志士だが、幕府方を代表する勝海舟と繋

がりがあった。新撰組の近藤勇とも奇妙な交友関係をもつ。鞍馬天狗が近藤と一対一の対決をするが、そこに子役「角兵衛獅子」が出てくる。剣は一刀流の凄腕。時には短筒も使う。鞍馬天狗は、戦前からの映画であるが、時代劇が解禁になってからは、毎年のように製作された。1953年（昭和28年）だけで6本が製作されている。戦後の総数が40本にもなった。どの作品も最後に覆面姿の鞍馬天狗が超人的な活躍で事件を解決するという展開で、奇想天外、単純明快、似たような内容の作品ばかりである。どの話がどの作品のものだったのかがわからなくなってしまうが、当時の子供から大人までの観客に好まれた（ネット資料）。

昭和26年に少年・少女の雑誌・マンガ本の発刊：小学校4年生の頃より、朝鮮特需により国内経済は、ようやく復興に向けて動き出し、小学生向けの雑誌なども続々と創刊された。主なものに、「冒険王」「漫画少年」「おもしろブック」「少年クラブ」や「少女クラブ」、漫画「鉄案アトム」などがあった。これらの少年雑誌は年々厚く豪華なものになった。3大付録とか4大付録とか、付録も年々エスカレートしていった。漫画本も刊行されて貸本屋もできた。子供達は、買ってもらった雑誌をお互いに回し読みをしていた。



ポン菓子の流行：米、トウモロコシなどを膨張機と呼ばれる製造機械を使用し、その回転式筒状の圧力釜に生の米などを入れて蓋をして密閉し、釜ごと回転させながら加熱する。釜の中が十分加圧されたら、圧力釜のバルブをハンマーで叩いて蓋を解放し、一気に減圧する。この時、原料内部の水分が急激に膨張し、激しい爆裂音を伴いながら釜から内容物が勢いよくはじけ出る。爆発音から「ポン菓子」と呼ばれた。



それを煎餅にしたのがポン煎餅で人気があった。昭和25年頃、米がかなり自由に手に入る頃より、定番の菓子となった。そのため巡回のポン菓子業者いた。子供の集まる広場などにポン菓子製造用の器具を持ってきて、目の前で作ってみせるということがよく行なわれていた。今に残っているトップコーンがポン菓子の名残である。

トウモロコシ・ポン菓子はトップコーンの元祖

セルロイドの筆箱と下敷 : 小学校の低学年の頃は、木造りの筆箱を使っていたが、高学年になって筆箱や下敷きはセルロイドに代わってゆき、その模様を比べあつた。合成樹脂の最初の製品はセルロイドであった。おもちゃや映画のフィルムにも使われたが可燃性が強く、新たなプラスチックの誕生でセルロイドの時代は急速に終わった。我々の世代は「セルロイド」の言葉がなつかしい。



そろばん塾 : まだ、学習塾がなかった時代に、そろばん塾が酒匂にいくつかできた。小八幡ではなく、我々、小八幡の同級生が一緒なって酒匂まで通った。塾は学校の授業が終わって夕方から始まった。冬、雪の積もった道を2~3人で通ったのが懐かしい。先生の読み算言葉が軽快で楽しかった。遠いことと、だんだん、仲間のなかでうまくなる者との差が出てきて、遊びとして面白くなくなり、短い期間でそろばん塾通いはやめてしまった。ただ、暗算が、指先をそろばんのように動かしてできるという方法を覚えた。

懐かしき遊び

食糧難で充分な食事もとれなかつたが、子供達は元氣で明るかつた。なにしろ自由があった。私達は、竹馬、チャンバラや相撲や野球とともに、下級生の頃は日本の伝統の遊びを引き継いでいた。しかし、今は無い。

面子遊び : 面子は、投げられた時の風圧で裏返したり飛ばしたりする。そのため、ただ力強く投げるのではなくコントロールと角度が重要であった。これがなかなか難しい。

斜めに滑り込ませるように投げて、場外へと押し出すのが初めの稽古である



室内でも庭でも遊べるから、遊び方はいくつかあった。1) あらかじめ地面に表面に置かれた面子が「裏返る」。2) あらかじめ地面に置かれた面子が、規定の範囲（枠で囲った範囲など）よりも「外に出る」。3) 地面に置くめんこの枚数は1枚の場合もあるが、複数の参加者が1人1枚、または、参加者1人2枚など、様々である。

面子には時代を反映する当時の子供達の人気者が描かれた

ビー玉遊び：戦後の子供の遊びとして、ビー玉は男の子の遊び、女の子の遊びは「おはじき」というようになっていた。多くの子供達の思い出になっている。ビー玉は、ラムネ瓶につかう玉が発祥とも言われている。



色付きビー玉

今では、色のついたビー玉が「ネット販売」で買えるが、我々が遊んだものと、たぶん同じものであろう。我々の遊んだビー玉は、草色1色だったと思う。布袋に数個入れて持ち歩いた。値段も子供の小遣いで買える安いものであった。ビー玉はいろいろな遊び方があった。一番簡単な遊び方は、指で弾いてビー玉同士をぶつけ合い遊ぶ。地面に約3～5cm四方の枠を作る。ジャンケンで最初の一人を選び。負けた人はビー玉を枠の中に入れて、最初に勝って「親」になった人からビー玉を弾いて枠内のビー玉を枠外に出す。うまく命中させて、外に出たビー玉は自分のものになる。

ベーゴマ遊び：小八幡の子供達には、鉄製ベーゴマ遊びをしなかった記憶がないが、



酒匂の子供達はベーゴマ遊びをしたようである。渋谷氏の書かれた“遊び”的なかで、ベーゴマ遊びが書かれていたので、酒匂の子供達はしたのだろう。いろいろの遊び方があるが、簡単な遊びは、金（かな）洗面器において、先にコマを一人が回してそれにぶつけて、コマが飛び出せば、そのコマが自分のものになった。

おはじき遊び：おはじきは、ガラスでできた平たい玉であった。直径は 1cm～1.5cm 程度。ガラス玉では透明色のものや小さい模様の入ったもの、さらに大きさにも大小あり、種類は多かった。



遊び方は、自分のおはじきをひとつずつ相手のおはじきへ、はじき当てる方法が一般的であった。はじきを当てた場合、その当てたおはじきは自分のものとなり、手に入れたおはじきの数を競い合う。任意で決めた区画内へおはじきをはじいて入れたり、またその逆に区画外へはじき出したりして遊ぶ場合もあった。

正月の遊び

正月の凧揚げ遊び：正月になると海岸での凧揚げは、1回はせねばならないように思つて凧を揚げに出かけたものだった。凧揚げをお正月にあげるようになったのは、江戸時代からとされており、その時代の凧揚げは、年中、子供に限らず大人もいろいろな場所であげていたという。



凧揚げは、江戸の庶民の凧が武家屋敷や参勤交代の際の列に入って通行を妨げる事件が多々起こり、凧揚げの禁止令が出て幕府は対策を考え、武士が家に居て参勤交代の行列も無いお正月にならではと、凧揚げがお正月にされるようになったのが由来とされている。酒匂も小八幡も広い砂浜があり、正月休みは、親子連れも海岸での凧揚げをし、凧揚げで賑わった。長方形の凧が多く、奴凧は揚げるのが難しかった。長く新聞紙を切り、尻尾にすると高く上がるコツもあった。

独楽回し遊び：独楽まわしは、奈良時代に寺や神社の縁日の余興として催されていたものが、次第に子どもの遊びになったものであると言われている。

江戸時代には独楽を使った曲芸を見せる芸人が現れ、元禄時代のころには、歯磨きを売る行商人が独楽まわしの名技を披露して子どもたちの人気を集めたと言われている。



戦後の我々の子供の頃の遊びは、みんな一緒に回して、より長くまわった者が勝ちであった。大きい独楽は長くまわるが力もいる。芯は鉄なので紙ヤスリで磨いた。平たい独楽、軽い独楽で競った。ぶつけ独楽遊びもあり、ぶつけて相手の独楽が止まつたら勝ちであった。独楽遊びは、正月休みだけの遊びを思っていた。冬休みが終わると、きれいに磨きしまった。

羽根つき遊び：羽子板は、江戸時代から正月の初遊びになっていた。だんだんと、女の子の心を引きつけるきれいな絵柄が考案され、のどかな数え歌で調子をとりながら遊ばれるようになったと言われている。江戸時代になると、役者の似顔絵や美人画の押絵を施した装飾品としての羽子板が現れ、今でも日本橋や浅草の羽子板市が特に有名である。しかし、戦後の我々の頃は、1枚の板にきれいな絵が描かれたものであった。男の子でも一緒に羽根つき遊びをした。



美しい羽子板で、鳥の白い羽に黒い丸いおもりをつけた羽根を空中へ打ち上げて遊んだ。羽を落ちした者が負けである。狭い路地では羽子板遊びのカンカンと気持ちの良い音がした。

羽子板で遊ぶ「はご板」は、表に絵が描いてある一枚の板であった

手毬（てまり）：戦後、よく弾むゴム毬がおもちゃとして普及してからは、女の子達は、正月だけでなく、年中の遊びとなった。毬をリズミカルに弾ませて、一緒にさまざまな歌が歌われた。歌の最後でスカートで手まりを隠したり、後ろ手に取ったりなど様々な「フィニッシュ」をとった。



1950年代までは、路地で手まり歌を歌いながら毬をつく少女の姿が見られたものだが、路地にも車が入るようになり、また、テレビが普及して、子供が戸外で遊ぶことが少なくなったと思っていたが、今は室内遊戯となっている。

(ネットでみる美しい毬)

手毬で、よく歌われた歌詞

あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ 船場（せんば）さ
船場山には狸がおってさ それを獵師が鉄砲で撃ってさ 煮てさ 焼いてさ
食ってさ それを木の葉でちょいとお隠（かぶ）せ

お手玉遊び：おてだま（御手玉）は、小さな布袋に小豆や米、ジュズダマの実などを入れ、数個を1組にして縫い合わせた“手玉”的こと。



それを使って遊ぶ。戦後の女の子同士で遊んでいた。昔から、母から娘、孫へと、作り方や遊び方が伝承されたものだったという。しかし、1970年代ころから核家族化が進行するとともに、母から子への伝承が難しくなり、徐々に忘れ去られていった。現在では小学校などを中心に、日本の伝統的な遊びとして受け継がれ、老人クラブなどで、お手玉遊びをしている光景もみることがある。

かるた遊び：「いろはがるた」は、江戸時代後期に子供がひらがなやことわざや生活に必要な知恵を、遊びながら覚えられるようにと一種の教材として考え出された。



初め、京都で生まれたと言われているが、後に大坂や江戸でも、それぞれ特色のあるものが作りだされ、広く子供の遊びになったという。昭和の時代から、正月の家で遊ぶ習慣が広まった。戦後の私達の「いろはかるた」は、「い」は、犬も歩けば棒にあたる。「さ」は、猿も木から落ちる。と教訓かるたであった。いまでもいくつか覚えている者が多い。



いまでは、幼稚園、小学校で、かるた遊びが行われている。かるたは、コミュニケーション、言語力、記憶力、反射神経など総合的能力を高めるとされて推奨されている。

すごろく遊び：



東海道 5 次宿すごろく

すごろくは、室町時代には一般庶民にも広ろがったが、やがてすたれて、さいころだけが、とばくに使われた。江戸時代にそれを簡単に遊べるように工夫した絵すごろくが考えだされ、人生や旅の「出世すごろく」や「道中すごろく」ができて、子供の遊びとなつた

戦後の子供達は、さいころを振って東海道 53 次すごろくで、よく遊んだ。箱根の関所で、すごろくが止まると最初にもどった。箱根関所で問題があった者は、「江戸返し」という制度があったためと言われている。

どんど焼き（道祖神）：どんど焼きは、小正月の 1 月 15 日の行事で、正月の松飾り・



注連縄(しめなわ)・書き初めなどを家々から持ち寄り、一か所に積み上げて燃やすという、日本全国に伝わるお正月の火祭り行事である。神事から始まったのではあるが、戦後、宗教的意味あいは少なくなっていた。一般的には、浜、田んぼや空き地に、柳の木や細い竹にさした団子、あるいは餅を焼いて食べるという行事で、1月 15 日前後に行われている。どんど焼きの火にあたり、

焼いた団子を食べれば、その 1 年間、健康でいられるなどの言い伝えもあり、無病息災・五穀豊穣を願った。戦後の我々の頃は、地区の子供達が材料調達から組竹(おんべ)や木、藁(わら)、茅(かや)、杉の葉などで作ったやぐらや小屋(どんどや)を組み、正月飾り、書き初めで飾り付けをした後、それを燃やし、残り火で、団子や餅を焼いて、1 年の息災を祈願した。砂浜で竹などを積んで焼かれた、どんど焼きは、地区によって

違っていた。小八幡では、やぐらや小屋を作り、そのなかで遊んだ。燃やす当日の朝、小学生達は、まだ暗いうちに、「せいとう燃し、こりやつせ、早く来ないと、燃やしやうぞ！」と大きな声を出して歩いた。しかし、藁（わら）でできた小屋に集まるのは、悪い遊ぶ場になるということで学校から禁止されて、どんど焼き作業は親達が行うようになった。酒匂地区のどんど焼きは、山下洋一郎氏が想い出として詳しく記述している。

春の祭り

新学期が始まると、すぐにお祭りがあった。祭日の日は、はっきりと覚えていないが、酒匂には、2台か3台の山車があった。山車は2階建てで小太鼓と囃子の音は、軽やかで懐かしい。子供も大人も声を上げて綱を引っ張った。お祭りの日には授業は半日で、午後から山車を引っ張りで出かけた。休憩場所に飲み物か、食べるものがあった。山車は酒匂地区しかなく、小八幡にはいくつかの班（区）ごとに神輿があり、若者が練り歩いた。ネットで小田原の祭りのところで、酒匂の山車の写真が美しいカラーで掲載されている。いまでも山車ひきの行事が続き、消してほしくない伝統行事である。



酒匂の町で山車を引く

夏休みの遊び

将 棋：雨が降る日の遊びは将棋であった。夏の暑い昼間は、縁側で将棋を指すのが、子達の遊びであった。将棋は、二人の勝負ではあるが、友だち数人が、どちらかについて、アドバイスをしながら進めるのが楽しかった。同学年だと、大体、実力は似ており、勝ったり、負けたりするのも良かった。高学年になると長い夏休みの雨には、飽きずに友達達と毎日のように将棋をさした。

蝉取り：蝉は、梅雨の頃から鳴き出す。最初にミンミンゼミである。か細い声で鳴く。真夏に最もうるさく鳴くのはアブラゼミである、時折、澄んだ声でなくシャン・シャンと鳴くヒグラシ。“ツツツクボーシ”と鳴くのはクマゼミ。クマゼミの鳴き声を聞くと秋を感じた。蝉取りにはコツがあり、鳴いきだした時がチャンスであった。鳴き終わる頃は逃げられた。蝉取りは長い竿の網を付けて捕まえる。捕って籠にいれて持ち帰るが、長く飼うこともなかった、取る瞬間が楽しみであった。モチノキをいう木があり、切り株のヤニがでており、それを竿に先につけたこともあるが、どこにでもあるものでないので、ヤニを使った蝉取りは、あまり記憶がない。蝉取りとともに、トンボ捕りと蝶々捕りと一緒にして、夏休みには、神社の林や畠に入って遊んだ。蝉は日中に、しかも晴れて暑い日によく鳴いたと思います。蝉の殻をみて、長い地中生活の蝉の愛着が湧いた。

盆行事：夏休みの一つの行事には、お盆であった。お墓もないのに、お盆が夏休みの楽しみであった。お盆が来ると農家の家にゆき、腹いっぱい、お寿司やおはぎが食べられた。お盆の盆入り・中日・盆明けがある。お盆になると、お墓参りをして、各家の玄関に提灯をさげて、木造の台に藁で作った馬、果物や花をお供え物とする。お盆には亡くなった人が戻って来ると言われ、子供心にも信じた。16日の送り盆にはお供え物を海に流した。小田原では、旧盆で8月13日が入盆で16日が送り盆であった。

プールの誕生：海での水泳が、いつでも出来なくなり、小八幡の子供達は、国府津駅前の浜にできたプールに通った。海水をくみ上げたもので長さ25mの小さいプールであったが賑わっていた。歩いて20分もかかったが、天気の日には、毎日のように通った。プールは大浴場のように子供であふれたが、皆満足して泳いでいた。しかし、キティ台風で跡形なくなく消えた。

その後、時々、小田原の「御幸浜プール」に行くようになった。昭和22年に50メートル競泳用プールに改造したと資料に書かれており、同年7月1日に、当時の200メートル平泳ぎの世界記録保持者、葉室哲夫選手をはじめとする日本大学水泳部員を招いての完成祝賀式が行われた。古橋が世界新記録を出した後に、古橋と橋爪選手が来ると新聞報道があり、近所の子供達が集まって見に行った。しかし、昭和24年（1949年）この施設も、キティ台風により全壊してしまった。昭和25年（1950年）に、50メートル競泳用プールが完成、昭和27年（1952年）には、子供用25メートルプール及び幼児用プールが完成した。中学時代まで、夏休みの楽しみの一つが「御幸浜プール」に行くことだった。

小学校の思い出を綴る

小学校時代

大野 正夫

満州から小八幡へ：昭和 15 年 11 月 29 日に満州の錦州市に生まれた。終戦の年、20 年 10 月に中国の動乱を恐れて、南満州鉄道（株）満鉄社員の希望家族は 1 列車を特別編成して奉天（瀋陽）に避難した。21 年 9 月満州引揚の拠点港のコロ島とから博多に上陸して、引揚者列車で小田原に着き、母の実家に同居した。母の実家は箱根細工の工場を経営していたので、作った箱を父が箱根から静岡市内まで、土産物屋に売りに歩き、帰りに食糧を買ってくる苦しい生活であった。翌年 4 月まで小田原城の近くの本町ですごした。

本町小学校入学から酒匂小学校へ転校：小八幡へ引っ越しへは 22 年 4 月の半ばであった。小田原城の堀の外にある本町小学校に入学して間もない時であった。入学前に小八幡に移る予定だったそうだが、家を修理して住める家にするのに日が経ってしまった。引っ越した家は、“小八幡境”バス停で降りたところである。その頃は、国道は 2 車線のアスファルト道路ではあったが、広く堅く固めた砂利と土で敷き詰められた広い歩道があり、家屋と道の境もなかった。垣根のある家は少なかったように記憶している。江戸時代からの街道の風格がある道であった。

中学時代に 1 号線のアスファルト工事が何年間にも渡って続いた。深く掘り起こされたアスファルト（コンクリート）の厚さが数 10cm もあり驚いた記憶がある。これでは“戦車”も通れると妙に感心した。当時の乗り合いバスは木炭車で、うしろの薪を置くため座れるスペースがあり、大きい子供達が乗るのを見た。国道には、商店はほとんどなく、いくつかの鍛冶屋、雑貨屋や自転車屋があるだけであった。ほとんどの家は同じ大きさのたたずまい、庭は家の裏側にあった。

引っ越した家は、国道から幅 2m ほどの細い路地を下って 5 分ほどところにあった。その頃の家を結ぶ道は荷馬車が通れる幅で、どの道も狭かった。国道は広い砂浜から小高い砂丘になったところの上に作られて松林が防風林になっていたのだろう。多くの家は、わずかな坂道を下りたところに整備された配列に建てられていた。今もその頃の道とほとんど変わっていない。引っ越した家は、長い間、空き家であった。その間に誰かが多くのものを持ち出していた。畳や玄関の扉などがなく、隣町の国府津の古谷家（実姉と叔父）が、いろいろなものを集めてくれた。叔父は国府津町出身で、新制中学の大田区の中学校の英語教師をしていた。古谷家も戦災に遭って東京からの疎開者で、昭和 27 年に大田区蒲田に新築の家を建て移転した。

国府津から畠、雨戸と玄関の扉などを調達してきて馬小屋より少しましな家となり、ここに一家が住むことになった。その後、近くに住む人で、元大工で国府津駅職員となった高橋さんが休みの日に、窓の改修や建て増しなどをして、だんだんと家らしく3間の部屋になり土間が広かったので、炊事場、風呂場ができ、残りのところは、後に駄菓子屋になった。

同級生：我が家の家の周りには同級生が多かった。家のうしろに平岡広吉君、前の家は父親が魚の行商していた大木将義君、その前の家が鈴木武君、二軒離れた家に伊東司君、国道沿いには、床屋の峰尾寿君、少し離れて内田潔君、道路を隔てて平野菊代さん、小八幡境のバス停にところには内田政則君、家の裏を少し歩くと、瀬戸伊三男君、家の田圃の方へ勝又久義君、譲原盛喜君と譲原サダ子さん、譲原久香さんがいた。久香さんの家は、密集した住宅から少し離れた田圃道を行くとあった。そこに同級生がいるとは思わなかつたが、2年の頃と思うが、彼女のお琴の演奏を2階の大教室に学年全員が座り聞いた。確かに着物を着て演奏したと思うが、食べるのがやつとの私達と違う子供もいるとの思いで聞いた記憶がある。その後も、久香さんとは小学校ではクラスが違い遊ぶこともなかつたが、中学生になると話すことも多くなつた。この同窓誌を編纂していくと、久香さんから写真が届き、学芸会であったことを知つた。



学芸会：琴（2年生久香さん）と独唱（1年生二見さんと小島さん）
後列は左より先生方と3人の母君（写真水谷久香さん提供）

酒匂小学校：小学校は、家から歩いて 10 分くらいであった。田圃と畠の細い道を縫つて歩き、途中から小川に沿って歩いたところにあった。その頃の道は雨が降るとドロドロになり長靴で通った。校舎は小八幡地区と酒匂地区の境界にあった。黒光りした 2 階建ての大きな校舎で、L 字になった角の部屋が 1 階は音楽室、二階は大部屋になっており。下級生は一階であり上級生は二階であった。1 年生の時は西側であり、2 年生は東端で、午前中は陽が射さず寒い教室であった。

毎日教室と廊下を雑巾拭きした。雑巾は家から 1 枚持ってくることになっていた。夏の雑巾ふきは、それほど苦にならなかったが、冬の雑巾がけは、つらい作業であった。

本校舎の隣に 2 棟の平屋の建物が渡り廊下でつながっていた。工作室・特別室・集会場で学芸会や卒業式は、ここで行われた。その裏に学校所有の畠があり、1 年生、2 年生の時は、授業でサツマイモ堀りをした記憶がある。校庭は広すぎると思うほどであった。校庭の入り口に楠木とイチョウの木があり、いまでは大木になっている。楠木の周りは、砂地で相撲などの遊び場となってい

1 年生の 4 月、小八幡に来た直後、「クラス全員の集合写真を撮る」と先生から言われて、急いで家に帰り、小学校の入学ために新調した服に着替えて集合写真を撮った。玄関横で二宮金次郎の銅像の前で撮られた写真は、顔半分しか写っていない母に笑われた。ほとんどの生徒は普段の服装をしていた。この写真には、戦後間もない頃の子供たちの日常の生活服・通学の服装がよく撮れている。多くの生徒は下駄履きで、今からみれば身すばらしい服装であるが、明るい笑顔が印象的である。

1 年生の担任は年配男性の山口武男先生であった。まだ校舎には中学生がいたので、授業は 2 部授業で、午前の日と午後の日があった。1 年生の時は授業を熱心に受けず、思い出に残る授業の記憶がない。上手な絵や習字が後ろの壁に張られたが、自分の絵や習字が張られた記憶もない。夏休みや冬休みの宿題は姉がやってくれた。通信簿は、算数だけ「優」であり、ほかは全部「良」であった。「怒られるか?」と恐々みせたら、両親とも「算数ができればよい」と言った。

2 年生は、最初は増田昭一先生であったが、途中から背の高い美しい橋本(後に大木)京子先生に替わった。12 月にはクリスマスの会をやった。「聖歌」(きよしこの夜)を練習して、クリスマスツリーを作り、先生はクリスマスについて説明された。雪の中でトナカイのひく櫂にサンタクロースが乗っている絵を見せられて、外国にはこんな行事があるのかと思った。これも GHQ の教育方針、新しい学校教育の一環だったのだろうか。「聖歌」の歌を聞くと、この時のこと思い出す。

3 年生から 4 クラス編成になり、橋本先生を中心に立ち、座っている生徒から肩を組んでいる生徒がいる集合写真がある。田中克君、片桐努君、木村達雄君と私が肩を組み、皆、笑顔をしており、「二十四の瞳」の映画に出てくる写真のように思い出深い写真で

ある。この時の前に書かれている立札には3年4組となっている。この写真には、同学年を担当した全員の橋本（大木）京子先生、増田昭一先生、梶塚カツコ先生、田代（増田）美智子先生方が立たれている。3年生の時は、幾人かの先生が交代で授業をしたようと思うが記憶がはっきりしない。

食糧難の時代：小学校1年生の頃、昭和22年は食糧事情が極端に悪く、すべての食糧は配給制で、米がなく、さつまいもがほとんどであり、砂糖ばかりの時や小麦粉の時など、いい加減な配給をしていた。砂糖ばかりの時は、水を入れてカルメラというスカスカの菓子を作ったりした。小麦粉ばかりの配給の時は、父は手製の熱の出るニクロク線を買ってきて蒸す機を作り、蒸かしパンを作って食べた記憶がある。その年、カルメラや蒸しパンを作って、真鶴の海岸に家族で1日ピクニックに行った。貧しい配給時代に、あるものをもってピクニックに家族で行ったことを懐かしく想いだされる。

父は、母の実家の工場で作る箱根細工の行商に出かけるので、毎日、麦と米粒の入った弁当を持ってゆくが、弟は3歳で、満州からの引揚げの時に十分は栄養が取れなかつたのか身体が弱く、微熱がでたり、下痢が続いたりしていた。そのため父の麦御飯の残りを食べていた。母に「お芋は嫌だよ！」と、よく言っていたと母は、後に話してくれた。その時は、姉も私も弟がうらやましかった。食べ物の足しにと、遊ぶことよりも食料探しで、田圃にいってタニシ、アメリカザリガニ、カエルを取り、川でドジョウすべりが子供の遊びの日課であり、天気の良い日は、学校から帰るとすぐに近所の子供が集まって出かけた。田圃や細い用水路には、フナやドジョウがいて、数人で堰止めて水をかい出し、一毛打陣に捕った。当時コンクリート張りの川はなく周りの土手の土を崩して堰止めにした。お百姓さんは困っただろう。タニシもアメリカザリガニもバケツいっぱい捕れた。農薬がなかった時代だ。大学時代に友達の誘いで上野駅の近くのドジョウ料理屋に入ったが、ドジョウはきれいな川にはいなかったので、それを思い出てしまい、うまい料理とは思わなかった。ドジョウの多くは下水が入る浮泥の川底のなかにいた。一番うまいのは食用ガエルであった。食用ガエルは大きい子供達が捕まえたが仲良く分配した。この腿肉は柔らかく最高の味であった。

家から10分くらいのところに、子供達は「おおせぎ」と呼んでいた大きな用水路である。川の名前がないので、地図で「おおせぎ」の上流をたどったことがあるが、はるか遠方の松田町で酒匂川とつながっていた。所々に堰があって小さいプールになった。水泳の良い練習の場であった。堰で水に流れに押し流されるのも楽しい遊びであった。上級生が指導し、1年生の夏には泳ぐことを覚えた。泳法は昔流で、中学校に入るまで、クロール泳法は知らなかった。父も一緒に泳ぎ、溺れることがないことを知った後は、川遊びは心配をしなくなった。そこで、ミミズを探して、川釣りもしたが、釣れた思い

出はない。ミミズもきれいなところには少なく、フンなどがあるところにおりミミズ取りが嫌いであった。「おおせぎ」の向こうには空襲を受けた広大な軍事工場があった。焼け落ちた建物があり、多くの爆弾で掘られた堀があった。いまは栗田鉄工（株）なつており列車の窓から、そこに目を移すと、瞼の奥に昔の光景がよみがえる。ある時、子供がおぼれて亡くなる事故があり、バラ線の柵ができてなかに入れなくなってしまった。バラ線から中をのぞき落胆した。バラ線を切れば入れたが、それほどの勇気もなかった。

小学校2年くらいまでは、いつもお腹をすかしていて、家に帰ると「お腹がすいた」と一言いった。しかし、毎日が楽しかった。近所に住む兄さん達が可愛がってくれ、近所には同学年の遊び友達も多く、いろいろな遊びを考えだし、生涯、一番いろいろな遊びをした2年間でなかつたかと思う。母に、「暗くなる前に家に帰るように」とよく言われた。このよう自然のなかでの遊びながらの覚えた草や木の名前、それらの育ち方など、大学で生物学を学んだ時に、よく思い出した。“生物”が好きになった原点は、この頃の遊びであったように思う。日曜日の夕方家に帰ると、ラジオから古川ロッパの声の「鐘の鳴る丘」の連続ドラマがあり聞いていた。戦争孤児がたくましく生きる物語で、奉天、満州引揚げの頃のことを思いだした。当時、1歳年上で横浜育ちの「美空ひばり」に親しみを感じて、よく彼女の歌を聞いた。

ウサギを飼うことを2年生の時に始めた。学校が終わるとうさぎの餌の草を取りに、竹で編んだ丸い籠を背負って、斜め前の家の哲夫ちゃん（5歳上）や隣の翔ちゃん（さらに年上）と3人で、道に生えている柔らかい草を刈り、かなり大きな籠いっぱいにして帰宅した。数日の餌の量だったと思う。うさぎの好む草は柔らかいものであり、ジシバリ、レンゲソウ、タンポポ、ハコベのようなものを選んで籠いっぱい刈り取った。オオバコは道端に多いが、硬いのでウサギは好まなかつたので、あまり取らなかつた。草刈などの日課は、天候やウサギの餌の残りの量で決めた。うさぎは半年飼うと、かなり大きくなり、それを売つて、“小遣いに”と母から渡された。冬には緑の草がなくなり、夜明け前に家を出て大根の葉を少しずつわからないように刈り取つて餌にした思い出もある。レンゲの茂る頃は、レンゲ畑にゆき、わからないように適当に間引いて刈り取つた。姉が陣頭指揮をとり、取り方を教えてくれた。レンゲ刈り取りは、すぐに籠一杯になりウサギの好物であった。その頃の季節には、空から鳥の声が聞こえて、レンゲ畑に寝転んで空を眺めて楽しんだ。

哲夫ちゃん、翔ちゃんの二人の兄さんは、歩きながら男女関係の話などをよく話していた。理解に苦しむこともあったが、案外、話の内容は理解でき、楽しく聞きながら後ろを歩いた。秋になると、近くのお寺、三宝寺にイチョウの大木があり、銀杏拾いである。銀杏取りは子供達の競争であり、まだ、夜が明けないうちに、懐中電灯をつけて姉とでかけた。お墓の中の細い道を通るので、気持ちの良いものはなかつた。熟れた実は、

指にかゆみがでる。イチョウの実をバケツに入れて持ち帰り、それを布袋にいれて庭に埋めておく。かなりの日数が経つと腐っており、よく洗ってほして、白い銀杏になる。冬の間、おやつになったりもした。大人になって銀杏の価格をみて高いのに驚いた。

農家の手伝い：我が家の前の家と裏の家は農家で、広い田圃を持っており、田植えや稲刈りを手伝い、白米のご飯をお腹一杯食べさせてくれるのが楽しみであった。田植えは、子供にもできて、小学校では借り田圃を持っていた。田植えが授業として行われた。草取りも生徒がやった。稲作り授業は3年生になる頃まで続いた。校舎の空き地には、芋畑があり芋掘りも授業中に行った記憶がある。秋になると、イナゴ取りがあった。取り網など渡されず、幾人かが袋を持っていた。イナゴは湯でられて無理矢理食べられた。しかし、まずかったという記憶はない。乾燥したエビを食べているようであった。稲刈りもクラス全員でやり、収穫祭のような催しがあり、おむすびをもらった記憶がある。

冬には農家の麦畑の若葉を踏むことも行い、その度にごちそうをもらった。当時の農家は、毎日、白いご飯を食べているのが羨ましかった。時々、農家のおばさんが白米を分けてくれた。時には野菜ももらった。貧しさのなかにも寄り添って生活していた時代であった。

広い浜と定置網：国道の向こうは、広い砂浜であった。そこで野球をしたり、砂山を作ったりして遊んだ。澄んだ青空の時には、伊豆大島がみえた。「向こうは佐渡」でなく、「大島だ！」と言いながら遊んだ。夏休みには、毎朝、ラジオ体操があり、首にぶら下げたカードに印がつけられた。海岸に打ち寄せる波は大きかったが、波が打つ前に飛び込むのが、遊びのひとつであった。背の立たない深い所でも泳いでいたが、水難事故があり、3年生の頃から、泳ぐ場所が決められてしまった。

小八幡の浜には、大きな木造漁船が並んで定置網魚市場があった。普段は、浜に並んでいる木造船は遊び場であったが、ブリ（鰯）が捕れる冬場は、遊ぶのではなく、鰯を運んだ。鰯は大量に捕れると人手がほしい。子供も手伝った。船が浜に上がると、船から鰯を砂浜に放り投げる。後に、これを“砂かぶり鰯”と言うことを知った。相模湾沿岸は、砂浜が続き定置網漁は、大型漁船で捕獲したものを、砂地にあげる漁法であった。リヤカーなどは、砂浜に入れないので女・子供が砂かぶり鰯を一匹ずつ持って市場に運んだ。定置網にはいろいろな魚が入っている。手伝った子供達には、それ中から食べられそうな子魚をくれた。この季節になると鰯の“あら焼き”が、毎日のごちそうであった。今でも“鰯のあら焼き”を食べる時に、子供の頃の鰯を持って砂浜を走ったことを思いだす。後に浜揚げはなく漁船は浜に置かていたが、漁獲したものは小田原漁港に揚げるようになったという。その頃から小八幡の町から漁業者の家は少なくなった。

城山の開墾地と栗拾い：引揚者には、小田原高校裏地の雑草地を借用期間決めて貸し、畠にしてよいということになったようだ。父は、早速、リヤカーを調達してきて、家から山に行き、サツマイモ畠を作った。3年間くらい畠仕事をしたであろうか。休みの日には父が自転車でひくリヤカバーに一家が乗って、ピクニック気分でさつまいも畠に行った。その場所を小田原高校時代に探しまわり、記憶をたどると今的小田原高校のテニスコートのところであったと思う。食糧事情の苦しい時代で、このサツマイモ掘りの仕事は楽しかった。特に夕暮れ時に夕日を背に、掘り起こしたサツマイモを集め小山にして、満足感を味わった。

家から歩いて30分くらいで、国府津の山に行けた。秋に栗の実が開く頃、姉や弟や近所の子供達で、毎年栗拾いを行った。栗畠であるが圃いもない。みかん畠でもあったが、やはり圃いなどなかった。栗を拾い、みかんも取り食べて帰った。途中、その持ち主に見つかり、「手を出せ」と言われ出すと、「みかんを食べたろう」と言われ、げんこつを貰い許してくれた。子供が食べる量はしれているので、それほど怒られずに許してくれた時代であった。

学校給食：2年生の頃から、学校給食が始まり、脱脂粉乳（粉ミルク）とラクビー型コッペパンにマーガリンが昼食に出るようになった。粉ミルクが米国からの供出品で匂いがあり、まずいものであった。供出する側も脱脂粉乳はうまいものができないことがわかつっていたが、タンパク質は十分にあったということで、決められたと記録されている。鼻をつまむほどの臭いであったが、毎日出るもので我々の健康には良く、今考えるとありがたい給食で、弁当を持ってゆく必要もなくなった。4年生から、給食にくじら肉などの副食もつくようになった。くじら肉は硬くうまいものではなかった。

クラスメイト：3年生の頃まで都会からの疎開生徒が多く、身だしなみはよく、可愛い子もいた。私の隣の席か前かに和田さんという目のくるりとした可愛らしい女の子がいてよく話しをし、初めての親しい女友達だったが、3年生の時に去っていった。

本書の表紙の大木先生の左にいる女の子である。男友達では成績が良く可愛い天野君がおり、よく彼の家まで遊びにいったが、この子も3年が終わる頃に東京に行ってしまった。3年の時に撮った集合写真にこの二人が写っており、懐かしい思い出の一つである。その頃の冬は寒かった。暖かい服がなかったからであろう。朝、学校につくとみんなで「押しくらまんじゅ」と言って日当たりのよい壁に並んで、体をこすり合わせて遊んだ。温かい靴下もなく、しもやけになり足の先がかゆくなつた。今の子供達には、”しもやけ”は知らないであろう。

2年生の頃までは、食べものを得ることが遊びであったが、3年生頃から食材探しの遊びはしなくなった。しかし、家で勉強するようなこともなく、1組小八幡グループの“遊び友達”、いわゆる、いたずら友達のリーダー格・峰尾君の参謀として、遊びの手順を考える毎日となった。ほかの同学年生（3クラスあった）とクラス対抗の喧嘩をしようと言うことになったこともある。殴る経験がなく、ボクサーのようなスタイルができず家で練習をしたが、子供達と殴り合いの喧嘩をした記憶はない。クラスのなかでは、酒匂には成績の良いグループがあり、我々は“ワル小八幡グループ”であった。しかし、いじめのようなことはせず、脚の悪い子や身体の弱い子も仲間に入れていた。放課後数名の友達で、夕方遅くまで、海岸で遊び、川に行きシジミ採り、いろいろな遊びを考えだした。よその家の柿、ビワやみかんなども取り、金魚養魚場で網間から金魚を捕つたりして遊ぶこともあった。鯉養魚池での魚釣り（網の間から）には、よく行った。田圃への土壁の細い用水路をしきり、魚からエビまで捕る遊びもよくした。峰尾君と2人脚いたずら仲間、小八幡グループは6年生まで続いた。小八幡でひときわ高い1本松がある漁場前バス停留所に近くで、浜に面した熊沢君の家に遊びにゆき、よく渚で砂を盛り上げて夕方まで遊んだ。その頃、堤防工事が行われていた時で、工事現場を見るのが楽しみで、行ったのかもしれない。できかけの堤防は小山になっていた。てっぺんまで登ったり、降りたりして遊んだ、工事現場と砂浜の仕切りもなく、今よりのんびりとした工事であった。堤防工事場が遊び場になっていたが、今考えると砂山での事故もあり得た。仲間に朝鮮人の同級生がおり、活発で元気な子であった。彼の家は“どぶろく”をで造って売っていた。彼の家にもたびたび遊びに行ったが、彼は、後に朝鮮に帰っていた。北朝鮮が帰国を奨励していた時だったと思う。活動的で賢い子だったので、今、どのような生活をおくっているだろうか。

6年生になると、小八幡グループとともに、さらに遊び友達が多くなり、日曜日などは酒匂グループや印刷局官舎の住んでいる山田敏夫君、片桐勉君の家にも遊びに行った。毎日、暗くなる頃に家に帰り、リンゴ箱を机にして宿題をした。別のクラスの同級生とも親しくなった。小八幡境のバス停にある内田正則君、国道に沿った家の内田潔君、鈴木紀雄君、塩海洋介君、小八幡八幡神社の近くの鈴木捷弘君、鉄道官舎の譲原嘉久君、関田順一君、稻毛孝行君などと、学校から広い用水路に沿った道を、ワイワイと話しながら帰った。

キティ台風：小学校3年の時、昭和24年8月31日に小田原に上陸した。東京から関東地方に大きな被害を出した。東京では多くの河川が氾濫し、135名の死者が出たと記録されている。関東地方では、戦後最大の台風被害であった。小田原西部上陸記録は午後9時で、横浜で瞬間風速32mとなっているので、小田原はもっと強い風速であっただろ

う。まだ、堤防が海岸線に築かれていなかった頃で、国府津の叔父が、避難するように迎えにきてくれた。夕方で風はそれほど強くなかったが、「おおせぎ」が、橋の下まで川の水がきていたのを覚えている。何の荷物ももたずに出たので、恐ろしいことが起こるような緊張感が走った。翌日、家に帰ると、家は何もいたんでいはず安堵したが、近所のおばさんから、高潮が道路を越して家まで海水がきたと言われた。台風が去った日は9月1日であったが、学校が休みになり国道に沿って国府津の川まで歩いた。道路より海側に建てられた家の多くは、被害があり、「おおせぎ」川の流出する小八幡と国府津の境界あたりの区域は、河川の水と高潮のためか、道路までの家はほとんどなくなっていた。この台風の後、数年以上かかって堤防が築かれた。堤防のために、白砂青松といわれた小八幡の浜は、半分ほどに広さになってしまった。その後、さらに海側に西湘バイパスができる、遊び場であった広い砂浜は、全く消えてしまった。

授業の仕方が変わる：3年生になると4クラスになり、クラスの椅子をいくつかのブロックに分けて座り、このブロックごとに班長となる者が決められた米国式グループ方式の教育が始まった。いろいろな役の委員も決められた。図書委員、購買委員、美化委員などが思い出いだされる。

小学校には2年生の時まで級長という制度があったが、3年生頃から級長という制度がなくなったようだ。クラス全員の選挙で、幾人かの委員が選ばれて、話合いでクラスが運営されるようになった。級長に当たる委員は、二人で男子と女子の学級委員と呼んだ。学級員は先生が来た時に号令をかけていたようだ。しかしブロックに椅子を並べての授業の仕方は1年間で終わった。1年間の試験的授業だったのだろうか。4年から、以前のように二つの机を連結した机配列になった。

増田昭一先生：小学校2年生の担任であった増田昭一先生が、3年の時は途中より1組の担任になり、私は4組になり橋本京子先生が担任であった。4年生で1組になり再び増田先生が担任になった。しかし後半は田代琴子先生となった。2年生から4年生まで教わったことになる。2年生の時は、詰め入りの学生服（後に海軍兵学校の制服と聞かされた）で授業をされ、大柄で目が大きく熱血漢といった先生であったが、4年生の集合写真では背広姿で写っている。増田先生の授業は、大きな声で話され、きれいな字で授業の板書をし、教壇の上をよく歩いていたように記憶している。授業内容のこととはあまり記憶がないが、授業から離れて満州の戦災孤児の話をされた。シベリア抑留者の話もされた。多くの生徒には記憶がないかもしれないが、満州からの引揚者の子供で、戦災孤児が同じ歳だったので、「自分だったら」と先生が話されたことが強く記憶に残っている。その時、先生は声を落とされて静かに話されていた。増田先生は演劇の指導

に熱心で迫力があった。熊沢君、山下君、片桐君、活発な女子生徒の小田さん等が、学芸会で主要な役をしていた。私は周りで、演技者の練習を眺めていたが、「どうしてあのようにうまく表現できるのか？」と不思議に思った。私は音痴で、学芸会でクラス全員の合唱練習の時でも、いつも舞台の後ろに並ぶ癖がついていた。

和田謙二先生：5年生と6年生の担任は和田謙二先生であった。後に、田代琴子先生と結婚され、田代の姓になった。6年生になると、どの科目的試験も高得点で、隣の席の学級委員で女子生徒のなかのリーダー的存在の小田和代さんと比較しても、試験の点数は彼女とほとんど差がなかったが、通信簿を見せてもらうと彼女の通信簿は最高点の5ばかりであった。「自分の通信簿は4ばかりである」と母に愚痴をこぼした。

母はPTAでの面談の時に、試験成績と通信簿評価の違いを和田先生に尋ねたら、和田先生から「このクラスの男子生徒は出来る子が揃っているので、大野君は運が悪い」と言われたそうだ。母は「通信簿は運で決めるのですか？」と尋ねたら、先生は何も言わなかつたそうだ。しかし、その次の通信簿には、「5」という最高点が並んだ。確かに1組の男子生徒には、木村君、山下君、片桐君、伊藤君、山田君、鈴木正一君がおり、男子は5人しか「5」がつけられない。彼らと自分の試験成績とは拮抗していた。自分は、小八幡“ワルの仲間”で2番手である。先生の言われる事は理解できた。今考えると、通信簿の付け方には矛盾がある。できる生徒が多く揃うクラスは、試験で高得点をとっても、点数が拮抗しておれば、「5」がつけられない者も出てくる。比較評価法は新しい表示法かもしれないが、その矛盾を母は指摘した。

担任の和田先生は大きな目に丸い黒縁の眼鏡をかけていて、通信教育で法政大学に通っていたようで学生服で授業を行っていた。ピアノが得意で授業で我々に教科書にない歌を歌わせ、ベイトーベン、ショッパン、モーツアルトなどのレコードを聴かしたりした。

私は図書委員で、図書室に入る新刊の講談社の「世界名作全集」を他人より先に借りることができた。6年生になると、毎日、昼休みには、ひとり教室にいて、新刊本を遊ばずに読んでいた。ある時、先生が近づいてきて、「大野君、小説ばかりでなく伝記の本も読むように！」と言われた記憶が残っている。目障りな子であったのかもしれない。

ひとり、教室にいたのは、左効きでボールを扱う野球やソフトボールが嫌いで、当時はドッジボールを、皆が休み時間にしていた。ドッジボールをしたくないので、外になかっただけであった。

和田先生は、PTAに集まったお母さん達を相手に、毎回、長時間にわたって「教育論」を講じ、母は「あの先生は変わっている」と言っていた。国語の時間には教科書から離れて、1時限かけて石川啄木や島崎藤村の話をし、興味深く聞いた。石川啄木のことが

記憶に残り、大学時代に大金をはたいて、岩波書店刊の石川啄木全集を購入した。後年、和田先生は二宮金次郎の本を出版するなど、郷土史研究者として知られた。

柿泥棒：和田先生の忘れない思い出は、5年生の秋、峯尾君と二人で柿畠の柿を取り、見つかり、その家まで連れてゆかれ、ひどく怒られて担任の先生の名を聞かれた。「酒匂小学校の和田先生」と答えた。その時、捕まったのは、私、ひとりで峯尾君は逃げてしまっていた。

それから、数日して授業の時に、皆の前で1時限いっぱいの時間を使い、この柿泥棒のはなしをした。“いたずら遊び”と“他人のものを盗む”ことは違うと、いくつかの事例を挙げて説明した後、無断で物を取ることは良いことではないと、“柿”という言葉を出さずに話をした。良い子と思われている者にも油断がある。「日頃の行為には絶えず注意せよ」と話された。たぶん、私と峯尾君以外は、「よその家のものを黙って取るな」と理解しただろう。まだ、充分に柿もミカンも食べられなかつた時代であった。先生は、その後も、このことは私には一言も言わず、かえって、私自身には強い悔恨の念を残した。よい教育者だった。

駄菓子の買い出し：4年生の終わりの頃、箱根細工の箱ものが、セルロイド製品が出回り売れなくなつた。そこで、父は露天商人になりお祭りをまわつて歩いた。学校をサボつて、父と平塚のお祭りに行き、花火をみたことが懐かしい。露店商人は、映画“男がつらいよ”的キ屋である。いま、思うと、「かなり焦ったのか、あるいは父らしく、あのような仕事をしたかったのか」と考えてしまう。露天で売るのは、飴、せんべいなどの駄菓子や造花など。玄関先で飴や煎餅を売り始めたら、密集した住宅街のなかの路地だったが、近くに駄菓子屋が1軒もなかつたので、父の露天での売り上げより家の売り上げの方が多い、母は“路地裏の駄菓子屋”を始めた。その仕入れに小田原市内の問屋に買い出しに、私が自転車で行った。自転車も大人用の大きなものしかない時代である。

我が家、駄菓子店前で正夫（5年生の夏）、弟と姉

酒匂川を渡り30分ほどの距離であったが、土曜日の午後か日曜日や休日に出かけた。夏は暑かったが、それほど苦にならないで出かけた。12月の冬休みには連日行った。ジングルベルの音楽の流れる街中を走り、正月に売れる品を売る「問屋」が青物町にあつ

た。そこで、うしろの荷台が山ずみなるほど家で売る物を仕入れた。今でもジングルベルのメロディを聞くと、その頃を思い出す。夏休み、暮れとお正月は多忙であり、幾度も出かけた。いまでも、「あの時は5年生の頃だった！」と懐かしくなる。問屋のおじさんは、私の注文が確かなこと、そろばん塾で学んだ暗算法で仕入れ額が正しく、「5年生とは思わなかった。ほしいものはないか？」と可愛がられ、プレゼントされることもあった。この買出しは、小学校6年生頃まで続いた。中学生になる頃、駄菓子屋を廻って歩く問屋さんがリヤカーで、後には三輪トラックで品物を持って路地を入り家まで来てくれた。“店の仕入れ”では、帰り路の本屋で、本が買えるのが楽しみであった。母は晩年、「あの時、駄菓子屋を始めなかったら、お父さん一人の収入では、二人を大学にも行かせることはできなかつた」とよく言った。後には、いろいろの問屋さんが配達をしてくれて、店も広げて日常品も置いた。

父は朝鮮動乱時に、新聞広告で米軍横須賀基地の募集をみて応募した。満州時代に英語を学んでいたので、読み書きができ、少し話せたので即日採用となつたという。昭和25年朝鮮動乱の最中、米軍は日曜日に見学日を実施する余裕があった。父は弟と私を連れて軍港内を歩いた。魚雷が道端に飾られていた。船頭が大きく開いたLST艦（輸送船）が父の職場で、日本人雇員の班長をしていた。父は見張りの士官と親しく話していたが、突然、士官が私に、にこやかに手を差し伸べた時には驚いた。

地区の子供達と：小学校6年生になると、地区ごとの班編成が組織され、酒匂地区、小八幡地区をいくつかに分けて、それぞれの班の6年生が一人、班長となった。仕事は運動場、校舎のまわりの掃除、草取りで、毎週1回、2時間くらいの作業を決められた区域を班長の指導で、1年生から6年生まで一緒に行つた。このことで地区の下級生から上級生までが知り合い、共同作業の和ができるという先生方の考えであった。小八幡2班の班長に、和田先生から私に指示があった。そこで家周辺の1年生から6年生までの数10人くらいの子供達と作業をした。先生の指示された作業を皆で行い、終了後先生の点検があった。その頃になるとガキ大将であった同級生の峯尾君は、私の手助けになり皆に指示を与えてくれた。彼は下級生で生意気な子には、にらみを利かせた。私は、あまりいらだつこともなく笑顔で、皆に仕事を分担させて何のトラブルもなく一年間、地区の子供達はまとまった。今になってもその頃の下級生を思い出す。この地区活動は良い制度であったと思う。このことで、家の周辺の子供達の名前を覚えて、登校下校時にはお互いに挨拶をするようになった。

小学校時代は、生涯でわずか6年間であるが、多くの事があった。小学校時代の体験が今の自分を作った。個性的な先生方にも恵まれたことは幸いであった。

幼友達の思い出

大野正夫

M.O君

昭和22年4月、入学早々に、小八幡に引っ越した我が家の前が、同級生のM.O君の家であった。しかし、今は広い空き地のままで、20年あまりも経つ。彼の住所もわからない。

我が家が引っ越してきた時は、広い田畠も持つ農家で、父親は自転車で鮮魚売りをしていた。小八幡は漁村で農業を営む幾人かは、近郊に魚行商をしていた。彼の家は自作農家で、広い庭と大きな家に住んでいた。魚の行商までしていたので、比較的裕福な生活をしていた。父親は、あまり話さなかったが、いつも、にこにこと、我々が遊ぶのを楽しんでみていた。

私はよそから来て、友達もいなく彼と同じクラスでもあったので、最初に親しく遊んだ友達であった。彼は背が高く笑顔のたえないかわいらしい子であった。父親が毎日魚売りに行くので、農作業を母親と姉と3人していた。1年生でも身体は大きく、芋掘りや大根取り、草むしりなど学校から帰るとしていた。稲刈りの時は、広い田圃を持っていて、人手がほしく、1年生でも刈り取られ結ばれた稻を干し場まで持ってゆくことはできた。陽が落ちるまで、彼と稻束を運んだ。薄暗くなる頃、彼の父親が引く木製荷車に乗って家路についた。稲刈りの楽しみは、帰ると彼と一緒に風呂に入り夕食をともにすることであった。我が家では珍しい、魚もついた白米でごちそうであった。収穫期には、幾日か手伝った。

父親は子煩惱であり、彼の小遣いは、我々より格段に多かった。そこで、メンコ（面子）などは、われわれは買えない大きなものをたくさん持っていた。メンコ遊びは、表を裏にひっくりかえす遊びであるが、3歳下の弟は、小さいメンコで大きいメンコをひっくりかえす特技を持っていた。彼に大きいメンコを買わせて、うまく石のある所に運び、ひっくり返してご機嫌であった。取られた彼も、それほど悔やむこともなく、いつもメンコをたくさん持って家に遊びにきた。

2年生になると、ウサギの餌刈りで裏の二人の兄さんとの付き合いが多くなり、O.M君と遊ぶ機会は少なくなつていったが、夏休みは、暇な時間があると彼の家で遊んでいた。思い出に残っているのは、2年の遠足の時に、彼はバナナを2本持ってきた。初めて見る果物で驚いたが、1本を私にくれた。父親が私のために2本買ったのだろう。バナナをどのように手に入れたのか、今でも不思議に思う。普通の家庭では買えない時代であった。ふたりで、恐る恐る、皮をむいて食べたがうまかったという記憶はない。「変

な果物だな」と顔をみあわせた。しかし、このようなものを、父親が持たせてくれたことを思うと、今でも胸が詰まる。

彼が3年生になった時に、父親が胸の病気になり魚行商もしなくなった。彼は母親と農作業をするようになり学校を休むことが多くなった。しかし、今と違って、それほど、学校を休むことを気にしない時代であった。彼は学校を休みがちになると、クラスでも、あまり友達ができなくなっていた。私自身は、遊び友達もふえて、ついつい、教室でも彼と話す機会がなくなっていた。

4年生になると、父親は寝込んでしまい、彼の家に遊びに行くこともなくなった。母から行くことを禁じられたのかもしれない。肺病は治る病気であるが、病院に通っていたのだろうか。父親は5年生の時に亡くなかった。彼には、姉、妹と6歳下の弟があり、家族で畠仕事をするようになった。母から「生活保護を受けているから、生活は心配ない」と聞かされた。学校も休みがちになり、ますます、教室での友達もいなくなっていた。笑顔も消え、つまらなそうに、ぽつんと座っている姿を思いだす。父親が亡くなった頃から、彼は私を避けるようになり、あんなに仲良く遊んだのにと思うことがあった。中学生になると、成績はますます下がったようで、学校も休みがちであった。クラスも3年間、別なクラスであり、彼には友達もできず、弟を唯一の友としていた。

卒業後、八百屋の行商をしているという便りを聞いたが、家にはいなくなり悪い仲間に誘われて、大きな借金を作り、家も畠も売り払ってしまい行方不明であった。家は壊し更地になっているが、問題が絡んでいるという噂があり、空き地のままである。誰かが除草剤を蒔いているようで草もあまりはえていない。最近、同級生の家に、庭の手入れをさせてくれと尋ねてきたのがO.M君だったというので、ホットした気持ちでいる。本来、おひと良しで、おだてられたりするのが好きで、友に誘われて、ゆく道を誤ったのかもしれない。一度、会って見たい幼なじみの友である。

H君

小八幡の我が家から10分ほどの所に、H君がいた。ほっそりとした体格で、細面で目が大きくかわいらしい子であった。家から細い路地を行くと彼の家につく。彼は父親がいなく、母親、子一人であった。お母さんは、子供の目からも品のよいきれいな方だった。戦争中は塩作りをしていたようであったが、1年生で、一緒に遊ぶようになった頃は、粉をひく店を開いていた。小麦粉を作っていたように思う。お母さんは、粉紛れの手ぬぐいで頭を覆い、笑顔で迎えてくれた姿を思いだす。お母さんは時間を惜しむようによく働いていた。H君はひ弱いのに、一緒に粉引きの手伝いをしていた。

当時は、家での手伝いが忙しく、学校に出てこない子が幾人もいた。彼はその一人で、よく学校を休んだ。しかし、頭のよい子で、休みに彼の家に行き、授業で習ったことを

教えると喜んで聞き、算数は一緒に計算をした。学校では明るく、皆と仲良くしていた。

しかし、彼は風呂に入らないのか、風呂が嫌いなのか、いつも薄汚れた着物を着ていた。粉ひきの粉ためか、首が汚れており、薄汚いという印象であった。母に「彼は、もう少し、きれいにしたら良いのに！」と、愚痴をいうと 母は、「親一人子ひとりで、忙しすぎるのだよ！」いうだけであった。そんなこともあって、彼の薄汚れた服装も気にならなくなり、そのままに過ぎていった。よく休むわりには成績はよく、「彼は頭がよい」と皆に思われていた。3年になると、クラス編成で、彼とは別なクラスになり、会うことも少なくなった。ある時、母から、「H君が赤痢で亡くなった」と聞かされた。伝性病であり周辺の家の話題になっていたようだ。彼の母親は下痢と思っていたが、短い期間で亡くなってしまったと聞かされた。気がついた時には、手遅れだったという。現在では赤痢で亡くなることもないのに。当時は、近くに病院もなく、多忙で子供の様子をよくみなかつたのだろう。そんな時代のできごとであった。

その後、粉屋もやめて、家は閉められたままであった。戦後の混乱期でなければ、身体に異常があれば病院にも行き、赤痢で亡くなるようなことはなかつたであろう



瀬戸君代 彼岸花

(遊友展 出品)

脱脂粉乳の思い出

塩海 洋介

私の小学校という思い出すのは、脱脂粉乳と言わされたものである。脱脂乳を原料として、粉乳化したもので製品中の脂肪含有量が低いため、貯蔵性がよく、常温で約3年は品質を保持されると聞いていた。そのため、製品や製菓、食品原料として用途のほか牛乳生産の需給バランスの調整商品目としても利用される。

小学校2年生、3年生の頃だったと思うが、標記のミルクは脂肪抜きの粉ミルクだったので、それに水を混ぜて沸かしバケツ一杯ずつ各教室へもってきた。いくら当時飢えている子供達でも、さすがに喜んで飲む子はいなかった。しかしそのなかで、施設から通ってくるS君は美味しいそうにそれを飲んだ。この話は、あとで書こう。

さて、私は、昭和15年8月10日生まれで、千葉県船橋市で生を受けた。ここは母の出生地で、父は、会社の都合で小田原ではなく、ここ船橋市に居住していたようだ。母の実家は船橋駅に近く、料亭を営んでいたと聞いている。その家のトイレが立派な大理石で作られていたのを憶えている。とにかく、鰯背（いなせ）な商売で、粋なことが好きな母だった。そんな母にとって、足柄下郡酒匂町小八幡へ嫁にきて生活は一変する。

当地、小八幡は相模湾の一角にあり、海はすぐそばで、漁業が盛んな町で、鮒が捕れる3月から4月頃は、浪打際は、鮒の血で赤くした。私の家は、国道1号（東海道）に面していて、坂道をまっすぐ下ったことになり、裏はすぐに田圃と畠、遠くに八幡神社が見えるところであった。昭和15年頃は、そろそろ物価統制も始まり、ものがなくなり食糧も厳しくなる頃であり、母にとっては、多少の我慢は仕方がなかったかもしれない。

だが、この地、小八幡は東京に近い船橋市に比べると、その習慣や近所の付き合い、物事の見方、考え方が多いに違い、また舅（しゅうと）、姑（しゅうと）、小姑のいじめにあい、大変なショックを受けたと聞かされた。何事も封建的で、生活は祖母が約200坪の畠を営み、祖父は機関車の釜焚きで国鉄に勤めていて、決して豊かではなかった。

その当時の小学生は、みじめなもので、校舎の部屋が足りず、授業は午前と午後の2部授業であった。子供心にも2部授業は何となく不愉快で、午後の授業に出かけるのは億劫だった。そんなことは別であるが、登校時の服装も今では考えられないような貧しい恰好で登校していたのを覚えている。しかし、まわりのみんなが貧しかったので、何の違和感もなかった。先生も詰襟の学生服で教壇に立っていて、なんのためらいも感じない時代であった。1年生、2年生の時は、教科書はザラ紙、ランドセルなどではなく、兵隊がつかっていたズタ袋のようなものを肩にかけ、そのほかは、風呂敷き包みで、教科書やノートをもっていったと記憶している。風呂敷き包みは今でも便利なものだが、

腰弁と言って弁当を腰に巻いて登校している生徒もいた。私の家から酒匂小学校まで、約1キロメートルくらいで、道路は2車線で、真中がコンクリートが敷いた道で、両側には砂利や土の歩道があり、またその外側に“どぶ”と呼ばれる側溝があり雨水が流れ込むようになっていた。通学のハキモノは主に下駄で、靴を履いている者は、ほとんどいなかった。しかし、もっとひどい者になると、下駄の歯がスリ減るのを恐れ、下駄を手にもってコンクリートの道路の上を裸足で歩いている者もいて、子供心でも、ここまで、僕約するものかと思って、「すごいなあ！」と感心した。傘は竹作りで油紙張りの日本傘であった。当時、コンクリート道路で、国道1号（東海道）といえども、めったに自動車は走っていなかった。たまに、進駐軍のジープが通るくらいであった。自動車に慣れていない町の人たちは、車道と歩道の区別なく歩いていた。

コメの配給があるとかで、母について、酒匂の配給所へ行った時、米屋の前は大人や子供でいっぱい、ざわついていた。その時、猛スピードで国道を走ってきた進駐軍のジープが、小学生くらいの子供をはねたそうだ。その子供は即死だったらしい。母親が狂ったように泣いていた。その時の米兵の態度は、全く跳ねた子供を人間扱いせず走り去っていったと聞かされた。

日本の子供など虫けらのように思っていたのだろう。米兵達の行動は、いまになると腹ただしいが、当時の子供は無邪気なものだった。ジープが来るとその周りに集まり、ガムやお菓子をもらったものだ。鬼畜米英などと日本政府の音頭で叫んでいた大人達は、昭和20年8月15日が過ぎると“ころっと”変身してしまったのだ。子供心にも日本人の大人の浅ましさが嘆かわしく思えたものだ。

さて、そのにつくき、アメリカさんから、食糧援助が私達の口に入ったのは、小学校2年生、3年生くらいになっていた。昼になると給食当番の者が、2、3人小使い室へ行って煮立ての粉ミルクをバケツ一杯もらってくるのだ。それを柄杓で各生徒に分けてくれた。確かに、当時はプラスチックがなく金属のカップでもらったような気がする。食糧のない時代、そのミルクのようなものを一口飲んで、子供の舌でも旨くないと、皆感じたようだ。それでも、粉ミルク液が、毎日の昼頃運ばれてくると、だんだん、それを避ける者も出てきた。私は、無理して全部飲み干していた。なかには机の上にわざとこぼして雑巾で拭いている者もいた。そのうち、手洗い場にもってゆき、流してしまう子供もでてきた。そのくらい薬のような飲みにくいミルクであった。そんな中で、施設から通うS君は、いつも美味しいようにニコニコして飲んでいた。子供の頃は、まだ、善悪（よしあし）が判らない連中がいる者だ。彼らはとてもひどいことをし始めた。机の上にわざとミルクをこぼすのだ。そしてS君になめさせる。でもS君は、うれしそうにその垂れた液をなめていた。ひとは、こんなむごいことを子供の頃から考え付くということが恐ろしく思えた。私は、子供の頃から小心で、しかしプライドは高く、体力は弱く何も

言えず黙ってそれを見ていた。S君は小学校を卒業して間もなく亡くなったという風の便りがあった。私は、心のなかで善悪や正義感は非常に強く感じるのであるが、身体がいうことをきかない。特別に身体のどこかが悪いわけでもなく、その当時としてはごく普通の小学低学年生だったが、身体が一歩も動かず、その場はじっとその光景をみていただけであった。今考えると非常に悲しいことだ。

だから、小学校時代の楽しい思い出などほとんどない。我が家は貧しかったが、当時は貧富の差など感じたことはなかった。私の家は箱根物産卸業という問屋さんであった。伊豆・箱根が近いので、湯本や熱海の土産物店へ、「こけし」などを卸していた。小田原市内の新玉（あらたま）というところに店を構え、そこから大風呂敷にかわいい「こけし」をたくさん包んでそれを背負い各地の土産物店へと卸した。輸送手段は、自転車と電車しかなく、あとは歩いて運んだ。店が景気の良い時は、2, 3人の従業員を雇っていたようだ。しかし、父は儲かると酒に使い、翌日は二日酔いで起きてこない日もたびたびあったと言う。要するに、朝寝、朝酒で小原章介さんであった。その分、母が荷物を背中いっぱいに背負い、小田原駅から各温泉場や土産物店に運んでいた。毎日、激しい労働で大変疲れたと聞く。特に輸送手段は電車しかなかった時代であった。その頃、朝鮮戦争で景気が上向き、日本全体が活気をもち始めた頃で、行楽地へは、土、目になると乗客を満載して電車が走っていた。そんななかで、気丈な母は大きな荷物を背負い、両手にもいっぱいの商品（こけし）をもちこんで、半ば喧嘩腰で電車の中に押し入っていったと言う。父は、そんな状況のなかでも、いつもの前夜の深酒の影響で寝転んでいたそうだ。私は、母に同情しながらも、小学2年、3年の身体では何も手助けができないかった。悔しかった。父が憎く、けとばしてやりたかった。

母は、よく私に名前の由来について語ってくれた。「洋介」という名前は、太平洋のように広い心をもった一介の人間として一生平凡に暮らしてくれということだった。まだ、太平洋戦争の始まる前に、このような哲学的な名前をもらって誇らしく思った。当時の男の子の名前は、強く勇ましい名前がほとんどで、逆に将来軍隊に入ったら現代のように読みにくい名前だと、ただそれだけの理由でビンタを食らうのがよくあつたらしい。折角生れてきたこの世で、自分の人生をどんな物語に仕上げていこうか？ と小学生時代は、海を飽きずに眺めてぼんやり考えたものだ。商社マンとなって、世界中を駆け巡ること。今考えるとそれをほぼ実現した。

その当時の情報は、ラジオ、新聞、映画で、特に映画は非常に興味が持たれていた。しかし、子供には、そうやすやすと行けないところではなかった。そこで、映画を見に行くと、一つの映画館で同じものを何回もみて、お腹が空いて、フラフラになって家に帰ったが、映画に出てくる食事の風景とは、似ても似つかない食事を腹いっぱい食べて、おいしかったのを覚えている。結局、私は大商社マンとまではいかなくとも、中商社マ

ンとなり、ヨーロッパ、アメリカを渡りあるいは、最後にハワイの駐在員として2年間を過ごした。生涯のなかで、最も楽しい生活を体験することができた。

思い出の一つに、先生から「パチンコ屋の前を通る時は、悪い病気がうつるといけないから呼吸をとめて、素早く通りすぎなさい！」と言ふことを守った。母と一緒に歩いている時、パチンコ屋の前で、足速やに歩く私の姿を見て、「洋介どうしたの？」と言われた。そのくらい、おかしな行動だったらしい。当時、雨後の竹の子のように、小さなパチンコ屋がたくさんでき、国府津の駅前にもパチンコ屋と映画館があり、小八幡にも一軒パチンコ屋があった。大人達の唯一の娯楽は、こうして「軍艦マーチ」とともに、急激に発展して現在に残っている。

小学校時代は、授業中、毎日、先生の教えを、身体を小さくして、おとなしく聞いていた。一方、自宅にもどると変身し、近所の子分どもを集めていろいろ活発な遊びをくり返した。特にチャンバラごっこが好きで映画の時代劇の影響で、最後まで刀（竹製）を抜かず、最後は私が必ず勝つという設定で、チャンチャンバラバラやったものだ。

学校の先生方の思い出を書いておきたい。私達の一番思い出に残る先生は3年生から6年生までの長い間の担当教師である。女の先生、梶塚カツ子先生で、鎌倉師範学校を出たばかりの初々しい地元、酒匂のひとであった。少し、きつい顔をしていたが、涙もろくてやさしいひとであった。体育の時間では、スタイルの良い足とお尻で走り、レクレーションなどもして、おさな心を引いたものだ。特に、私は朝礼の時など、くりくり頭をなでてくれた。たぶん、私の頭の形が絶壁だったので、触りよかつたのかもしれない。先生は、涙もなく、感情的で、クラスの生徒たちが、少しでも悪いことをすると、「皆のしたことは間違っている。正義はこうだ！」と、トツトツと説き、涙を流した。先生が泣いて教えを説いているので、私も悲しくなり、一緒になって涙をこぼした。女子生徒も大半は泣いていたが、男子生徒は平然としている子供達が多かった。私は「この男の子らは、なにも感じないのかなー？」と思った。私の女先生は、性格的に気まじめで、師範学校をでている方なので、国語、算数、理科、音楽、図工などは、皆が理解できるように教え、満足できるものだった。私が最も記憶に残っているのは、低学年の図画の時間に、担任の先生が「大きな丸を描きなさい」と言い、ひとり、ひとりの絵を見回って、私の絵を見て、「これは座布団」と言って、次の生徒へ行ってしまった。「もう少し言い方があるのではないか」と、むなしかった。もっと、いろいろな思い出や体験があったはずだが、70年を過ぎるとほとんど忘れてしまった。

とはいって、幼馴染の鈴木捷弘（かつひろ）君のことを書き残しておきたい。彼の家は、小八幡八幡宮の近くにあり、石垣の堀に囲まれた家で大地主の息子である。友達・同級生は、「かっちゃん」と呼んでいた。いわゆる「良いとこの子」であったが、戦後の苦しい時に、彼がどんな生活をしていたかを話したことはなかった。彼とは小学校1年

生から6年間は同じクラスで、親しく遊んだ。我が家への帰路は、我が家が国道沿いにあるので、ひとりの時は国道を歩いて帰ったが、「かっちゃん」と帰ると時は、裏道の田圃道を帰った。広い用水路があり細い田圃道もあった。トンボや蝶を追いかけ、水の中に入って遊んで帰ることもあった。夏休みなどは、彼の家で将棋を指したりして遊んだ。楽しみは「三時のお菓子」であった。家では食べたことがないものが出てきた思い出がある。

中学時代はクラスが違ったが、英語と数学は同じクラスで、話すことも多かった。彼は大柄で、私は細い体格と対照的であったが、のんびりとした性格など似たところがあった。二人とも運動は得意でなかった。運動部に入った記憶がない。しかし、中学校ではクラブ活動の時間があり、美術かスポーツのクラブに所属せねばならなかつた。3年の時に、二人でソフト部に入った。他校との試合もなく楽なスポーツ部であった。

高校時代は、当時は珍しい「自動車部」に一緒にいた。1台自動車があり、解体や修理をして楽しんだ。高校生では、あまりしてがいけない賭け事、「麻雀」を彼の家で、小田原市内の同級生も呼んで楽しんだ。

彼は東京歯科大学というこの分野では名門大学へ進学した。私は学費のほとんどを、有楽町のレストランで働いて自力で貯め、中央大学へと違う道を歩むことになった。

歯科医の研修期間を終えて、彼は渋谷で大きな歯科医院を経営していた。その後は、お互いに多忙な日々を送ったが、時々、連絡があり交流は続いていた。子供時代から、苦労を知らない生活を送っていると思っていた「かっちゃん」は、糖尿病で2016年に亡くなった。亡くなる1年前に、小学校の同級生と会いたいということで、私が人集めに奔走して、東京で会をもった。どんな生活をしても、“故郷と幼馴染への想いは強いのかな”と、その時に感じた。



スイス・マッターホルン（水彩画）友遊展 出品

小学校の思い出

青木 正勝

台湾で出生から引揚まで

兄弟4人の末っ子として生まれたが、3人の兄達は日本で生まれた。私は台湾の台中内で、昭和45年（1945）2月8日に生まれた。記憶では、近くの公園に日本の戦闘機が駐機して、置かれているのを記憶している。台中市は台湾のほぼ中央部にあり、首都の台北市、周辺の町を合併した基隆（キールン）市に次ぐ第3の大都市、政府直轄都市となっており、現在は約230万人の大都会で観光地でもある。日本統治時代につくられた碁盤の目の広い道路が整備された美しい町であった。

戦争末期に、サイレンとともに防空壕に入った時に、敵機の機関銃のバリバリという音を聞いておびえた記憶がある。そのために、家族で郊外の山間部に疎開した。村には山岳地帯に住む先住民の高砂族、生蕃族、熟蕃族などいくつかの部族が生活をしていたが、私達が疎開して地域には“生蕃族”（せいばんぞく）がいるので、捕まると首を狩られてしまうと言われたことが、かすかな記憶にある。山のなかで、持ち込んだ食糧が少なくななりお腹がすくと、よく近くの木になるバナナやマンゴを取って食べていた。台湾では台北市の総督府や軍事施設の空襲だけであったと記録されているが、台中市は空襲には会うこともなく、疎開地で戦後までくらした。台湾からの引揚は、昭和21年2月から開始された。引揚は台北市に近い基隆（キールン）港から、引揚船に乗り、2~3日かかるって、鹿児島の港にたどり着いた。引揚者は船底につめこまれた。しかも手に持てる程度の荷物しか持ち帰れない厳しい制限があった。船底は、船酔いの吐いた液の悪臭が漂っていたことを強く記憶に残っている。しかし、私は、幼かったせいか、酔った記憶がない。両親から、「船酔いで大変だったの一言につきる」と聞かされた。

父方の里は秦野市三廻郡、母方の里は二宮町であった。身内を頼り、叔父の関本や実兄の二宮に、一時、身を寄せていた。「寂しかったのか、昼寝から目を覚ますと、よく泣く子だった」と、母から、後日言われた。

酒匂に居住

両親があちこちを探して 酒匂4丁目、東海道1号線の海側に入ったところに土地が確保できて、父が家を建てる資材を集めてきて、一人で一軒の家を建てて、家族が住んだ。物資が不十分で、窓はガラスが入っているのは、2枚きりであった。家から50mも行くと海岸であった。砂浜が広くて、休みの日などは、近所の子供達が集まり、三角ベース野球をしてよく遊んだ。砂浜では海水から塩を作る塩田場があり、夏のまぶしい日差しのなか、葦簾（よしず）板が三角形（山型）に組まれて、ポンプで海水が雨のように

降りかけられて、濃くなった海水が大きな貯水槽に流れ込むように循環していた。この塩田場は、キティ台風が来た時に流されてしまった。

小学校入学

引揚げが遅れたこと、居住地が見つからなかつたこと、家を建てるなどと、日が過ぎてしまい、入学手続きが遅れて 1 学年遅れで酒匂小学校に入学した。1947 年は海外からの引揚者が多い年で、その子供達は入学や学年が遅れることは珍しいことではなかつた。入学したら 2 部制の授業であった。午前から始まる学年と午後から始まる学年があつた。教室と教員不足だったのかもしれない。また、5 日制で週 5 日の登校日もあつた。しかし、途中から 2 部制も 5 日制も廃止されていった。1 年生は女の先生であつた。2 年生は男の先生であつたが、あまり、記憶に残っていない。

3 年生になると、3 組で師範学校を出たばかりの女の先生、梶塚カツコ先生が担任なつた。3 年生の時に 4 クラス編成になつたが、私は 3 組に残り、6 年までずっと 3 組、4 年間すべての授業を梶塚先生に教わつた。今から思うと、これも珍しい。なぜ、梶塚先生が 3 組の担任を続けたかわからない。ほかのクラスは 1~2 年で担任の先生の交代があつた。梶塚先生は、男子も女子も区別なく「～さん」と呼ぶように指導した。今の小学校の子供達は、男子でも女子でも（～君）と呼んでいるのを聞くと、梶塚先生の言われたことが想いだされる。

授業で思ひだされるのは、国語の時間で、「原動力」を使って短文を書きなさいと、皆に言われた。どうしても書けず悩んだ記憶が忘れられない。「できたら、外へ遊びに行つてもよい」と言つたが、最後まで書けず、教室に 1 人残つてしまつた。

体育の時間は楽しかつた。身長が大きい方であったせいか、特にドッヂボール投げ、走り幅跳び、徒競走では、よくクラス代表で、クラス対抗戦にてて、良い成績をとつた。図工は、あまり得意ではなかつた。版画の工作の時間で、木の葉を彫る時に、葉を切り落してしまい、先生に怒られてしまつた。学芸会には、よく出されたが、本人は嫌で仕方がなかつた。つらかつた。

クラスの仲間

クラスでは、図書委員、美化委員、子供貯金委員などあつたが、クラスをまとめる、級長とも呼んでいた男子 1 名、女子 1 名の学級委員が、クラス全員の選挙で選ばれた。私は 3 年生から 6 年生まで、4 年間学級委員であった。責任感や正義感が、まわりから比較的強いという印象を与えたのかもしれない。先生からは、良きにつけ、悪きにつけ、責任を取らされた。クラスが騒がしいためか、先生は授業を中断して教室を出ていつしまうと、女子学級委員の大山さんと謝りに職員室に行った。ある時、何が原因で先生

が怒ったかよく覚えていないが責任をとらされて、一人、教室内に立たされて、我慢できず失禁したことわざがあった。

ワンマン・ガキ大将の〇君がいて、良くも悪くも（悪い方が多かったが）、クラスはまとまっていた。ある時、騒ぎが起きた。はっきりとした理由は記憶がないが、クラス全員が教室をでて、道路を隔てた海岸に遊びに行ってしまった。これもワンマン大将の指示であった。その後、また、私はクラスを代表して、謝りに先生のところにいった。私は、毎朝、登校すると、梶塚先生の“ごきげん”的な顔を気にするようになった。

弁当事件

何学年の時だったか、はっきりとした記憶がないが、ある友達の昼の弁当が空になってしまっていて、本人が騒いでいた。別の誰かが、黙って食べたようだ。「朝食が食べられず、ひもじさに耐えられなかったのか」と私は思った。騒ぎは大きくならずに済んだが、当時、食事が十分にとれなかつた。腹いっぱい食べられない事情の子が、かなりあつたようだ。家庭の複雑な環境の子供もいたようだし、世間は不安定な時代であった。連れ子もいたし、預けられて施設から学校にきていた子もいた。

印刷局の排水路

大蔵省印刷局小田原工場（酒匂）の周辺は、田圃が多くあり、その田圃のあぜ道を行くと、印刷工場の排水路があった。その排水路は、たぶん、工場内の廃棄処分のお札を溶かして流してしたのだろう。よく眺めていると、お札の作りかけのドロドロした紙の塊が混じっていることがあつた。広げてみると顔が印刷されたものもあつた。興味があり、幾度かドロドロした紙くずを探しに行った。いまでは想像もできないのんびりした風景だ。紙を溶かす液の匂いがなんとも言えない気持ち悪い臭気であつた。その匂いが風向きにより、家の周辺まで漂っている時もあつた。

夏休み

夏休みになると、雨の降らない日は、毎日、浜で遊んだ。家から裸足で50mくらい、焼けた砂浜を飛ぶように抜けて、浪うち際にたどりつき、冷たい海水に足をつけて、心地良かつた。当時は、海水パンツなどではなく、長いさらし布を“ふんどし”のように巻きつけた。毎日、泳いでいると、顔は真っ黒になり、背中の肌は、かわがむけて日焼けで、ますます黒くなつた。海水は暖かい水と冷たい水が層のようになつていて、流れが速く、遊んでいるうちに、もとの場所から、波に沿い逆方向の泳ぎをして、よく移動した。酒匂の海は、波が大きく、また、潮の流れで急に深いところもあつた。毎年のように、おぼれたり、水泳で小さな事故があつた。ある年、2人の子供が、おぼれ死んだ。しかも、

私の同学年の友達がなくなった。その後、遊泳場所が、小八幡の魚市場前の浜に浪打際から幅100mくらい沖50mくらいを竹の浮き輪で、ぐるりと囲み、監視台が設置されて、そこだけしか泳げなくなった。そこには監視員として、小学校の先生が常駐するようになった。赤旗と白旗があり、白旗が上がると、泳ぎにでかけるようになった。

授業参観と遠足同伴

授業参観は、新しい教育の一環かもしれないが、1学期に1回くらいあったように思う。参観の母親は、席の後ろで授業を聞いていた、その時は、教室のなかは静かで先生も穏やかであった。母は授業参観にはよく来てくれた。私が末っ子で、気にかけていたのかもしれない。授業参観にくる母親のスペースは、席の後の1列だけで十分で、それほど多くはなかった。多くの母親は貧しい時代であり、来られない事情があったのだろう。ほかに2~3人の母親も熱心に授業参観にきていた。遠足に親が同行しても良いことになっていた。遠足に同伴する親は、あまりいなかつたが、私の母親は、よく同行してくれた。

低学年の時は、学校から歩いて小田原の城址公園にゆき、また酒匂川の土手を歩いて、二宮尊徳の生家（記念碑の後ろに記念館となっている）に行った。歩く時間は往復2時間以上である。

私は身体が決して丈夫ではなかった。季節の変わり目には、よく風邪をひいて学校を休んだ。毎年、年に2~3回かなりの高熱をだし、うなされて、汗をびっしょりかいた記憶がある。母親が心配して、熱心に授業参観や遠足に同伴したのも、“私の身体が丈夫でなかったから”といま思う。脱脂粉乳は、私達の誰もが忘がたい思い出になっている。当時はまずい牛乳と思っていた。当番がバケツに入れてもってきたものをアルミのボールに注いだ。教室に持つて時には、すでに冷えていたものが注がれて、鼻をつまんで口に入れて、腹を満たした。しかし、それが身体には良かったのかもしれない。“学校を休むこと”は“仕方がない”と思っていたが、6年の卒業式に6年間皆勤賞が一人いて驚いた。女子生徒の〇さんで、目立たない子で、バス停が印刷局まで降りたところに住んでいたと記憶している。

映画会

教室での映画会は、ほかのクラスの友達にきいても記憶がないようなので、3組の梶塚先生の特別授業であったかもしれない。窓に黒いカーテンをおろして、映画会が行われた。8mmの映写機がまわされて、「マンガ」がみられると、皆喜んでみた。教室内はすぐに熱くなり、冬でも汗をかいてみた。スクリーンには、雨のシマが多く入った画像であった。梶塚先生は厳しい先生であったが、生徒達に愛されて4年間が終わった。

酒匂の里での幼少時代

渋谷 武文

酒匂という土地に育んでもらったのは生を受けて小学校を卒業するまでの13年間である。物心がついたのが4歳か5歳だとすると10年間足らずということになる。現在76歳なので、大まかに言ってこれまでの人生の7分の1の期間ということになる。時間の尺度でいえば、大きな比重というべきか、それほどでもないというべきか、微妙なところではあるが、幼少期の体験というものは、その後の人生にとってとても大きな比重を持つ。

13歳で東京へ移り酒匂との縁が切れ、大人になって年に数回墓参りに訪れる程度のつながりであったものが、同窓会が縁で、幼な友達の学友との交流が再開されたのは会社生活も終わりに近づいた60歳の頃である。50年間もブランクがあったことになる。この歳になって、年1回のクラス会、年2回のゴルフ会などで、旧友と交流できるようになっていることはとても嬉しいことである。

ちょうど物心がついた年齢に終戦を迎える、日本という国がどん底に陥った時代から、その後、奇跡的といわれる復興に向かう、その立ち上がりの時期に酒匂に身を置いていたことになる。

終戦

当時を振り返ってみると、戦争という異常事態と無縁でいられるわけもなく、いくつかの断片的な情景が思い起こされる。けれども、自分の心の中には不思議といつてもよくくらい「悲しさ」「悲惨さ」というような感情がしみ込んでいない気がする。物事の重大さを判断したり、自分への影響を感じたりするには、まだ心身が生育していなかつたのだろう。

ラジオで空襲警報が放送されると、「クウシュウケイホウハツレイ！ クウシュウケイホウハツレイ！」と両隣に連絡に行く役目を言いつけられていた。ラジオが十分に普及していなかったのか、隣家にもラジオがあったけれど、気が付いていないといけないので連絡に行かされたのかはよくわからない。

終戦もまじかのころ、連合軍が相模湾に上陸するという情報が出て母は、竹やり訓練やら、消火のバケツリレーの訓練などに駆り出されていた。実のところ、バケツリレー訓練は瞼に残っているが、竹やり訓練の光景は脳裏には残っているものの、本当に目撃したことの記憶なのか少し怪しい。

空襲警報が発令されてからしばらくすると、編隊を組んだ飛行機が飛んできて爆弾を投下するのが見えた。祖母や母たちと押し入れに潜みながらその光景をみていた。時に焼

夷弾の破片が飛んできて隣家の壁を傷付けたりした。空爆の後は火災が発生し、大人達が、「あれは平塚だろう」などと話しているのが聞こえた。小田原方面が真っ赤に燃え上がったこともあった。後で考えると、8月15日後に米軍が残った爆弾を小田原に投下して帰った時のことだったかもしれない。

やはり終戦まじかの頃、父の従兄が出征し、母に連れられ、どこかの港へ見送りに行った。数日後、大叔母が酒匂の家に走りこんで息子の戦死を告げた。出征した兵士たちを乗せた船が戦地に赴く前に撃沈されてしまったのである。大叔母と祖母が抱き合って大声で泣き叫んでいた光景は忘れられない。終戦の玉音放送は、ラジオの前に座つて聞いた。

父の帰還

ある日父が戦地から帰ってきた。玄関に誰か来た気配があつて、走っていくと怖そうなおじさんが立っていた。誰か来たよと逃げるよう母に告げに走った。それが父だった。父は海軍の設営隊長として小笠原の母島で終戦を迎えた。そこで生死を共にした兵隊さんたちは、毎年会合を開いて交流しあっていた。父の死後は隊長の代理ということで、声をかけられ、兵隊さんやその家族方と総会という名の一泊旅行にお付き合いさせられた。させられたというのは、少々失礼かもしれないが、正直なところ上座に座らざるのは半分は重荷であった。

しかし、父の葬儀の折の兵隊さんたちの振舞には芯から心を打たれた。部下たちが棺にすがって嗚咽に身体を震わせる。まさに生死を共にした人たちの心のつながりの深さに心を揺さぶられたのである。兵隊さんたちは、もっと良い写真はないのかと迫られた。事前に用意するという頭も働かず、慌てて集合写真から無理やり引き伸ばした遺影写真だったので、表情もピントも良くなかった。兵隊さんたちには謝るしかなかった。

苦手な食べ物

戦後の食糧事情は困難なものであった。配給の食糧だけでは不足で、それぞれの家庭でそれぞれの方法で不足を補っていたのだと思う。父の部隊の兵隊さんの中には農家出身の人もいた。母に手を引かれて平塚にある農家にたびたびお邪魔したこと覚えている。母が着物のようなものを差し出している光景がかすかに記憶としてあるが、これも竹やり訓練の件と同じで、リアルなのか、後年の想像があたかもリアルであるように脳裏に残ったのか定かではない。

食糧事情は良かろうはずもないが、當時腹をすかしてひもじい思いをしていたという記憶もない。ただ配給のサツマイモの不味さは言いようもなく、いまだにサツマイモ料理に抵抗感があつてどうしても好きになれない。

現在、食べ物に関する好き嫌いは全くといってよいほど無いのだが、例外が三つある。サツマイモと、カボチャとイナゴの佃煮である。カボチャが苦手となった一因は、煮物のカボチャがどんぶりに山盛りに盛られた姿が子供心に、何とも言えぬ圧迫感を感じていたことである。それよりも、どんぶりに盛られたカボチャの弦の煮物によるのかもしれない。弦に残ったざらざらとしたひげがのどを通らなかつたのである。母か祖母かどちらかの調理下ごしらえが荒っぽかったのかもしれない。

もう一つの苦手は、いなごの煮物である。当時、小学校の授業時間に学校近くの田圃にいなご退治に出かけることがあった。イナゴの大群が発生して稻を食い荒らすのを防ぐという目的もあったと思われるが、捕まえてきたイナゴを食料として栄養源を確保するという別の目的もあった。イナゴは手足が大きく肘張っており、子供の喉には通りづらいのである。これも我が家家の女性軍の調理方法が悪かったのではないかという疑いは抱いているが、とにかくいまだに苦手である。

行水と銭湯

自宅の風呂桶は屋外のイチジクの木の下に置かれていた。当時は火を起こすのも火吹きだけで紙くずに火をつけ薪を燃やすのだから大変だった。ご飯を炊く時のかまどの火おこしは毎日のように手伝った。

銭湯に行くことも多くなったが、銭湯は山王に確か2軒あって、いずれにしても酒匂橋をテクテクと渡ってかなりの時間歩かなければならなかつた。

子供の感覚では酒匂橋は端から端までかなりの距離であった。夏場は折角風呂に入つても家に帰るまでにまた汗びっしょりになつてゐたと思う。それでも銭湯の湯舟は大きく、壁一面に大きく描かれた富士山と海か湖に浮かぶ帆掛け舟が気持ちをゆったりとさせてくれた。

小学校高学年になったころには、印刷局の風呂が一般の人にも使わせてもらえるようになって、酒匂橋をテクテクわたることもなくなつた。

遊んだこと

朝の通学は椎野君が家へ寄つて声をかけてくれ、次に二人で川瀬時雄君に声をかけといふ順番であった。国道1号線沿いに一番西側、酒匂川よりに住んでいた椎野二郎君が起点になつてゐた。

学校の帰りは 笹舟を作つて酒匂川に注ぐ用水路に浮かべ、ボートレースもどきを楽しんだことが忘れられない。 笹舟が時々水路の石などに堰き止められて座礁してしまう。 友達の 笹舟に先行されてとても残念な瞬間である。

帰宅してからの遊びはベーゴマ、めんこ、竹馬、キャッチボールなどである。時折、学校の東側の小八幡地区と西側の酒匂地区との戦争に男子は全員駆り出されて浜辺の石投げ合戦が行われた。



小八幡と酒匂のそれぞれの大将は内田潔君と多田勝君であったと思う。本気の喧嘩かゲームだったのかどんなルールで戦ったのか全く覚えていないが、それなりのスリルを味わっていた。

紅梅キャラメルを買うとプロ野球選手のプロマイドが入っていて一生懸命集めた。駄菓子屋でくじを引いて、1等賞が当たれば模造紙の一番上に貼ってある大きい写真が

もらえた。山下君（左）筆者（中央）敦夫君（右）

ある時、小田原城内の小田原球場でプロ野球選手のサイン会が開かれた。たぶん紅梅キャラメルの主催であった。ジャイアンツの青田選手、千葉選手が来た。青バットの大下選手もいたような気がするが、ジャイアンツ所属ではなかったのでいたはずがないような気もする。少なくともこの時には赤バットの川上選手は来なかつた。残念だったのでもよく覚えている。

くじでもらえる写真には相撲の部もあったので、顎の鏡里の写真が欲しかった。まだテレビ放送などない時代のことなので、有名スポーツ選手の顔は新聞紙上でしか見たことがない。ラジオ放送でイメージを膨らませながら、自分の顎を決めていたのだろう。ちなみにテレビ放送が始まったのは、東京へ移住した後、中学生になってからのことである。

低学年の頃は毎朝のように地引網に出かけた。早朝、ざるを抱えて出かけ、網にしがみついていると漁師さんが、大きな掌でくったシラスを分けてくれた。網に追われるよう砂浜に打ち上げられる小魚を捕まえるのも楽しかった。

当時の酒匂川河口ではまだシジミが獲れた。フナ釣りもできたが、年上のがき大将との場所取りが煩わしくてあまり行かなくなつた。こちらが先に釣れようものなら、そこは俺が釣っていた場所だからどけなどと難癖をつけられた。しかし、浜辺の石合戦といい、なんとなく節度があって、あまり決定的なケンカということにはならなかつたような気がする。

高学年になると、和田先生や鈴木先生など男の先生方が校庭でよくキャッチボールに

付き合ってくれた。帰宅してからはクラスは違うが、近所の山下洋一郎君と毎日のようにキャッチボールをした。大見寺の参道でピッティング練習をした。山下君は主にキャッチャーを引き受けてくれた。これらの体験はのちの草野球生活に大いに役立った。雑誌の付録の日光写真で映像を作る楽しみを知り、その後友人たちとピンホールカメラを作って写真撮影をしては、机の下に潜り込んで暗室化して本物の現像、定着などを試みていた。後に写真好きになる萌芽であったかもしれない。

山下洋一郎君が長じて写真の大家となられたこととのなにがしかの関連はあったのか否か。たぶん関係はないだろう。毎年正月の道祖神の祭りと浜辺のどんど焼きの思い出も忘れられない。

ある時、学校からの帰り道、国道1号線沿いにパチンコ店が開店した。どんなものかと覗き込んでいると遊んでいたおじさんが「おい坊主、やってみるか。」とパチンコ玉を数発渡してくれた。この光景を帰宅途中の女生徒たちに目撃されてしまった。

帰宅後、庭繞きで毎日のように顔を合わせていた林まり子さんに「さっき学校の帰りにパチンコ屋さんに入ったでしょ。先生に言いつけちゃうよ。」と冷やかされた。翌日、学校へ行くのが嫌で、突然、腹痛だったか頭痛だったかを起こして学校を休んでしまうという、誠にだらしのない汚点の記憶が残っている。

健康のこと

小学生低学年の頃は、あまり体が強くなく、周囲の人からよく顔が青白いと言われていた。実は、腹に回虫を飼いこんでいて、それが体調不調の原因だったようだ。虫退治ができるからはずいぶんと丈夫になり、中学校から東京に転校してからは、中学、高校と皆勤賞であった。運動能力についても、小学校時代のマラソンではいつも、全体の中位くらいであったが、中学校に転校後は、クラスで2番手にまでなった。

現在は健康に恵まれテニスや、ゴルフを楽しめている。基礎体力は酒匂の時代に築かれたものと確信している。

酒匂での幼少時代を思い出すままに書き連ねたが、あまりに昔のことで、断片的なシーンとしてしか思い出せない。現在所属しているテニスクラブに、偶然だが、誕生日が全く同年月日に小田原で生まれたという女性がいる。クラブハウスでの休憩時に小田原時代のことを話題にすることがあるのだが、「我々は一体何年前のことを話しているのだろうね。70年前のことか。」と笑いあう。過ごしたのは短い時間ではあったが、酒匂への郷愁は消えることはない。

母から戦地の父への手紙

渋谷 武文

平成 27 年（2016）は終戦 70 年に当たり、一つの区切りとして、全国で様々な催し物が開催された。かすかに頭の中に残る終戦前後の光景は、もう 70 年も前のことだったのかと不思議な感慨が湧く。我が家は父が戦地から生きて帰って来たお陰で、その後の生活が成立し、今日、平穏に過ごすことができていることは、幾多の困難を抱えて過ごした人たちに比べ大変に幸運な側にいる。戦後 70 年の我が国の努力と発展は世界に誇れるものと確信するものの、いまだなお、その努力を理解しようとしている国が存在するのは残念なことではある。

ある日片付け物をしている時に、一通の手紙が出てきた。終戦を迎えた日の一ヶ月後に母が、まだ地にいる父に向けて書いたものである。一通しかないので、父も特別に大切にしていたものかもしれない。父は、技術将校として設営隊長を務め、小笠原の母島で終戦を迎えた。米軍機による小笠原空襲は激しいものであったようで、その体験を共有し生還した兵隊さんたちの絆はことのほか強固で、後に何度かそれを思い知らされる場面があった。母の手紙は、もう爆撃機が来襲しなくなった酒匂から、まだ終戦処理に追われているであろう戦地の父に向けて発信したものである。

御詔勅を拝して以降、毎日如何なさっている事かと日夜、頭を離れることが御座いません。女の私たちでさえ、身の置きどころがない思いでございました。まして、武人として、しかも、長としてその御心中、唯々お察ししております。

しかし、こうなりました上は一日も早く平和を取り戻し、新日本の建設に邁進することが、最善の道と信じます。そして再び列国と肩を並べて進むべく努力するのが私たちの任務だと思います。私たちは潔く、敗戦国の重荷を担って、新しい勇気を奮い起こし、次代の繁栄の為、捨石となって進まねばなりません。

必ず再び世界の強国なる事と信じております。内地は平静に総てのことが運ばれております。軍人の復員も大分完了した様子で、ご近所の方たちも、随分沢山お帰りになりました。

何と申しましても、内地に居る方々は幸いですが、外地に居る方々は、今後どんな苦労なさることかと、本当にお気の毒でなりません。軍人はずっと勝ち戦をしながら敗者の苦難をなめればなりません。在外同胞は長年月築き上げた財産も何も水泡となってしまい、その残念さはなんとも言えないでしょう。

内地の軍隊は何をしているのだと言われるのがいかにも残念です。自分たちは、どうし

ても今一戦交へ武人の最後をかざりたかったのですと、ある部隊長が申しておられましたが、これは軍隊が弱いのではありません。また、国民もまだまだ負けてはいませんでした。しかし、何といつても、現代の戦争は精神力だけではどうすることもできません。科学戦に負けたと言っても過言ではないでしょう。

私たちも戦争中は随分怖い思いを致しました。家も財産も失うものと覚悟していましたが、幸い総て無事でございます。私たち三人他親戚一同、変わりなく暮らしております。

長沼様（＊父の義弟）はご無事で、呉にいらっしゃいます。近く御帰郷になる様なお話でしたが延期になったとか、先ず先ずご無事で、一同安心致しました。荷合嶋様（＊父の義弟）よりは未だお便りございません。武文は相変わらず元気に遊んで居ります。

何か戦争の話でもしますと、僕のお父さんはいつ帰るのかなと待ちわびております。お父さん帰ってくると嬉しいなあーなど申しております。毎朝海岸へ地引網を引きにまいります。大人の中に混じって、網にぶらさがっているみたいにして、引いております。それでもご褒美をいただけます。健康には良いし一挙両得です。相変わらず隣組の用事をよく手伝ってくれます。はつきり用をたしてきますには感心しますが、そのかはり、何でも私たちの話を詳しく、聞かうと致します。これが欠点といえば欠点です。武文がいるために生活に張り合いがあります。なんと申しましても子供はいいものです。お国のお役に立つ人間にしたいと思います。手紙もどうやら往復できるのではないかと思はれるようになりましたので、急ぎ認めました次第です。どうぞくれぐれも、御身を御大事に遊ばせて下さいませ。

そして軽挙は、くれぐれも慎んでくださいませ。部下一同の方達の為にも、充分自重なさいますよう御願い申し上げます。かしこ

九月十五日

勝治様みもとに

正枝

一言：息子は大人の話に口を出す欠点があったようだ。苦笑である。それはさておき、この手紙の趣旨は、最後の二行である。父が早まって自害したりしないように諫めるのが目的であろう。母がこの手紙を書いたのは、逆算すると弱冠30歳の時である。何より驚くのは、日本の敗戦は「科学戦に負けた」のだと言い切っていることである。片田舎の酒匂の町で生活する一人の若い女性がこのような言葉を発し得る環境であったことに驚く。国民は何も知らされていなかったという通説は嘘ではないだろうが、国民は肌で事実を知っていたのではなかろうか。個々の事実は知らなくても全貌は感じ取れていたという。

疎開と小学校時代回想

山下 洋一郎

出生と疎開

私は、新宿に近い、東京都牛込区喜久井町で生まれた。3歳の時、品川区御殿山に、母がパーマなどをする美容院を開いていて、そこから五反田幼稚園に通っていた。母の先生はフランス人でマリールイーズという方で、日本に洋式の髪型技術指導に来られていた先生であった。先生自身のパーマ、頭の手入れに、たびたび、母の美容院にも来られていたという。私は西洋人に慣れてなく鼻が高く色白で、見たこともない魔法使いみたいに見え、とても怖かったので逃げていたように記憶しているが、「先生は、必ずだっこをして下さったのに！」と、すぐに逃げる私に、母を困らせ、慣れるまで、少し月日がかかったと、後日、母から聞かされた。

4歳、洋式髪型は禁止になり1944年には、父は出征したので、母の実家の兵庫県但馬地方の大屋町に疎開した。疎開での生活は田舎であったが、ひもじかった記憶もなく静穏な生活であった。幼く思い出すことは少ないが、防空壕の訓練が大嫌いで、特に防空頭巾を被るのが嫌だったことや国道を戦車が走る時に、小旗を振って見送ったのは忘れられない出来事であった。大屋町での疎開生活は、小学校1年1学期までであった。

1946年8月に父が戦地から戻ったので、東京の元の家に行くと、東京の大空襲で家は焼けてなくなってしまっており、住む家がないので、酒匂にある伯母の家が、ゆりかご園（孤児院）を設立して人手がないので、母が手伝うことをし、そこに住むことになったと聞きかされている。ゆりかご園は、山下家の所有で江戸時代から参勤交代での酒匂宿の大名の宿、本陣であって、大きな門構えで、奥は広い屋敷となっていた。叔母は、戦後、そこを孤児院にした。現在はその屋敷や土地などを小田原市に貸し出して、建物は建て替えられて、同様な施設となっていると聞く。

但馬の大屋町から酒匂に来る時は、いくつかの駅で乗り換えたが、沼津駅までは蒸気機関車であった。沼津駅から電気機関車に切り替えて進み、出発の時、汽笛が「ぼうー」という音から「ピー」と甲高い音に変わりびっくりした。

小田原駅から、バスはあったと思うが、トラックの利用などがなかったのか、人が引く5台の荷車に、人と荷物一緒に乗り、酒匂のゆりかご園にたどりついた。

二度目の疎開生活と小学校時代

私たち家族は、山下家の離れ屋敷に住むようになり、母は孤児院の手伝いのため、毎日、朝から隣の孤児院に出かけた。

私は、まだ小学校の1年生であったが、配給所に行き、配給される“さつまいも”や

“小麦粉”などを買った。野菜や魚の買い物もした。ごはん焼きなど家事は、私の役目であった。1醤瓶に米粒を入れて、棒でかき回して精米にしたことも懐かしく思いだされる。多分、これらは農家からもらったものであろう。

1年生の途中からの転校で、少し不安があったが、近所に多くの同年代の子供たちがおり、すぐに友達ができた。クラスは1組の先生は、男性の山口先生であった。クラスメイトにいじめられることもなく、嫌な思いをすることもなくスムーズに、級友とも仲良くなれた。

増田昭一先生

2年生の担任は、つめ入りの服を着た増田昭一先生であった。授業中に、よく、終戦直後、満州の収容所にいた子供たちの話をされたことを記憶している。悲惨な話であったように思うがよく覚えていない。途中から女性の先生に代わり、3年生で再び、増田先生が担任になり、4年の1学期まで担任であったと思う。増田先生は、あしかけ3年間、小学校で、最も長く、私にいろいろと教えて下さった。残念ながら授業の内容はあまり思いだせないが、板書が大きかったように思う。

増田先生は、学芸会の演劇の指導を放課後に熱心にされた。1組では毎年、熊沢君、片桐君、小田さんと私などが指名されていた。このことがきっかけになったのか、1組の生徒は連れだって、日曜日に増田先生のお宅に遊びに行った。小田原駅には、今的新幹線口がなく、表出口から、線路の下のトンネルをくぐって、坂道を歩き、丘の上にあった。幾人かの者が行ったが、多分、私がクラスのなかで、一番多く先生のお宅に遊びに行ったのではないかと思う。数回伺った。先生は、お家では、授業以外のいろいろなお話ををして下さり楽しかった。「将来、先生になれたら、いいなー」と漠然と思っていた。4年の2学期から、田代琴子先生になった。子供の目からも、いつもほかの女性の先生よりおしゃれな洋服を着ておられた。

和田謙二先生

今春（2017年）同級生の鈴木正一君が大腸がんで亡くなり、片桐君と大野君とで、彼のお墓参りをした。小学校時代は正一君とは家が近く、渋谷君らとともに、1組の片桐君や木村君と仲のよい遊び友達であった。彼は、今は会社名が変わっているが、「日本鋼管」に勤めて技師長で退職した。退職後しばらく経って、片桐君と3人で、年に1回の旅行をしていた。

2008年11月には、車で松山から山越えで、高知の四万十川河口で大野君と合流するドライブ旅行をした。大野君とは久しぶり会い、4人で小学校時代を、一晩語りつくした。

正一君とは、昨年の友遊展に片桐君と大野君が来るので、出てこないかと誘ったが、抗がん治療中ということで、3人で彼の家に見舞いに行った。彼は思いのほか元気で、ゴルフを、月に1回、椎野君ら10名くらいのグループでやっていると語っていた。それから半年後の急逝で残念である。

墓詣りの後で、小学校時代の思い出話となったが、私には以前から気になっていた歌があった。西条八十作詞、橋本國彦作曲のシャンソン「お菓子と娘」（お菓子の好きなパリ娘——）である。「この歌はどの先生から教わったかな？」と尋ねると。大野君が、「その歌は和田先生から教わったよ」と言った。

和田先生は、5年生と6年生の担任であった。丸い黒い眼鏡をかけられていて、つめいりの大学生服をいつも着て、授業をされた。授業は物静かで諭すようになされた。音楽が好きで、よく教室に蓄音機を持ち込まれて、クラシックのレコードを聞かされた。「ピアノが得意だったようで、音楽室のグランドピアノを弾きながら、音楽教本にはない歌を私たちに教えていた」と大野君から聞かされ、「そうだった！」と記憶を新たにした。

道祖神の思い出

学年が進むと、同級生だけでなく、近所のほかのクラスの生徒とも遊ぶようになり、2組の渋谷君や椎野君らと野球をよくした。その頃、ラジオでプロ野球の実況があり、川上、千葉や青田の活躍を聞き、子供たちは野球に熱中した。



思い出で、一番残っているのは、「道祖神」という行事（祭り）である。地区ごとに神輿があり、行事も地区ごとに行なった。私たちは酒匂5班であった。「道祖神」は、または「せいのかみ」祭りとも呼んだ。12月、酒匂川でお神輿を洗った時の冷たかったこと。その後に、川の土手にある女竹（細い竹）を刈り取りとった。この竹は、どんど焼きで高く積み立てて、燃やすためでした。1月14日宵の日は5班の6年生で道路に面している家の渋谷君の家に、お神輿を飾り、「おみつきあんね」「ごつくあんね」「なますあんねえ」と呼び込みをして、1年生から6年生までの人はほとんどが参加し、夜はその家の間に全員寝て、

遅くまで話をして楽しかった。（写真は渋谷武文君）

15日朝早く、皆、服装を整えて、浜まで神輿を担ぎ、どんど焼きを行い、終わってから、また神輿を担いで渋谷君の家に戻り、朝飯の後は、班内の主な家々を回り「家内安全」の口上をして昼頃戻り、全部、終った時にお土産をもらい、すごく嬉しかったことを懐かしく思いだされる。

酒匂小学校の学力は高かった

酒匂小学校に1年生の時に、疎開生徒として1組に入った。よく友達と遊んだが、成績は、ずっと上位の方であったように思う。しかし、幾人かは、私より優秀な生徒がいた。酒匂から東京の学校に転校の時、学力に不安があった。しかし転校して、6年1組には優秀な生徒が揃っていたことを知って驚いたことが、強く印象に残っている。

酒匂小学校は、田舎の学校と思っていたが、東京の学校より学力のレベルは高く、しかも優秀な先生が居られた。私は、写真家として、まだ教室を開いており、野山の花を追って写真を撮っているが、心の糧となっているのは、酒匂小学校で学んだことである。



コスモス 淡路島 花さじき 山下洋一 写真集 2017
—徒然なるままに 花紀行Ⅱ—

思いつくままに

増田 昭一

昨年、大野正夫さんから電話がかかってきた。友達四人で伺い致します。聞くと、酒匂小学校で、私が担任にした子供だという。私は驚いた。現在お歳は、74歳だという。なぜなら酒匂小学校で教えた子供達は、今まで一人も連絡やお付き合いをしたことはなかった。

私は飛び上るほど喜んだ。60数年前の私のことを忘れないでいてくれたことをまずは喜んだ。なぜなら、酒匂小学校で教えて子供たちは、私のことをすっかり忘れてしまったに違いない。3年生の一年だけの担任で終わってしまっている。私の記憶では、酒匂小学校で勤務したのは4年間ぐらいだったと思う。新米先生だから仕方がない。

また、鎌倉師範で教員免許を取ることを上法校長先生に進められて入学し、途中休職もした。だから、私の思い出は、子供達の記憶から消えさっていると思っていた。私の教師になった理由は君たちには申し訳ないが、私が満州から帰ってきて、ひと月もたたないうちに働かなければ食べていけない状態であった。なぜなら父は職業軍人でシベリアに抑留され、父の生死がわからなかつた。満州のチャムス医科大学の一年生に在学していたため、当時の学長から東京医科専門学校、慈恵会医科大学など紹介されたが、金がないので行くことはできない。満州から帰った時に、家には一人の姉と父方の兄弟の二家族が東京からの空襲を避け家に住んでいた。東京から来た家族には子供が数人いた。あの当時の家族は、全部と言っていいぐらい皆貧乏だった。お世話になることはできない。仕方がない。さっそく職業安定所に行って仕事を紹介してもらった。山崎サイダー工場である。その当時サイダーに入れるサッカリンを作っていた。簡単な作業場で学校の理科の実験室のような部屋だった。そこで化学合成をしていたのである。夜勤もあった。三人で仕事をしていた。私を除いて二人は、薬学専門学校の卒業生で私の年上である。しかし、一年間勤めたがサッカリンが上手にできなかつた。それで、会社を首になつた。帰国して首になつたのは初めての経験であったが、何とも思わなかつた。なぜなら、戦争終わって、満州の新京で避難生活していた時には、フリーターのように、いろいろな仕事をしていたから首になるのは平氣だった。半月ほど仕事をせず体を休めた。満州から帰つてから、休むことなく働き、相当、身体がへたつていた。

ところが半月ほどたつて、昭和23年の春、小田原中学校時代の同級生の上法君が訪ねて來た。「増田君、お前、先生にならないか?」と簡単に言う。彼の父さんは酒匂小学校の校長であった。私は、正直なところ医者になる気持ちが、まだあった。なんか機会がなかろうかと伺つていた。一応、教員を腰掛けのため引き受けることにした。上法

君は、「親父にいっておく」といって去っていった。教員になれるかどうか、私は心配してなかつた。どうでもいい。働ければと思っていた。

一週間過ぎたころ上法君が、にこにこした笑顔でやってきた。「増田君、月曜日、酒匂小学校に 7 時 30 分に来て下さい」とおやじが言っていたという。

「そうか、時間までにいくとお前の親父に言っておけ」と、今考えると上から目線でいったような気がする。校長からではなく友達が連絡に来たからであろうか。月曜日の朝起きた。時間通りに酒匂小学校に行った。

上法正晴校長先生は、にこやかに私を迎えてくれた。「私がこの学校の校長です。簡単な打ち合わせをします」と言って、次いで「増田先生には朝礼で挨拶をしていただきます。その前に職員室で先生方に挨拶をして下さい。私が紹介しますからといった、担任は2年生をやっていただきます。主任は林先生です。ここで紹介します」と言って林先生を呼んでくれた。年齢は 40 代前後の男の先生で優しい男の先生だった。林先生にお会いして「これで一安心！」と思った。

校長先生、林先生と職員室に入ると、職員室で校長先生が、先生方に挨拶した時、20 数人の先生方が立って私を迎えてくれた。そして校長が、私の紹介をして下さった。その時の 20 数名の先生方の半分が翌年学校を去っていった。その理由の大半は、給料がきわめて少なかったからである。「会社の方が 紹介が教員の 2 倍以上である」と言ひながら去って行った先生方も多数いた。つまり、私の酒匂小学校赴任は、当時の言葉で「でもしか、先生」であった。

私の教室は 一階の西側の日当たりの悪い教室だったと記憶している。私は酒匂小学校の児童と父兄に感謝をしている。なぜなら、あの当時の父母は、まだ戦前のにおいて漂っていた。先生を尊敬する気持ちが現代と違つてあった。あの時の子供たちはみんな素直だった。父母とともに先生に協力的であった。正直などころ、未熟な先生を支えてくれたのは、君たちだった。感謝している。

案外気が弱い私であるから、父母からきつく言われたら、うつ病になってやめてしまっていたに違いない。

私は、教師としてある程度評価されたのは、酒匂小学校への赴任のおかげだと思う。教員の在り方も知らなかつた私にとって、酒匂小学校は修行の場であった。そこで、小学校教員の責務と授業の進め方を学んだ。

その後、教員人生が続いたが、つぎのような足跡を述べたい。8 校の小学校の各学校で研究主任をやり上げることができた。また、各小学校で教員志望の大学生の教育実習生数名を引き受け授業指導をした。「先生のおかげで新人の先生になりました。教えてくれた先生のなかで、一番、先生の授業がうまかったです」と、新人先生から評価の言葉をもらった時は、自分の授業の進め方が間違つていなかつたと知ってうれしかつた。

思い出の残るのは、ある学校の研究主任をした時のことである。校長から、神奈川県で小規模小学校の授業の仕方で、一番になってほしいと言われ引き受けた。校長の願いどおり、神奈川県の最優秀校になった。このコンテストは朝日新聞主催だったが、この学校の学力競争が教育向上に役立ったと思えない。優秀校になるためは、多数の書類が必要だった。朝日新聞社に提出した書類を、全部積み重ねると 80 cmぐらいあったと思う。提出書類の主要な部分は私が、学校から帰って遅くまで書いた。それがひと月ほどかかった。私の体力の限界だった。

その後も、校長から与えられた仕事を断つことは一度もなかった。その理由は、「言われたことはやり遂げねばならない」という強い信念である。満州で発疹チフスの病状が回復せず、まだフラフラだった時、新京敷島地区高等女学校の寮の警備員を募集にきた。私は栄養失調のためふらふらしていたが警備員に参加した。食事は新京日本人会の方からおにぎりが朝昼晩三つもらった。米の飯だった。おにぎりの周りには切り昆布が巻いていた。部屋にはストーブがあり石炭が用意され朝から晩までストーブに火をつけることができた。10 日間過ぎた時、体力が 80 パーセント回復した。この時、警備員にならなかつたら、どうなつていただろう。

私の人生は、ここから再出発したと思っている。この時、ふらふらしながらも言われたことをやり遂げて、生き延びたという満足感があった。そのおかげで、私の満州の出来事の本を 6 冊出版できた。

この経験から、「やると決めたらやり通さねばならない」という強い責任感で本を書きあげて、TBS のドラマにもなった。文化庁芸術祭参加作品に選ばれて優秀賞をもらつた。本もドラマも評価は高かったが、私は、何の収入も得なかつた。

私が文章を書いたきっかけは、30 年前、テレビ：ラジオ新聞紙上で日本に帰つた満州の孤児たちの話が、テレビで毎日放映され話題になった。私は、「これはおかしい！」と頭を抱えた。満州で黙つて死んでいった孤児たちのことを、多くの人たち、日本国中に知らなくてはならない。という重い責任を感じた

そこで、新京避難所で、死んで行つた子供達のことを書いた原稿を毎日新聞社に送つた。もちろん、記事になるかどうか知らない。初めての経験であるから自信がなかつた。投稿して一週間たつても三週間たつても返事がなかつた。ちょうどひと月たつた頃、新聞社から電話がかかってきた。取材をさせて下さい。「いつ行つたらいいですか」と言った。初めての経験だから、「私が、毎日新聞社の方へお伺いします」と言った。すると、編集者が「いや、増田さんの御自宅にお伺いします」と言われた。自宅で待つていると記者が来た。3 時間ぐらいの取材であった。記者は私の話をまとめて新聞に掲載された。その新聞を見て、有名出版社が 1 社、小規模の出版社の 1 社から電話がきた。原稿を見せて下さいという。「有名出版社は原稿に注文をつける」という話を聞いたこ

とがある。だから秦野にある夫婦二人でやっている「夢工房」を選んだ。特に私から二つだけ注文を付けた。絶版にしては困る。自費出版はしない。お二人は「読ませていただきます」と言って原稿を受け取って帰られた。しばらく日が経ち、「出版をさせていただきます」という電話が来た。その時は、とてもうれしかった。

出版日が来た。それで小田原の有名な書店、伊勢治書店、平井書店、八省書店などを廻った。「売っていますか?」と伊勢治書店で恐る恐る聞いた。すると「残念ながら、売れいきがまずいですね」と、無表情で店員が答えた。私の本がうず高く積まれてあった。うちへ帰って、家内に「二冊ずつ、三つの書店でこの金で、私の本を買ってきてくれ」と、3万円をだした。家内はしぶしぶ書店を歩いて25冊買ってきた。「足りなかつたから、私のお金も出したのよ!」と家内は言った。その時は、打ちのめされて頭を抱えた。「本の出版はやめた!」と心の底から思った。

ところが、しばらくして口コミで多数の新聞社などから、「取材に行きたいけど、先生の日程がいかがでしょうか」と連絡してきた。それと同時に本が売れ始めた。一番売れたのは、「満州の星くずと散った子供たちの遺書」という本である。それと講演も依頼されるようになった。私は「原則として講演料は、いただかない方針であった。講演に行くたびに、お金がでていった。どんなに遠くとも、旅費以外は受け取らないことにしている。旅費も受け取らない時もある。それは、年寄りが多い町や村に行った時、「私の村は貧しい村で、先生には申し訳ないが三万円が精いっぱいです」と言わされた。お年寄りだけの講演会では、どんなに遠くともお金を受け取ることが出来なかつた。私の願いは、満州の星くずと散った子供たちを語りたいから、一人でも多くの人たちに知ってもらいたいからと私の願いを込めて、話を進めるからである。

私にとってそれで十分である。出版社の夢工房からは、6種類の本を出していただいだが、本を頂いただけで、お金をもらったことはない。本に書くということは、私にとって大変苦痛である。その理由は当時の子供たちのことを考えると、涙なくしては書くことができない。仕方がない。この十数年、午前二時ごろ起きて文や絵を書くのである。

しかし、89歳になると残念ながら文をまとめる力がだんだんなくなってきた。80歳頃になってからそう感ずるようになった。残念である。文を書くのが面倒臭くなつた。さて、本題にかかる。四人の児童が私のうちに来るという。メンバーの名前を教えてもらった。よく考えてみると君たちを教えてから、60数年経た今日、君たちは、私と同じようにお年寄りになっているのに違いない。何を用意したいよいのか迷つた。うちの家内も心配していた。「なにをお出ししたらよいか」と聞きに来た。

86歳の女老人である。二人とも考えが及ばない。「お茶だけでいいのかしら」と心配している。歳をとると正直なところお茶を出すのにも大変である。腰が痛いし足元がふらつく。私もそうである。



増田昭一先生のお宅を訪問した4名

前列：岡野和代、増田昭一先生 後列：片桐努、大野正夫、山下洋一

約束の日が来た。来訪した 四人は、当たり前のことであるが、みんな立派な老人になっていた。私の頭から、60 数年前のことがよみがえってきた。大野さんは、一人一人紹介してくれた。みんな立派な社会人になっていた。現在でも大学で活躍中の大野さん、プロ写真家の山下さん。70 歳過ぎても、お美しさが衰えない小田和代さん。目が悪くなつて残念だが片桐さんは、現役時代には、大手会社で大変な活躍をしたそうだ。みんな立派になっていた。

私がどのように印象に残っているか心配だった。正直なところ満州から引き揚げてきて 2年目の時だから、心がやや荒れていた。父も帰って来ない。満州で姉と母を亡くした。心の傷がまだ残っていた。4人の教え子と 2 時間程度話し合った。みんな紳士的であった。「私の教え子が、こんなに立派になった」と私は本当にうれしく感じた。そして、4人のみんなから、何を言われるか私は、びくびくしていた。

正直なところ一生懸命やつたつもりだが、遠い昔のこと、何を教えたか、わからなかつた。私は短い経験から、国語、算数、理科を中心に教えたという思い出はある。後は脱線した話しばかりであったように記憶している。満州の話を中心に話したつもりだ。みんなは、一生懸命聞いてくれていた。驚いたことは、いろいろなことを思い出してくれたことである。大野さんは、満州からの引揚者の子であり戦災孤児の事、山下さんや小田さんは学芸会のことなど、よく話しをしてくれたこと、教えられた先生について、

ひとつ、ひとつ、特徴など、よく覚えられていた。40数名の教え子たちが、みんな立派に成長してくれて活躍し戦後の日本を立て直しに協力できること。どこの国にでも負けない経済発展の日本の国にしたことには、君たちが役立ったに間違いない。四人の君たちが去って行った時、私は涙した。

四人は先生として初めて受け持った私の教え子であった。70年を経た今日、良くも悪くも君たちの心に残っていることを感謝している。ありがとう。ありがとう。ありがとう。

教え子に語る増田昭一先生の半生

波乱の満州生活から小学校教員へ

大野 正夫

まえがき

2016年10月、小学校の同級生4人で先生のお宅に伺った時に、満州での厳しい体験や酒匂小学校に赴任されたことをお話になった。私は貴重なお話であるので、再び同じことをお話をいただき口述した。少し当時の資料を調べ、先生も加筆されたところもある。

出生と満州国へ：昭和3年4月13日 神奈川県小田原市城山に生まれる。城山は小田原駅の新幹線口を出て、正面にある小高い丘である。昭和20年3月神奈川県立小田原中学校卒業の頃、父は陸軍大佐で満州第262兵廠部隊の部隊長で軍都・佳木斯（チャムスあるいはジャムス）にいた。ソ連国境に近い旧満州国（現在中国東北部）兵廠部隊は、兵器の貯蔵、兵器の修理とともに戦闘にも加わる部隊で修理工場もあった。父は、近くの街にある佳木斯医科大学（当時、医学校と言っていた）の学長と親しい仲であった。父が取り寄せた小田原中学の成績を学長に見せると、学長が「良い成績ではないか。本学を受験したらどうか」と言わされた、それで、佳木斯医学校を受験することにした。佳木斯医学校に入学するために、昭和20年4月に満州に渡った。私の付き添いに秋山氏という40歳くらいの方が迎えに来て下さった。

小田原駅からでた列車は順調に走ったが大垣で空襲にあって、しばらく停車していた。その後は空襲にも遭遇せずに下関に着いた。下関から佐世保港行の船旅のため岸壁を歩いたが、人糞があちこちにあって驚いた。「トイレが足りなかいのか？」と理由を考えた。多くの出征兵隊たちが待ち切れず岸壁のすぐそばで用を足したのであろう。私はその光景を見て、戦争に負けたとは思わなかったが、「日本は、もうだめになったな！」

と思った記憶がある。

佐世保港から釜山港に向けて出港した。夜間の海は波が静かだった。艦内放送で、「いつ、潜水艦に攻撃されるかわからないので、救命具をつけて、できるだけ甲板にでるよう！」と通達があった。そこで甲板にいたが、航海中、何の事故も停船することもなく、4時間ほどで無事に釜山港に着いた。釜山の町は、空襲の跡はなく平穏そのもので驚いた。港の街を歩くと、路地で、餃子やてんびん（薄く焼いた）が売っていた。日本より食べ物が豊富だと羨ましく思った。釜山から京城経由で満洲に入る。朝鮮の中心地である京城（今のソウル）の公園を歩いた。広場はきれいで子供達が楽しそうに縄跳びをして遊んでいた。その光景はショックであった。日本では空襲で、多くの沿線の町は殺伐としており、広場で子供たちは縄跳びなどで遊んではいなかった。学童疎開が盛ん



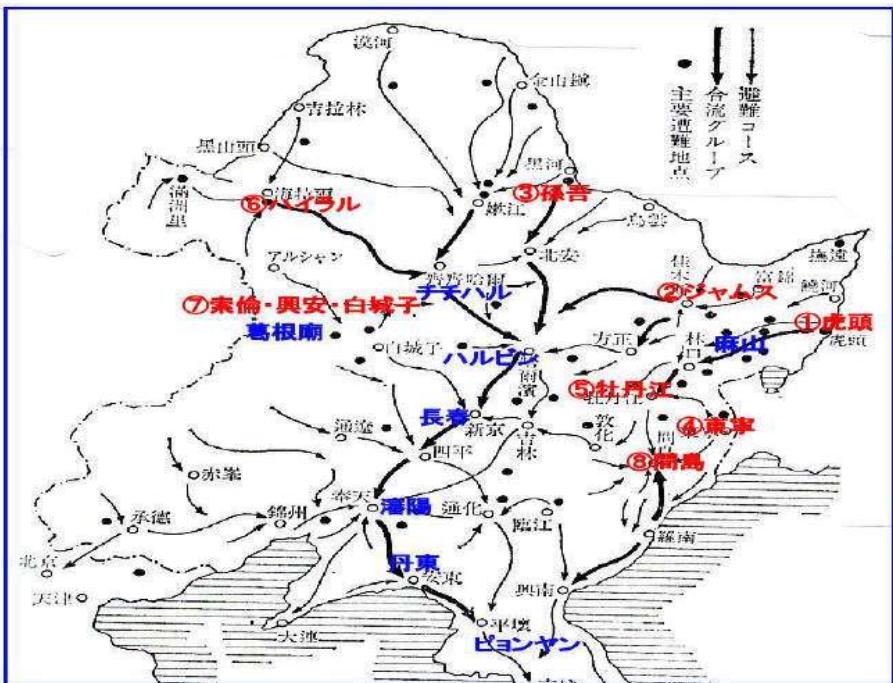
に行われていた時であった。

満州鉄道に乗り換えて、どのようなルートで行ったかは記憶がはっきりしないが、無事に牡丹江駅を経由してチャムス（佳木斯）に着いた。チャムスの町は平穏で、戦時の雰囲気ではなかつた。

（写真：当時の牡丹江市街）

満洲は、実に平和だった。日本は毎日のように都市が空襲で破壊されていた頃、満洲では空襲が一度もなかつた。佳木斯（ジャムスあるいはチャムス）市は、中華人民共和国黒竜江省に位置、中国最東部にあり中国で最も早く日が昇る所として知られ「東方第一城」の称がある。佳木斯駅は牡丹江駅から列車で 240 km ほどのところにあった。

牡丹江省は満州国に存在した省の名称で、現在の黒竜江省東南部に位置している。牡丹江という河はユーラシア大陸・中国東北部を流れ、大河の松花江の最大の支流である。佳木斯市は、東満州一帯の農産物集積地であった。満州国時代には初期の武装移民団は佳木斯南方の広大な沃野に入植し、弥栄村がその代表として、日本で紹介されている。



写真：ソ連軍侵攻地図：
ジャムス、牡丹江、ハルピン、
新京（長春）の位置がわかる。

ジャムスの生活：医学生は全員が寮生活で授業は正常に行われていた。上級生と共に4・5人同室であった。先輩は威張るところがなく下級生を同等に取り合ってくれた。学校は日本人だけでなく満人・蒙古人・白系ロシア人・朝鮮人も同室していた。つまり、五国協和の精神が、まだあった。

同室の中国人の3年先輩の中国人の賀さんがボタンに針を通すような手術の縫い方の練習をしていた。私は医学の本を読むより、手術の縫い方に興味を持ち、短い期間であったが賀さんに教わりながら、

(写真：佳木斯医学校、今も現存)

この技術と一緒に練習をしていた。賀さんは「日本人は、今中国人と戦争している。戦争には外科医が必要だ。わかるかな、一つの作戦で、多数の戦死者、負傷者がいる。俺は中国人だが、おたがいに国家のために尽くそう」といった。私は彼がスパイではないかと思った。彼は中国への愛国心で言っているのだ。私も、彼の立場だったら、そう考えるはずだと思った。夏になる頃には、中国人先輩よりも速くうまく縫えるほどに上達した。手先が生まれつき器用であったのだろうか。

7月末になり、私は学長室へ行って「休暇で牡丹江へ帰省したい」と申し出た。学長はうなずいた。「私も隊長に久しぶりに会いたいと思っているが、息子が会いに行くのが一番だ。ただし、戦時下であるから 1週間ぐらいでどうか。7月30日から8月の10日ぐらい。つまり 10日間の帰省を許す」と、ニコッと笑って言った。私は最敬礼をした。なぜなら、せいぜい 2,3 日程度だと思っていた。

牡丹江市のまわりに多数の部隊が散在していた。父はチャムス 262 部隊にいたが、1945年6月頃、30キロくらい離れた液河の第2634部隊に移動された。第5軍司令が近くにあった。60キロ先にはソ連との国境近くの虎頭という日本軍の要塞地帯があった。残念ながら防御の要となる数門の要塞砲も秘密裏に南方方面に運ばれて要塞の体をなしていなかったという。部隊の倉庫の中を見たら単なる空倉庫だった。南方の激戦地に優秀な兵器を送ってしまっていた。2634 部隊は大きな部隊で満州防衛の要になる場所であり、この部隊には少尉以上の将校が 30 名以上、兵隊が 1500 名、工員満洲人のクーリー 800 人近くを含めると 4000 名以上であった。

しかし、部隊に残っている兵器は全然ないといつてもよい。ソ連の戦車をいかに食い止めるかを兵器担当者が検討していた。といつても、肉迫攻撃しかない。弾薬を抱えて戦車に突こむ演習をしていた。リヤカーを戦車にみたて戦車に突こんでゆく。

ソ連軍の戦車砲は威力があり 800 メートル以上先にある戦車を破壊することができた。また、ソ連の戦車の製造能力もすごかった。1日に 100 台以上を生産したと書かれている。また、マンドリンと呼ばれている自動小銃も小型で近接戦にはむいていた。当時の日本陸軍幹部は、大国のソ連やアメリカと戦って勝とうと思っていたのか理解に苦しむ。ソ連やアメリカに駐在した軍人がいたのに。ソ連国境で起こしたノモンハン事件の敗北は、辻參謀が作戦を練った肉弾戦だが、ソ連軍の戦車隊に完敗した。日本が勝てる戦いではなかった。ソ連軍は、独ソ線の後、何 100 キロも離れた駅から列車で兵員、戦車、重砲を無尽蔵に送ったのに対して、関東軍は、初期の戦闘には戦闘機、戦車などを使用し戦果を上げたが、後に損害を恐れて兵器を撤収させた。兵の命より兵器の方が大切であった。明治時代より終戦まで、この思想が続いた。この考え方は、絶対に避けなければならない。若者を殺してはならない。ノモンハン事件は簡単に言うとダンプカーに向かってピストルを打つような戦い方であった。

私は牡丹江市に帰省して父の家に住んだ、兵廠部隊は多くの家族は、今でいう 1・2LDK 住宅を与えられた。私のところは、部隊長だったから 4 LDK と大きな家だった。父と母は同じ部屋に、私と当番兵の 2 名は、それぞれ別の部屋にいた。

帰省した時に、父は私を連れて松花江に釣りに出かけた。これが最後に父と共にした楽し 1 日であった。



写真：短い夏に父と一緒に、釣りに行つた
松花江の大河

夜に、父が寝ている時に、父が腰に掛けてい
るカバンを密かにのぞき読みした。そこに国
境には、ソ連の戦車部隊進駐のことが書かれて
いたと記憶している。「これは危ないな！」
と思ったが、私は来年 3 月までソ連と休戦協
定があると信じていた。満州では平穏な生活

が続いていた。8 月 6 日に広島に新型爆弾が落ちたと放送があったが、部隊の人達や家
族は何の指示も受けずに、のんびりとした生活をしていた。私は父の重要書類が気にな
っていたが、8 日までは平穏な毎日を過ごしていた。

8 月 9 日、午後 2 時頃に、家の電話がけたたましく鳴り響いた。当番兵が緊張した声
で「わかりました。増田部隊長に連絡します」。「隊長殿に司令部から命令がありまして
直ちに集合との事です」。親父は普段通りの顔をして軍装して母に向って「これが最後
かもしれない。ありがとう」。私の方を向かって「母を頼むと」と言って、迎いに来た
乗用車に乗って去っていった。それから父とは 6 年間音信不通だった。母は「武運長久
をお祈りします。お体を大切に」。それが母と父の最後の会話であった。

しかし、父は夜の 1 時半頃にいったん帰宅していた。私はその夜 1 時頃まで医大の
一般衛生学の勉強していた。その後ぐっすり寝てしまった。父親は最後だと思ったに違
いない。「熟睡している私に向って、長い間、敬礼して黙って去って行った」と、その
ことを、後に当番兵に聞き、目頭が熱くなった。8 月 10 日、丸 1 日掛けて母は二人の当
番兵とともに、大きなリックサックを作っていた。

戦場へ：10 日、第 2634 部隊駐屯地の第 3 倉庫に、「部隊家族全員、集まれ！」と集合命
令が出た。その時、我々は 60 キロ先に多数のソ連軍戦車がいることなど全く知らなか
った。たくさんの家族が、屋内運動場の 3 倍以上の大きさの倉庫に入れられた。倉庫は、
じめじめして火薬や油さびついた鉄の臭い。奥さんたちには戦況の様子は知らされてい
ない。集合場所にいると、准尉が、「増田部隊長の“おぼっちゃん”、ありますか？」と
探していた。敬礼の姿勢で、「私です」というと、彼は「部隊長命令。増田昭一は、一兵
卒として第三小隊第 4 分隊に入隊し田中分隊長の指示をあおぐように」、「30 分後に迎
いに参ります。用意されて下さい」と言って去っていった。母は、水筒に水を汲んでく
れた。飯盒と着替えを数枚リックサックに入ってくれた。時間がない。周りの家族の人
に「いろいろお世話になりました。母のことをよろしくお願いします。皆様のご健康を

お祈りします」と、ありきたりな感謝の言葉を述べた。周りの家族から、「戦死しないでよ。病気はだめよ。生きて日本で会いましょう」と、涙ながら言葉をかけてくれた。私は胸を張って敬礼をして大きな声で「いきます」と言った。

1キロ先に配属された分隊があった。准尉が田中分隊長にむかって、こそこそと話をして、私に向って敬礼をして去っていった。ちょうど休憩中だったので、分隊長が全員を集めた。そして、分隊長は大声で言った。「ここにいる少年は、増田部隊長の息子である。貴様らとともに戦う。増田君、一言」と。私は「皆さんと負けないように、戦車攻撃をし、靖国神社にいきます」。兵隊達は驚いた。ある兵隊が言った「学生は靖国神社にいけんが、がまんしろ」と言って歓声をあげて喜んだ。私は学生服のまま、後方部隊に入った。その時、父が何を思っていたか、わからなかつた。

中学で軍事訓練をしていたので、小銃の打ち方や並び方や歩き方などは知っていた。週に二時間教練の時間があった。38式歩兵銃訓練も受けていたが、軍隊の兵器と同じだった。操作や手入れはお手のものである。不思議に思ったのは、戦場は、「たこつぼ」であった。本来、塹壕は通路で連結し攻撃用の陣地をつくるが、そこでは、穴ぼこが掘ってあるだけであった。そこで、リヤカーをソ連軍の戦車に見立ててキャタピラーに飛び込む演習であった。何度も演習を繰り返していた。

突撃の前夜に「たこつぼ」に入ったが、分隊長が「30分間、茶会をする。集まれ」と命令した。飯盒に日本酒、“つまみ”も豪勢であった。最後に分隊長は、年少の兵隊に、「ハーモニカで、故郷の歌を吹け」と命じた。最後に「ふるさと」を吹き、皆で合唱した。すすり泣きの声もした。「明日の突入命令は、『戦車攻撃用意、ふるーさとー』で突入する。命令が聞こえない場合は、各自の判断にまかす。成功を祈る。位置につけ！今度、会うところは、北斗星とする」。先程の分隊長の顔とうって変わって、引き締まつた鋭い顔つきであった。兵隊が「なぜ、北斗星ありますか」。「天空は広い、北斗星は動かないから、迷わないであろう」。それぞれが夜露にぬれた「たこつぼ」へ入っていた。その夜の北斗七星がよく見えた。

ソ連軍への突撃の前、分隊長は、私に「お前は部隊長の息子で兵隊でないから、これから300m離れよ。我々がどのように戦ったかをよく見て、報告するように！」と言つたが、もう遅かった。「たこつぼ」からはい出そうとすると、6メートル先のソ連軍の一台の戦車砲が火を噴いた。爆風で「たこつぼ」にたたきつけられた。意識を失った。どのくらい時間が過ぎたであろう。気が付くと上着がなくぼんやりと前方をみていた。約20m先にT34の戦車が見えた。砲塔の先端には少年兵がマンドリンを構えて、私を狙っていた。死んだふりをしたが、少年兵は銃口向けて、引き金を引いた。弾丸を浴びせられ、頭の上を飛んでいった記憶があるが気を失つた。

戦場からの生還：それから何時間たったか、確かではないが突然ズボンを脱がされる感じがして記憶がもどった。日本語で叫んだ。「俺は兵隊でない！」と叫んだように思う。農民が死んだ兵士の服や所持品を取ってゆくのである。私の周りに、4人から5人の満人が集まり、私のズボンを取り合っている。そこへ突然日本語を話す男が現れた。父の部隊の中国雇員の親分だったという。私の「増田」と書かれているシャツの名前をみて「あなたは、増田部隊長の息子さんですか？」と尋ねた。私は頷いた。すると、満人に向って、大きな声で叫んだ。「静かにしろ」俺の話しを聞け。親分は「増田部隊長には大恩がある。私の息子がジフテリアにかかったが、牡丹江の病院にはワクチンがなかつた。そこで、部隊長は軍事電話で医科大学に連絡を取って、「ワクチンがある。すぐ、ゆけ」と言われた。それで息子は助かった。「お前たち、みんなで恩を返そう。お前たちも仕事をもらった恩があるはずだ。そのズボンを返してはかせてやれ、おれの家でおしてやる。陳は二名を連れて戸板を持ってこい。留は漢方医を連れて来い」などと言ったように記憶している。

まだ私は意識がはっきりしてなかった。一面、青空が見えた。まぶしく輝いて見えた。親分の家に運ばれて漢方医がやってきた。私を全身裸にして、丁寧にお湯でふいた。漢方薬とチャンチュウ酒の匂いがした。私の負傷は、手首で3センチ幅で深さが2センチ程、かなり出血してショック状態で意識混濁していたのだ。傷の周りは、血餅ができ、「じゅく、じゅく」とまだ血が出て、中指の先も切断されて血が出ているが、致命傷ではなかった。

17歳くらいの娘が、「増田さん気がつきましたか。意識を失ってから1日半です。今ちょうど、お昼時です。お腹すきましたか。ギョーザを用意しておきました。食べて下さい。私が作りました」といって去っていった。おかげの子で、きれいな目がすんでいた。美しい。初めての経験である。彼女に「日本語がうまいですね」と言うと、ちょっと下を向いて、「日本語学校へ3年間通っていました。日本人の友達、たくさんいました。戦争に負けてかわいそう」と言った。感謝、感謝である。日ごとに、体は回復してきた。

留さんがやってきて。「ソレンハイタイ ニホンハイ ガリ シテイル ワタシボタンコウ エキマデ アシタ オクル。ワタシ ジュンビスル。マスダ ヨウイスル」。

彼女は心配そうに私に付き添い、「今日の夜、これから旅の幸運の祈るため、水餃子をつくります。少し待っててね」。その夜、家族3人で食卓をかこんだ。薄暗いローソク火が小さく揺れていた。ソ連兵が略奪・強姦に来ると小さい声で話した。最近、親分の家は「かんぬき」に、5寸釘を数か所打ちつけていた。

翌朝、親分は荷車に高粱を乗せて、その中に私と彼女とともに乗った。理由を聞くと、「ソ連兵の臨検に会ったとき、彼女の熱が高いので、これから牡丹江の医者へ行くとい

う」と言った。私が出たら、途端につかまってソ連の 収容所に連れていかれる」と話した。彼は私の姿をみて、「テンホウ メイユウ」と言って、中古の中国服を妻に言って持っておさせた。「ニデ、ブシン」私の服と取り換えさせた。後に中国服が、大変役にたった。

私と彼女は別々に2枚重ねの麻袋に体を入れた。マーチョの台の上には、古ぼけた布団の下にわらがひいてあった。その上に高粱の長い茎をたくさん重ねて、「しばるぞ」と言って縄をかけた。「チエ、チエ」と、親分は馬の手綱を引いた。その日は、8月の末ではないかと思った。

「牡丹江の近くの村に着いたよ。ここから歩いて1キロぐらい、ここで降りたほうがよい」。私は自力で袋をぬけだした。抜けるような青空で、大きな木の下であった。

娘は言った。「お父さんがハルピンへ行く3日分の食糧を買ってくる。この木の下で、待っていて。増田さんは口を言ったらダメです。日本人とわかります。だから口がきけないふりをして下さい。口をあけてぽんやりと空を見上げて下さい」。

ハルピンへ：ハルピンは北満の主要都市で、駅に着くと多くの家の壁に、筆などで避難している場所が多く書かれていた。私の部隊は、“西本願寺”と書かれてあった。そこに行くと、部隊の留守家族が200名以上はいたと思う。将校家族が多かった。母は、そこにいて再会した。部隊は、戦場から撤退して武装解除され、兵隊はソ連軍に連れられて行ったが、軍属は解散させられて“部隊避難場所”にやってきた。多くの将校が戦死して、母は慰め、一緒に泣いていた。戦中時は、軍人の妻は「夫が戦死しても泣いてはいけない」とされていたが、その時は、皆、号泣していた。母は、「お父さんも戦死すればよかったのに！」と、日に日に目がうつろになっていった。父がソ連軍に連れていかれたと軍属から知らされて、母は後ろめたさが募っていました。部隊の世話係から、ひそかに新京行きを勧められた。部隊長の妻として、それは出来ないことであったが、母の様子から避難場所から、私がリックを背負って一緒にでた。屋根のない貨車に乗つて新京に向かった。途中でソ連軍兵士に襲われて、リックサックをと取られてしまった。

新京で母との別れ：新京は満州国の首都であり、初めソ連軍が支配して略奪が横行して無秩序な街になった。10月初旬、新京の敷島地区の小学校が新京敷島地区難民収容所になっており、そこに収容された。周辺からの開拓団であった人達の家族、両親がいない孤児たちが、ここに入った。私達もここに住むようになった。難民収容所は、新京の日本人会が、世話と食料の援助をしていたが充分ではなかった。母と私は、11月初旬に発疹チブスにかかり、隔離されたが、男女は別々の病棟であった。「母が亡くなった」という連絡があり、母のところに行ったが、もうかたづけられていて、束ねた髪だけを

渡された。確か、母はお金を着物の衿に入れていたはずである。私は無一文になってしまった。私は、死線をさまよったが生き延びた。この頃、冬に向かい収容所では発疹チフスが蔓延しており、零下20度以下にもなる過酷な寒さで飢えていた。しかし、収容所に亡くなった多くは、飢えや寒さより発疹チフス感染で亡くなつた。

収容所で孤児たちと：孤児たちは、仲間と互い助け合い、懸命に生きようとに努力した。着る物も十分でなく、亡くなつた者の着物を着ることもあった。死ぬとなぜかシラミが逃げていった。食べるものはほとんどなく、厳冬のわずか2、3ヶ月の間に、次々と子供たちは亡くなつていった。子供が亡くなる時に、しづかに息をひきとり、自然と死を向かい入れていた。亡くなつた子供たちには、小山のように土をもつた。多くの小山が収容所の庭にできていった。

私は収容所生活で栄養失調になり、ふらふらしていたが、少しでもお金になる仕事があれば働いた。3月のある時、10日ほど仕事がある。寝るところと食事を出すという話があり、行った。新京高等女学校の寮で警備員の仕事であった。そこには、米の飯があり三食食事つきだという。早速、それに応募した。確かに、とろろ昆布巻のおにぎりであった。朝・昼・晩、同じおにぎり3個が日本人会からとどけられた。大きさはこぶしくらいであった。しかも石炭ストーブつきである。石炭も十分に補給された。3月末の話だ。まだ寒い。しかも夏服同然の服装だ。難民収容所にいた時は。新聞紙を丸めて暖をとった。それに比べて大違いであった。1週間ほどで、力がわいてくるほど回復するのがわかつた。この寮は伝染病院であった。寮を守るため5本ほど木刀がおいてあった。2・3回満人の泥棒が入つたが木刀で追い返した。

その後、医学生であることが知られて看護師のような仕事から、医者として働き始めた。病院には、7、8人の日本人の医者がいたと思う。3~4月は、新京は共産党軍〈八路軍〉と市街戦をしていた。

八路軍とともに：ある時、共産党軍が病院にきて、「目下、交戦中で4人医師に3日ほど野戦病院で手伝ってほしい」と言われた。“あみだ”で、行く者を決めことになった。

私は、運悪く共産党軍の野戦病院にゆくことになつてしまつた。軍隊と言つても自動

車などはなく、銃はイタリア製や日本製などバラバラで、かごに入れて天秤で担いで運んでいた。兵士には中国人のほか、日本人や朝鮮人もいた。すごい軍隊たと思った。しかし、規律は、しっかりして兵士は公平に扱った。19歳の私は、軍医として衛生兵40

名くらいを与えられて、朝、40名ほどで体操などもした。3日どころか、いつ帰されるかわからない毎日であった。

野戦病院には中国人の軍医隊長がおり、慈恵医大をでた医師で日本語が話せた。共産党軍には階級がなく、帽子が古い者ほど上であると判断していた。たぶん大尉くらいの階級だっただろう。病院には国民党軍との戦闘で多くの傷ついた兵隊



(写真：八路軍の農民帽の正規兵達)

が運ばれてきた。治療薬といつても、正露丸とヨーチンぐらいしかなく、薬らしいものはなかった。正露丸でよくなおり、切り口もヨーチンでよく治った。3日のつもりが、共産党軍に従軍して野戦病院で仕事をするようになってしまった。

伝染病院の内科医は、このような時に手術はあまりできない。私の方がうまいくらいであった。寮生活での手術糸結び練習が役立った。戦争になると外科医が必要である。

戦闘が起こると、手足の切断、腹に銃弾が入っている者、貫通している者が、戸板に寝かされている。私は負傷の場所を確認して、皮膚を縫ったり、細い血管を止血したり大忙しだった。戦場では止血が大切だ。当時の八路軍は、輸血する血はないので出血を極力おさえた。



(写真：八路軍の医師と看護士)

時には鶏肉の大きな切り身を農民がくれることもあった。発疹チブスにかかり栄養失調だったので、この待遇は助かり、徐々に体力は回復していった。

私が医者ではないことは気づいていたが、何も言わなかった。まだ、20歳たらずであったから、医学生だろうとは思っていたのだろう。野戦病院では、日本人医師は、特別に優遇された。兵隊は高粱、大豆、アワの飯であったが、4人の医師は白米のご飯であった。

5月、花が咲く春になった。満州は6月から7月になると季節が駆け足のように、一度に野に花が咲く、しかも春と夏が一度にやってくる。軍隊のなかには、中国人の看護婦もいた。お父さんが“スエイエガイ”的街で商売しており日本語学校に通い、片言の日本を話す看護婦がいた。

ある時、「私とお花見にゆかない？」と誘われた。共産党軍は規律が厳しく、女性とこのような関係、男女が仲良くなることは規制されていた。抱きついたりすることは絶対に許されない。軍事裁判で死刑になることもある。看護婦と出かけるのは危険であるが、その時はなんの気も起らず、一緒花を見に行った。非常にきれいな花が咲いていたと記憶している。どうして彼女が私を誘ったのかわからなかった。花見にいった時に、彼女が私の手を取って、自分の胸にあてて、彼女の両手で抑えた。私は、「はー！」と思ったが、なんの感情をわかつず、ぼんやりと立ちつくしていた。発疹チフスにかかり、ひどい収容所生活をしてきたので、精神がおかしくなっていて、このような男女の感情は、まったくなかった。それで、その時はのことだけで終わった。

花見に行った翌日、軍医隊長室に呼ばれて、隊長は日本語で、「陳さんから、君と結婚の約束をしたい！」と報告があった。「君は陳さんを愛しているかどうか？」と尋ねられた。軍国主義をたたきこまれていて、20歳足らず、男女の関係などまったく知らなかった。嫌だと言つたら殺されるかもしれないと思い、「ハイ！」と答えたら、「あなたは、立派な腕をもっている医師である。しかし、今、私達八路軍は、国民党軍と大変な戦いをしている。3年間ぐらいで八路軍は勝つだろう。今、結婚をすることはだめだが、交際は認める！」と言われた。「3日のつもりが、3年間！」と驚いた。隊長の話で、看護婦が、私にしたことは「結婚して下さい！」ということだったことがわかった。看護婦は、おかげは姿で、品のある「かわいい！」という記憶はある。その後、彼女とは何もなかった。

銃殺刑：体力についてきて退屈してきた。外で遊ぶこともできない。女兵士達と付き合うと死刑になると聞かされていた。白米は食べきれないほど出されるので、医師達は、白米をこねた麻雀パイを作ろうと言い出した。日本人は、器用で堅い麻雀パイを作った。私は麻雀を知らないが絵心があるので、「増田、絵を描いてくれ！」と頼まれた。絵柄を教えて描いてみた。自分でもうまく描けたと思った。そこで、白米パイで、麻雀をしているところを兵士達にみられてしまった。兵士達は血相を変えて怒り出した。「あとで軍事裁判がある」と言って出ていった。後に、共産党政治委員の服を着た将校が来た。共産党政治委員といつても、写真でもみる農民帽子をかぶった農民と変わらない汚らしい服を着た男であった。政治委員は日本語で「君たちは兵隊が高粱飯で、生死

を懸けた激しい戦いをしているのに、仕事をさぼって白米で麻雀パイをつくって遊んでいることはなにごとだ！軍事政治裁判で、“日本人医師は銃殺刑に処す”と決定した。」と通告した。医師のなかでも、私は麻雀パイに絵を描いただけであった。私を含めて4人の日本医師は見せしめの公開の銃殺刑となった。

共産党軍の規律は厳しく処罰も厳しかった。私に両隣は中国人であった。銃殺刑者が1列に並ばされて多くの群衆のなかに立たされ、後ろ手に縛られて棒にくくられた。それから目隠しをさせられた。群衆のなかに例の看護婦をみつけたが、微笑んだようでも、手を日本では「こいこい！」あるいは「さようなら！」という仕草で振っているようにもみえた。私は、女心など知らないので、「彼女はスパイだったか！」と恨んだ。銃口が1列に並び、こちらに向けられた時に恐怖が走った。そして目隠しをさせられた。なんと表現してよいか、わからない。「ああ！ 死ぬのか！」そのうち、イ、アル、サンと声がかかり、「ばんー！」という音がした。何かが強く顔にあたった。目隠しを外されて、気づくと両側の者は死んでおり、隣の男の頭の半分を打たれたのだろう。自分は、顔から全身血だらけであった。その恐怖感が、身体を固くし金縛りにした。今でも、時々、金縛りの病状があるので、薬を飲んでいる。

4人の日本人医師達には空砲であった。私たちを助けたのは、あの看護婦だったのかもしれない。手を振ったのは、「大丈夫！」という合図だったかな？と、後で思い始めた。医師を殺すことは、部隊としても出来ない事情もあったのだろう。兵士達の騒ぎを収めるためだったかもしれない。

その時は、恐怖で頭が真っ白になつたままであった。それから、手が震えて、メスが持てなくなり、縫う手術をすることができなくなった。過呼吸にもなり、いわゆるストレス症になった。隊長は、日本語で「よく共産党軍に尽くしてくれた」と言い、八路軍の徽章のついた帽子を渡され、「この帽子をかぶっていれば安全だろう。まだ、国民党軍がどこかに潜んでいるかもしれないので、気を付けるように」と言った。「これで、兵役を免除するから、どこにでもゆきなさい！」と言われた。「兵役免除」と言われても、「無理やりに医者にさせられたのに！と思った。「ハルピンまでは八路軍の支配地域だ」と聞かされて野戦病院から出された。

新京での奇跡：野戦病院を出ても行くところなどない。新京の街にもどって、元の伝染病院に行ったが、すっかり変わってしまっており、新京の街をぶらぶら歩いていると、偶然、見覚えのある男に会った。運というものがあるんだな。向こうから中国語で、「お前は日本人か？ 御在所を知っているか？」など日本の地名を尋ねた。私が日本人であることを確認して抱き合った。彼は医学校時代の同じ寮生だった。そこで、新京医学校の寮に連れていってくれた。その男は、4年生の寮長に合わせて帰ってしまった。

「佐伯」と名乗っていたと記憶しているが、それから、一度も寮に来なかった。彼は帰国して室蘭工業大学を卒業していたことを、後日知った。新京医学校の寮に住みつき、寮生たちと、12月の帰国まで、いろいろ商売をして生き延びた。まず、薬売りをしたが、売るものが手には入らなくなってやめた。豆腐屋をやったこともあるが、なかなか売れなくて、残った豆腐ばかり食べて暮らしたこと也有った。手に入る品物はなんでも買って売った。生き延びねばと思う日々であった。

引揚げと姉の死：「引揚げは葫蘆島から 21 年 12 月中旬」と新京に帰国通知がでた。日本人の日本引揚げは 8 月から始まったが、奉天区が早く、引揚港の近くから引き揚げが始まり新京からの引揚げは遅れた。この満州の動乱で、今もって満州で 20 万人以上の民間人が行方不明である。日本で満州の行方不明者が問題にされないのはどうかと思う。

21 年 12 月に、葫蘆島から舞鶴に上陸した時、私の名札をみて、中年のおばさんが「神奈川県の小田原ですか？」と声をかけられた。「私が秦野の神（じん）と言う者です。同じ神奈川県だから一緒にしましょう」といった。私も「喜んで一緒に帰りましょう」と言った。小田原駅を降りると、また「偶然というものがあるんですね」。

私が「増田」という名前を付けた服をみて、秦野から来たというおじいさんが、「満州で部隊長をされていた小田原の増田さんですか？」と尋ねられた。「そうです」というと、「お姉さん（満州で結婚していた姉）は、通化市の近くの延吉で亡くなられました。遺品を預かっている」と言った。その時に私は余りショックを受けなかった。なぜなら、人の死に対ししてこだわりを持っていなかった。余りにも多くの死と関わってきたから。しづくちゃんの写真と手紙を渡された。結婚式の写真であった。手紙には、肺結核であると書かれていたように記憶している。

姉の夫は、結婚前に父の副官でスタイルの良い優秀な男で中尉であった。陸軍士官学校出身ではなく小樽高等商業学校を卒業し、司計経理学校を出た司計軍人であった。

どのようにして職業軍人になったか分からぬ。通化は日本軍のソ連進駐時の防衛線で、関東軍がとどまっていた。関東軍とともに、姉はここまでたどり着いたのだろうか。よくわからない。終戦前に別れたままであった。

帰国してから：帰国した時は、栄養失調であったが、すぐに働くという意欲がわいた。小田原中学が一緒であった友達が、少し化学の知識があるので、駅前でサンダーを作る工場を経営していた。サイダーは簡単な造り方で、クエン酸とサッカリン（甘い）を混ぜただけであったが、すっぱくて売れなかつた。よい製品できないので売れなくて首になってしまった。

酒匂小学校へ赴任：その後、働くところがなく家でぶらぶらしていると、幼い時によく遊び小田原中学も一緒であった上法君という友達が家にきて「増田、いま何をしている」とたずねた。俺のおやじが小学校の校長をやっているから、教師にならないかと誘そわれた。それが酒匂小学校であり上法正晴校長先生であった。昭和 22 年 5 月であった。着ていく背広もないで、海軍兵学校の制服を友達からもらい着てゆく。その姿で授業を行うことになった。

中学を出ただけで、どの教科も知らないで教師であった。生徒達にすまないと思って、一生懸命に教えようという意欲はあった。算数、国語、理科は教えらえると思った。いまでも素人教師で、ちゃんと教えたのか気になっている。

しばらくして、上法校長先生から勧められて、1 年あまり学校を休んで鎌倉師範に通った。中学校を卒業していると、鎌倉師範で 1 年ほど教科の授業を受けると正規の小学校の教員免許を取ることができた。よく校長が、鎌倉師範に行くことを勧めてくれたと思う。教員免許をとり昭和 24 年からクラスを担任するようになった。

父の帰国：父はシベリアに 3 年抑留されて小田原に帰ってきた。もう働く意欲もなくなり家にいたが、昔の知り合いが多く訪ねて来た。ある時、片足がなく杖をついた“やくざが”、大声で「隊長殿---！」と、幾人かの手下を引き連れて来たと時は驚いた。父は部隊長であったが、多くの人が来て話しているのを見ていると、軍人らしくなく、部下をいじめるタイプではなかったことが、だんだんとわかつってきた。しかし、小田原で 4 年後に亡くなった。

教員生活：小学校の教師をしながら、通信制授業で神奈川大学を卒業した。医科大学を目指し満州に渡ったので、大学にあこがれがあった。酒匂小学校から、真鶴、岩、立花、桜井、千代などの小学校に移った。校長にはならなかつたが、研究主任を長くやつた。教務主任も数年務めた。研究主任は、先生方の授業の仕方や授業内容を検討しなければならないので、結構、忙しい毎日を送つた。

6 人の校長につかえた。酒匂小学校の上法校長はとても良い方であった。疑問に思う校長もいた。子供が帰るとすぐに酒を飲む校長がいた。「増田先生に頼む！」と言われて、小規模校健康優良学校に 2 回もなつたが、校長の功績になつた。絵本も多く描いた。生徒たちに童話など読み聞かせたことも多かつた。校長にならならなく研究主任だったので、授業に打ち込み、授業法などの仕事ができたと思う。昭和 22 年 4 月に教員になり、60 歳で退職した。

戦災孤児の執筆：30年ほど前頃から、満州孤児が話題になり本も刊行され始めたが、満州で死んでいった孤児たちのことは書かれていない。これはおかしいのではないかと思い、執筆を始めて挿絵も自分で描いた。先生をしていた頃、絵本をつくったので、その描き方であった。毎日新聞社に投稿した。1冊目の本「満州の星くずと散った子供たちの遺書」と同じような内容の原稿を送った。しばらくして、新聞社から、「取材に伺いたい！」と電話があった。「刊行してくれる！」と思ったが、取材という意味がわからず、「わたくしが新聞社に伺います」と言ったら、「いや お宅に取材に伺います」と、何度もいわれた。取材記事が、毎日新聞に大きく掲載されたので、3社ほど出版の話がもちこまれた。そのなかで、良心的な会社で、私の意見も聞いてくれると思う「夢工房」を選んで刊行することになった。お二人は良い方であった。大きな出版社であれば、ドラマ化が早かったかかもしれないが、小さい出版社の割には、本の反響が徐々に上がって、ネット「アマゾン」などにも載るようになった。

ドラマ化：ドラマ化の話が出て、2014年8月25日（月）TBS、テレビ未来遺産、“戦後69年”「遠い約束」～星になったこどもたち～のタイトルで、1時間番組で放映された。

このドラマは、三部作、「満州お星くずと散った子供たちの遺書」、「約束」 戦場のサブちゃんとゴン」から構成された。このドラマは、反響を呼び、2014年度のテレビドラマ祭で入賞し、翌年8月にも再放映された。ドラマ化されて講演依頼が多くなったが、今まで講演料をもらったことはない。聴衆に、「聞いてつまらなかつた！」と思われるのが嫌だから。先生をしていた頃、童話を生徒に読み聞かせたことが多かつたので、その調子で話しているが。ドラマ化では、ディレクターや製作者と多く言い争った。主人公が中尉であるが、中尉は中隊長であるので、部下を連れて移動する。ひとりで戦場を走り回ることはない。もっとも、主人公が戦場を逃げ回る医学生だと話が、面白くないかもしれないが。女教師が中国人と結婚したのも実話ではない。しかし残された日本女性が中国人とお金と交換で結婚することは田舎には多かつた。ドラマでは、実話はこどもたちのこと、収容所の生活である。本当はドラマの内容よりもっと悲惨であった。床は小便と大便で30数センチの氷の板状になり、表面は、便でごつごつしていた。死んだ者は棒状の固い氷になる。慰霊室に桁上に積み重ねていた。今88歳、すぐに89歳になるが、講演がいつまでできるか。講演できるだけ、亡くなった孤児たちの約束がはたせて、ありがたいものである。

酒匂小学校から教師半生回想

鈴木 昇太郎

母親は酒匂小学校に通う

本文に入る前に、私の母親、鈴木ハルが酒匂小学校に通学していたことを記述したい。母は、平成12年4月に94歳で長寿を全うした。私が酒匂小学校に赴任したことから、小学校時代の想いで話をした。当時の記録として参考になれば幸いである。年齢から逆算すると、母は明治の末期から大正の初め頃に、当時の足柄下郡酒匂町立酒匂小学校に通っていた。当時、酒匂町は、川を隔てて酒匂村と網色村の二つの集落になっていた。網色村から小学校までは長い酒匂橋を渡って、さらにかなりの道のりを歩くので、低学年生（1～3年生）は、酒匂橋を渡らなくても通える分教場で勉強する制度になっていた。その場所が現在どこなのかは、残念ながらはっきり判明しないが、現在の山王小学校の付近だったんだろうという説が多い。

母親の話は、もっぱら4年生になってからの想い出の話題ばかりだった。やはり往復の徒歩通学の話がかなりあった。「4年生の初めの頃は、特に大変だったよ」と、話のおわり頃にはいつもでる言葉であった。当時は体力的なこと、長い距離を歩くことなどは、日常的にはほとんど経験していない。そして現在のように、歩道・車道の区別などはなかつただろうし、道路幅も広くはなかった。時には台風のために川が氾濫、橋の損壊などの災害のため、学校が休校になったこともあったという。現在は気象情報などで、事前に予知され休校の処置がとれるが、当時はどのように対応したのであろう。現在と比較することはできないが、大変だったと思う。登校の片道は30分以上かかったのではないかと思う。急な雨降りの時、着物はぬれ、草履はびしょびしょ。当時の服装は、両親の話では、和服というか着物というか表現に迷うが、たぶん、木綿糸の和服を着用していたと思う。当然、履物は草履（くさぞうり）だった。下駄での登校はとても考えられない。

母との会話のなかで、時々遠くをみるような表情で、ぽつりぽつりと話した内容で、不思議に頭に残っているものがある。（1）登校・下校の時に、雨が降ってきたら、「しりっぱしょりして、とんで帰ったよ」とか、「学校に向かう時も、そうしたよ」という。現在ではほとんど使わない「しりっぱしょり」と言葉を普通に使っていた。（2）酒匂橋は危険なので、近所の同学年の女同士や姉妹・兄弟は、通学時は一緒になって酒匂橋を渡っていたという。（3）明日は「えらい人が来るから、服装をきちんとしてくるように」と、担任の先生からよく言われた。それがどんな理由かわからなかった。後に判明したのだが、当時、酒匂小学校は、「体操の先進校」と位置づけがあり、関係者の視察が

多かったのだろう。「デンマーク体操」と関わりがあったとのいうことを聞いたことがある。

当時の小学生の服装や履物は、父、英造から昭和40年代に聞いた話では、男は草草履（ぞうり）木綿の着物、カバンは横から肩に斜めに掛けるカバンだった。女は木綿の着物、草草履、風呂敷。運動場で走りまわる時は、「素足」であったのだろうか。登下校の途中に、急な雨が降ってきたら、道幅の狭い泥道の国道をどんな気持ちで歩いたのだろう。国道は急速に整備されて酒匂川橋を通る馬車道はできていた。しかし明治44年8月の台風で流失した。小学生が厳しい登下校をした時代があった。

生い立ちから

私の家は、小田原城のお堀端で、代々店を開いていた。小学校は城内小学校を出たが、小学校の時に太平洋戦争が始まった。開戦の臨時ニュースをラジオの前に座って聞いたことを鮮明に覚えている。家が近かったので、昼食のために帰り、ちゃぶ台の前に座ていると、ラジオから、のちに多く報道されているニュースが流れた。子供心にも不安な気持になった。尋常小学校を出ると、ほとんどの子供は職業についたが、父の考えで中学校に進学した。中学校を出る頃は、優秀な子や元気な子は軍人をめざしたが、父は統制が厳しいこのような世の中になつては商売もできなくなるし、教員になれと言った。教員になる道は、小学校からは師範学校があつたが、私は中学校を出たので、横浜専門学校に入学した。当時は戦時体制で教育制度も混乱していた。

中学校では、毎日、勤労奉仕で授業などは、ろくになくひどいものだった。卒業も繰り上げで、中学4年で卒業させられた。勉強を十分にしなかつたこともあり、当時、教員免許がとれることで、旧制横浜専門学校に入学したと思う。今の神奈川大学である。

専門学校を卒業した時は、旧制と新制の学校制度の過渡期で、小学校と中学2級の教員免許状をもらつた。特に教育実習などの記憶もなく、卒業して市役所に、1週間ほど勤めてどうしようかと思っていたら、酒匂小学校の上法正晴校長先生から、しばらく酒匂小学校に勤めてみないかと誘われた。上法校長先生は、城内小学校（城内第二尋常小学校）の時の先生で、担任ではなかつたが、何かの縁で私を覚えてくれていた。今思うとよかつたと思う。

上法先生は、音楽が得意で小学校の上級生（高等科1年、2年生）を集めて、吹奏楽を指導していたように思う。出征兵士が小田原駅までのお堀端通りを小学校上級生が太鼓などを叩いて行進する指揮を取っていた。温厚な態度は、校長になつても変わらなかつた。軍楽隊の指揮をとつたのは、昭和15年、16年の頃からの戦時体制中であつた。上法先生には、不本意であったかもしれない。

小学校から教員生活

卒業して4月から酒匂小学校に赴任して4年2組の担任をさせられた。当時は、先生方の経験もいろいろであった。楠の前での4年生の集合写真の時は、まだ背広を買う金もなくて、専門学校の時の学生服を着ていた。その後も酒匂小学校の2年間は、学生服で通してしまった。学生服だとチョークなどで汚れるので、作業服に上っ張りを羽織っていた。20歳で、いきなり担任を持たされたので、授業の準備は大変だった。音楽とたしか家庭科があったように思うが、この二つは、ほかの先生にやってもらった。

当時は、女性の先生が多かった。算数、国語はできるが、図工を何とか行うことができた。戦前からの先生は、新制小学校制度になって、科目が増えて苦労されたと思う。



地図を囲んで社会科の授業風景

昭和22年に新制の学校制度になって、GHQの施政官が、定期的にジープで、学校に来たと聞く。軍服を着た者が学校に来て、新制度の学校教育が行われているか報告書を調べるのであった。占領下の学校教育であった。私が赴任した頃は、このような光景に出会うことはなくなっていたが、まだ、占領下だと感じたことはある。赴任した翌年に講和条約が結ばれて、GHQからの束縛がなくなったと、実感した記憶がある。何しろ、す

べて GHQ にお伺いをせねばならなかつた。校長より GHQ がえらい時代であった。

小学校の先生方で、一番記憶に残っているのは、増田昭一先生である。最初の出会いは、今でも鮮明に覚えている。確か赴任して 1 か月ぐらいの頃だと思うが、増田先生も私も小田原駅の近くが住まいで、自転車で通っていた。酒匂橋を渡って細い下りの坂道があり、降りると少し広い広場がある。そこに自転車を置いて、増田先生から「少し休んでゆこうよ」と言われて、30 分分くらいかな、話し込んだ。増田先生は満州で苦労されたが、歳も近く、確かに、増田先生は 2 歳くらい上かもしれない。中学を出て専門学校という経験も赴任の経過も似たところがあり、意気投合した。増田先生には、気合いがあり、「これから、やろうじゃないかなど」と、啓発されたように思う。長い教員生活のなかでも、つよく影響を受け、思い出に残る先生の一人である。増田先生は、満州のことなどを執筆して、本にされたり、その本がテレビドラマになったと聞き、陰ながら「すごいなー」と思っている。

赴任した頃は、自転車で通勤していたが、バスも木炭車からガソリン車になった。後に、ほとんどバスで通うようになった。酒匂小学校での教員生活は、教育のイロハから学び、わずか 2 年間であったが、教員生活のなかで、最も思い出だすことが多い。その後、真鶴中学校に転任した。中学 2 級の免許を持っていて誘いがあった。中学校では社会担当で、自由に使える時間も多くなった。この中学校に勤めていた時に、「教員をずっと、続ける気があるなら、大学卒業の資格を取っていた方が良いよ」という校長の勧めがあった。「そんな制度があるのですか?」ということで、時間的余裕もあったので、通信教育で法政大学に入学した。夏休みには、8 月いっぱい、飯田橋のキャンパスに通った。スクーリングという講義、体育の実習、教育実習などもあって、卒業の時に、高校の教員免許状を取得した。

私は真鶴中学の時に、野球部の顧問に熱中した。校長から「君は、野球をやりに学校に来ているのか。熱中するのは良いけど、身体をこわすな!」と、冗談とも本気とも取れることを言われた。下郡地区と小田原地区の中学校で試合をして優勝した学校が県大会に出場することがになっていた。真鶴中学の在職中に、2 回県大会に出場した。そのなかで、法政二高で甲子園に行った者がいる。もう一人、プロとして近鉄に入団した者もいた。しかし、校長に言われたように体力についていかなかつた。野球監督に熱中して肋膜炎になってしまった。何とか、休職せずに身体は回復したが、両親は私の身体を心配していた。また、練習中にスパイクが、指に当たり中指が関節炎になり切り取った。その先は、今でも骨がない。身体が回復して野球部の顧問でなくテニスの顧問になった。やっぱりスポーツが好きだった。最近まで、テニスはしていた。

教員生活は、40 年間であるが、酒匂小学校 2 年、真鶴中学 8 年、教育委員会に少し勤めて千代中学の教員となり 15 年間は小田原市内の義務教育の教員であった。後の 25 年

間は県内高校の教員であった。高校の教員になる時に定時制や昼間制か聞かれる。

私は、定時制を希望した。なぜ、夜間高校に赴任したかというと、高校視察の機会があった。我々が帰る頃に、校舎に入ってくる者がいるのに感動した。あの当時は、戦後の復興期で、いわゆる集団就職と言われて全国から若者が来た。このような若者たちのなかで、勉強をしたい者がおり、夜間高校生徒が多くいた。私は、この光景みて高校の夜間高校の教員になろうと思った。妻に話すと、「何も皆が帰る頃に、働くことはないだろう」と言われた。

最初の高校は、城北工業高校夜間部であり8年間勤めた。その頃、あの近くに多くの工場があり、工場での仕事が終わって、まっすぐに学校に来る生徒が多くいた。当時は給食などないので、工場が終わると、近くのパン屋でパンを買ってきて、授業の前に食べていた。手に油がにじんでいる生徒もいた。しかし、生徒は、真剣に私の授業を聞いてくれた。私は中学の授業と違って、授業の予習に多くの時間を割いた。担当科目は、社会であるが、社会科目は幅が広い。政治、歴史、倫理などは、大学の講義にあったので、それなりの知識はあった、しかし地理などは、教養科目として短い期間しか学んでいなかった。今でも、夜間高校生徒と接した授業の思い出が多く残っていて、夜間高校で良かったと思っている。最後の高校は、城内高校で、箱根分校、しかも夜間部であった。校長などの管理職には就かなかず、教務主任はしたけれど、40年間、多くの生徒と接して、授業やサークル顧問として熱中できた半生に満足している。

酒匂小学校

高校での教員生活が長かったが、やはり、一番思い出の多い学校というと、酒匂小学校である。何しろ、初めての学校であり20歳であった。世の中は混乱して貧しかった。背広も着た記憶がない。あの頃は若造で、上法校長先生から、よく指導を受けた。なにかと「子供が見ているぞ！」と言われて頭をかいた。

同窓誌への執筆を頼まれて、思い出を書く約束をしたが、頭の中が硬く固まっているようで、どうも出てこなかった。原稿が届かないで業をいやしたのか、大野正夫氏と塩見洋介君が、我が家に来られて、いろいろと誘導質問をしてくれた。

質問に答えていると頭のしこりがとれるように、どんどんと思い出が具体的によみがえってきた。実は、この春に酒匂小学校に行ってきた。3月に自動車免許証を返上してしまったので、息子に「酒匂小学校に連れて行ってほしい」と頼み、彼の車で行き、大きくなった楠木を見て、70年の歳月を感じた。横に鉄棒があり、昔の位置のままのような気がした。

赴任した年は、4年生には3クラスがあり、増田先生が1組、2組は私、3組は梶塚カツ子先生であった。何しろ専門学校を出ており、授業に図工や音楽などはない。



我が家にて：左より塩海君、大野君と筆者

図工の授業は何とかで出来たが、音楽の授業は梶塚先生にしていただいた。家庭科もあったが、女性の先生にやってもらった。当時は女学校や中学校を出て助教諭という先生が居られた。女性の先生が多かった。助教諭の先生に、代行授業をしていただくことも多かった。そのなかで、梶塚先生は鎌倉師範学校を出られて、小学校の教師としての自覚があったように思う。きちっと授業をされた。私は、各教科の教え方も充分に知らず、梶塚先生に教え方を請うたことが多かった。増田先生は4年生の後半から、真鶴小学校に転任されて、田代琴子先生が1組を担当された。田代琴子先生は、背が高くすらっとした方であったが、梶塚先生ほど親しく接した記憶はない。

翌年の5年生の担当は、1組は和田（田代）謙二先生、2組は私、3組は梶塚カツ子先生であった。和田先生は、一言でいうと“ひょうひょう”とした方で、担任として3人でいろいろと相談したと思うが、あまり記憶が定かでない。ただ、和田先生との付き合いは、増田先生より長い。同じ時期に法政大学の学生であった。偶然に同じ講義室でお会いし、幾度か実習なども一緒にした。和田先生は、酒匂小学校から中学校の先生に転任した。

課外授業

小学校は、田圃をもっていて田植えや草取り、稲刈りをしたことが思い出される。町育ちなので、自ら田植えなどをしたことがなかった。秋にはイナゴとりがあった。収穫した後に、田圃のなかに、イナゴが飛びまわっていた。簡単に手で捕らえることができた。網もっている子は、網で捕った。捕ったイナゴは、竹筒の下に袋を巻き付けて、

なかに入れた。捕られたイナゴは、学校に持ち帰り、大きな窓で煮て、生徒達に配った。このような課外授業がほかの学校でもあったのだろうか。聞くところによると、のちに田圃と交換で運動場が以前より広くなったようだ。

赴任した頃は、野球が子供達の遊びになり、授業が終わると野球好きの子供を集めて、「野球をやろう」と、野球をよくやった。生徒達は、いつも鉄棒のところに集まっていた。集合時間を決めていたかどうかわからないが、渋谷君がグローブを持って立っていた姿が、つよく印象に残っている。渋谷君は疎開児童だったかとうかわからないが成績はよく、お母さんが教育熱心であった。時々、土曜日の午後だったと思うが、渋谷君の学校での生活態度などを尋ねられた。問題になるようなことはなく、今でも彼から年賀状が届いている。

2組の生徒の思い出

40年間に教えた生徒は数知れないが、記憶に残っている者は、それほど多くない。ただ、酒匂小学校の生徒達は、初めて教えた生徒達で、2年間、朝から晩まで共にし、授業が終わって野球までしたので、特別によく覚えている。

まず、思い出すのは、多田勝君と譲原君である。譲原君の名前は思い出さない。彼らは、よく言えば元気の良い子供だった。いたずら子であった。多田君は、最近でも「先生、元気ですか?」と家に立ち寄ってくれる。私の家がお堀端で小田原城の前なので、時々、2組の生徒達は、家の前で、声をかけてくれる。

野入(古屋)節さんは、今でも年賀状が届いている。中学校から愛知県に転校したが思いだすのは、「修学旅行で日光に行きます。小田原駅に停車するので会いたいのですがー」と手紙をもらった。本当かなと思いつつ、小田原駅で待っていた。列車が停車すると、「先生!」と声をあげて走ってきた。その時には感動した。彼女と別れて4年ぶりであり、2~3分の停車時間であったと思うが、覚えてくれてうれかった。古屋さんは、成績はよく競技などの体育もでき、オール・マイティな生徒であった。古屋さんと仲のよかったのは、小柄の今泉俊子さんで、話好きな子だった。

お店をやっていた鈴木紀雄君も覚えている。彼のお母さんは教育熱心で授業参観には必ず来ていた。椎野二郎君も、時々、家の前で声をかけてくれる。記憶では、クラスのなかで先頭に立って動くタイプではないが、何かの問題が起きた時に発言していた。稻毛君も椎野君と似ており、クラスでの討論でも、2番・3番手で、発言をするタイプであった。クラスでの討論で、よく発言したのは須藤光雄君であった。歳を取ると昔のことが懐かしく、今でも名前を言われると顔が浮かんでくる。小学校の生徒達に会えるのはうれしい。この本ができて会を開いて下さるなら、ぜひ出席し、皆さんに会いたく思う。

アルバム



1年1組 担任 山口武男先生 (1947年5月)

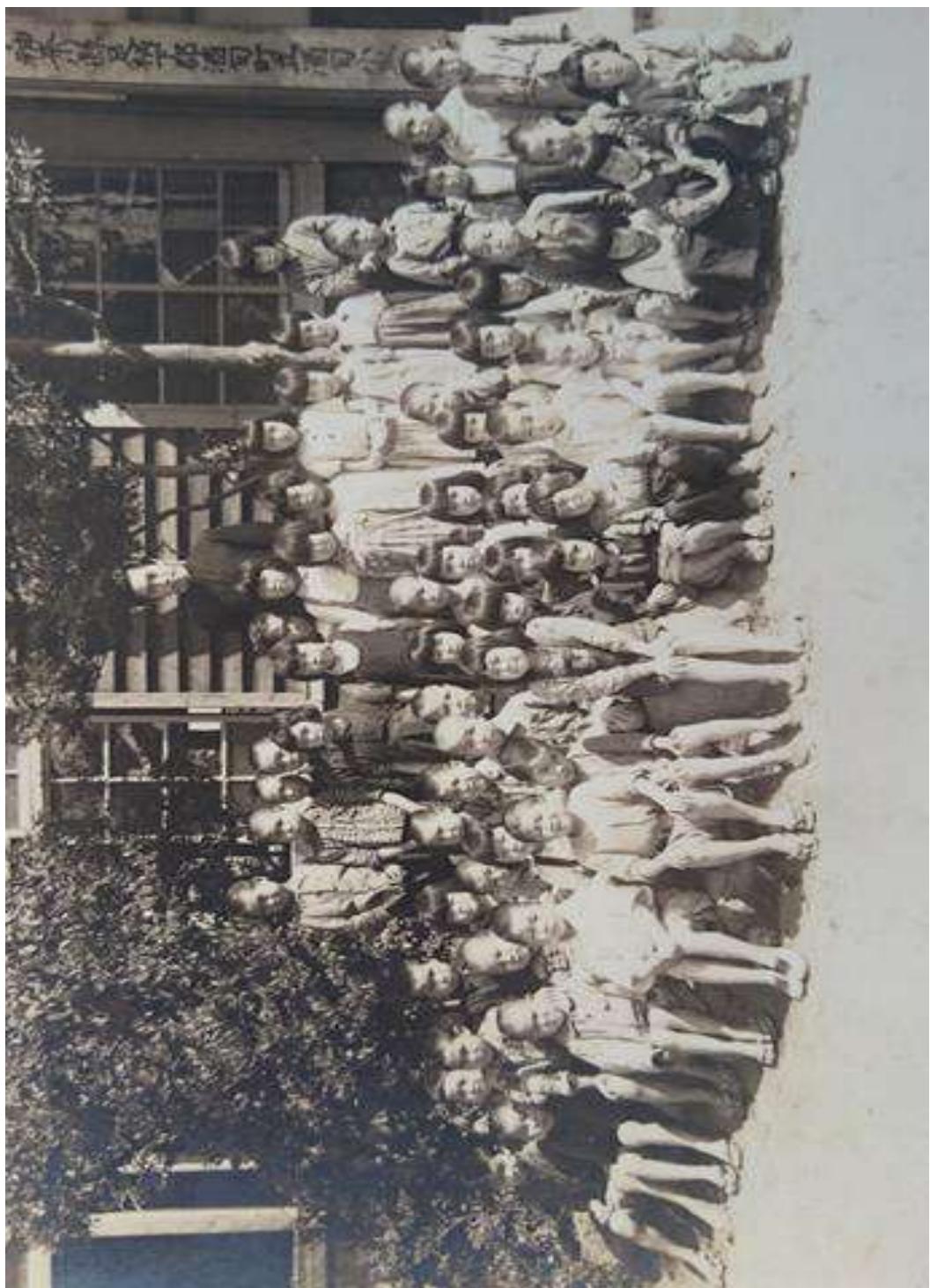
1年2組担任 川久保清子先生 (1947年5月)



1年3組 擔任 石塚信子先生（1947年5月）



2年1組 担任増田昭一先生（1948年5月）





2年3組 担任 川口 孝先生 (1948年5月)

3年1組 担任 増田昭一先生 (1949年5月)



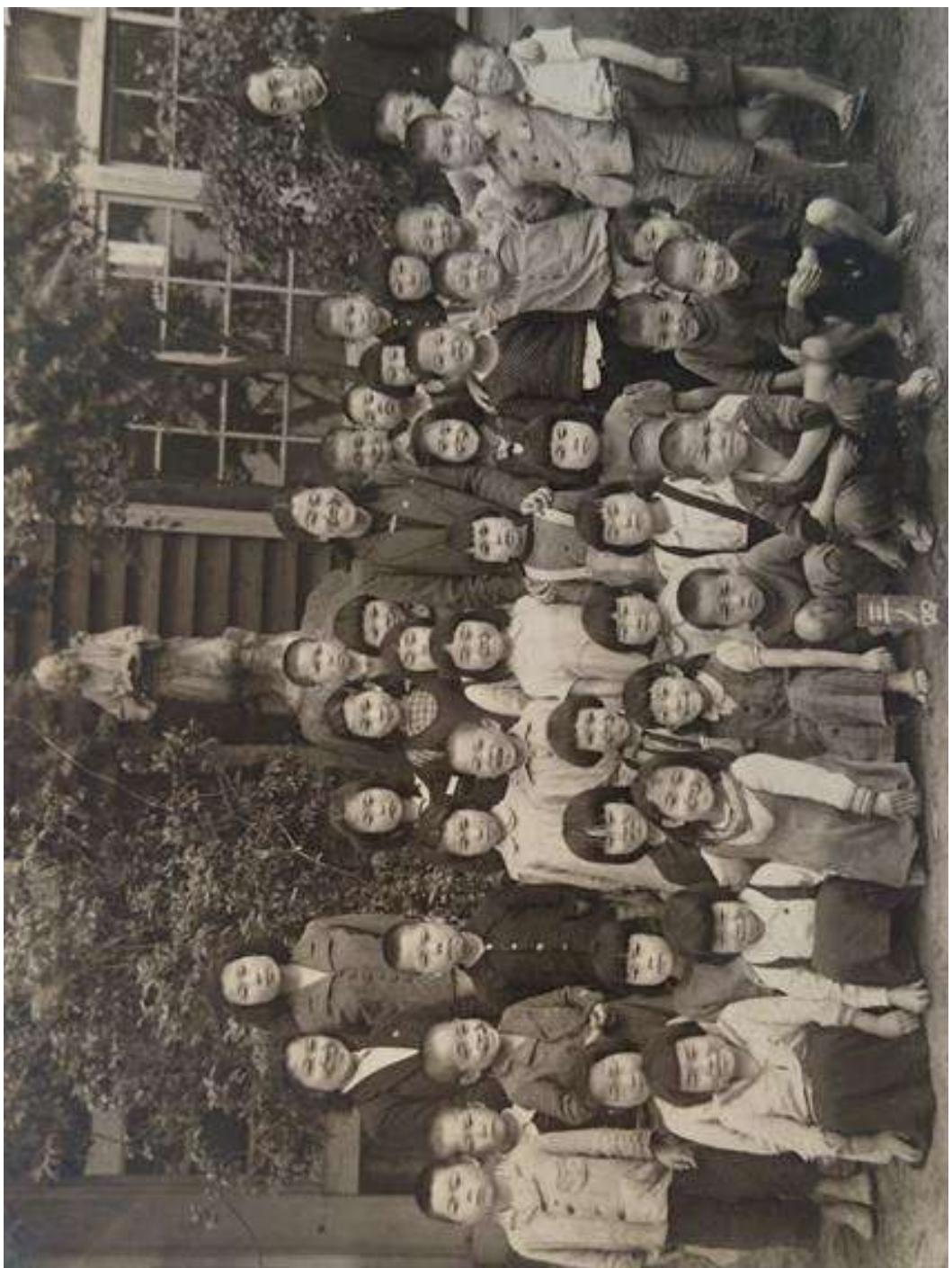
3年2組 担任 田代美智子先生（1949年5月



3年3組 担任 梶塚カツ子先生（1949年5月）



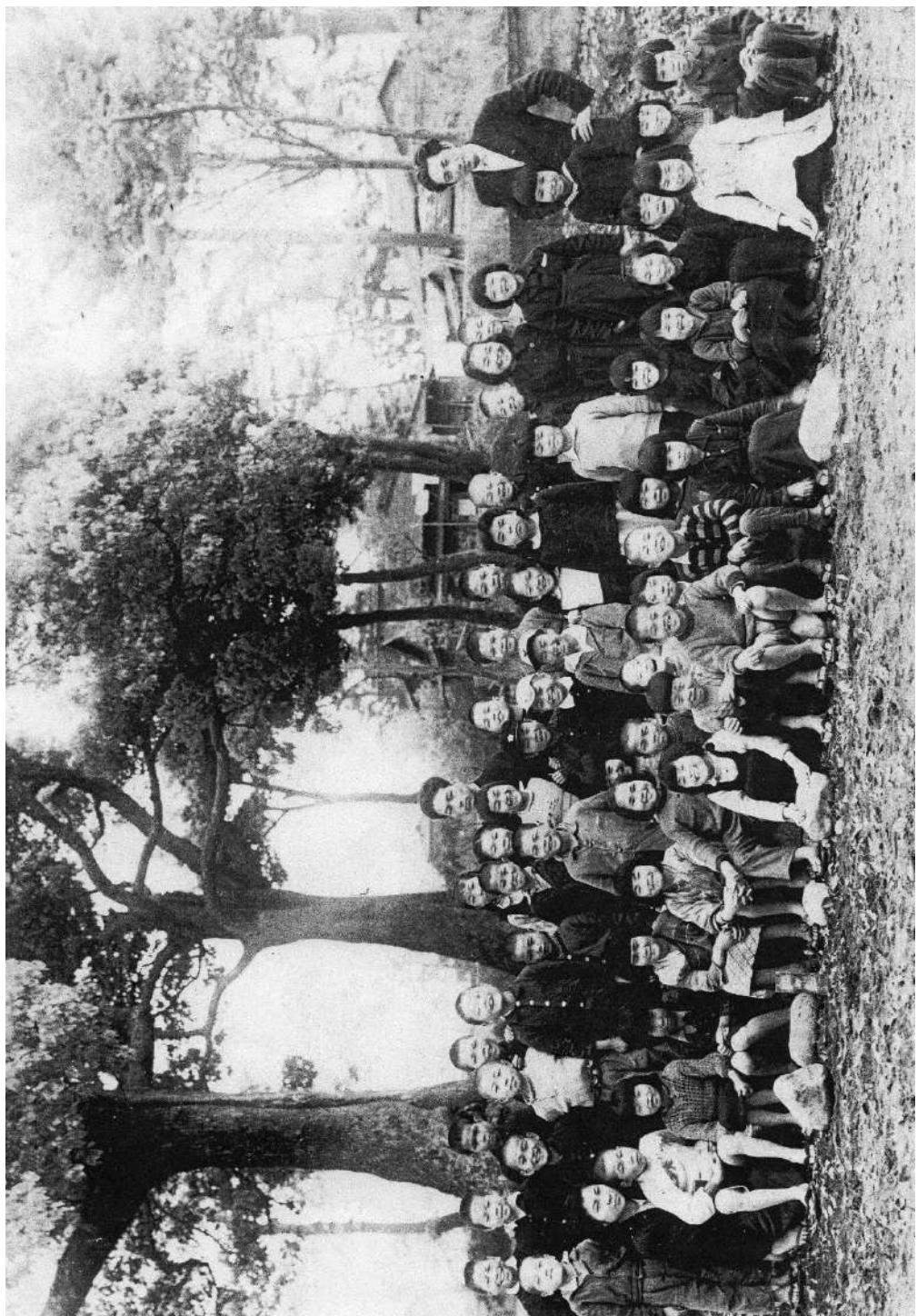
3年4組 担任 橋本京子先生（1949年5月）





4年1組 担任 増田昭一先生（1950年5月）

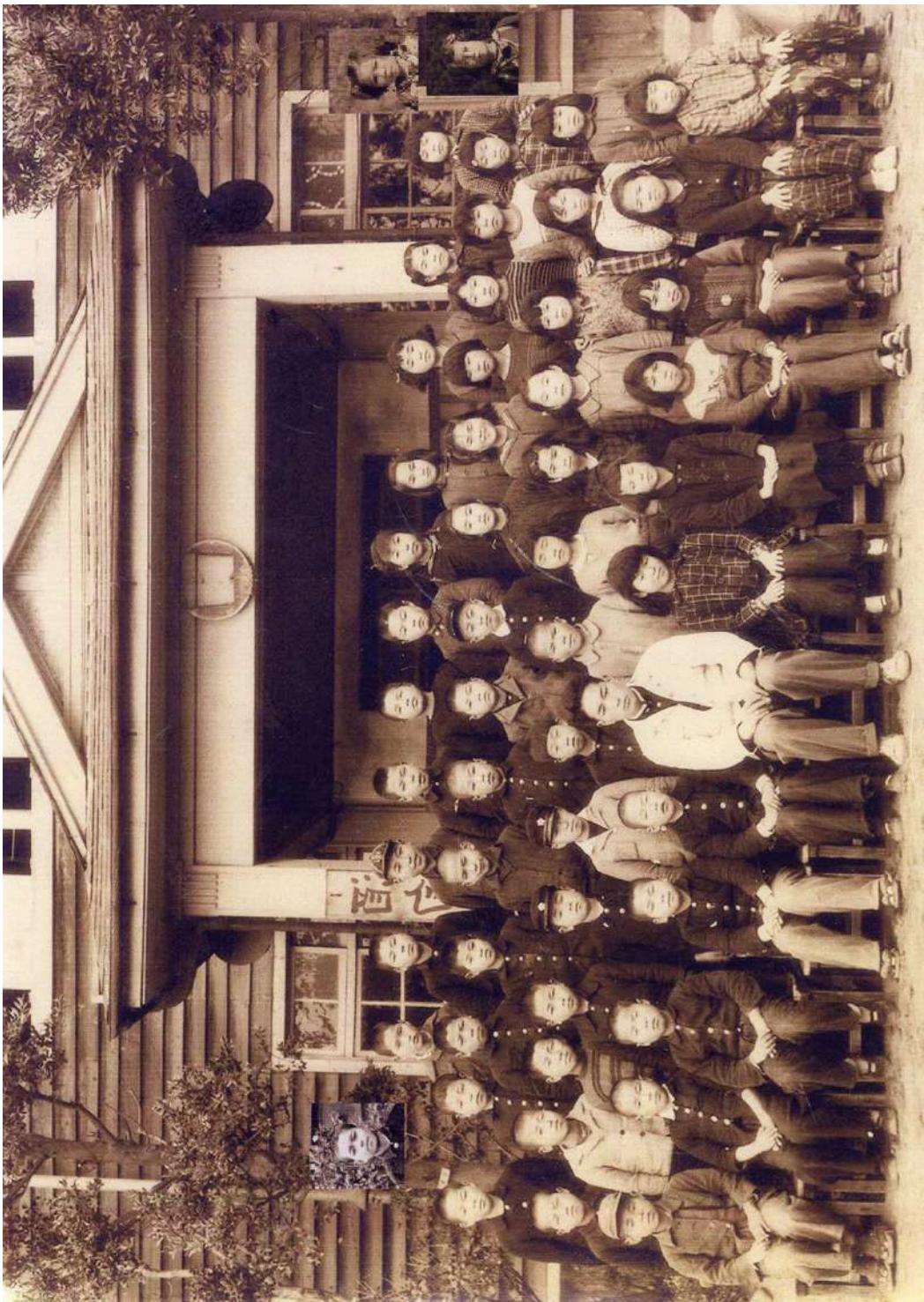
4年2組 担任 鈴木昇太郎先生（1950年5月）





4年3組 担任 梶塚カツ子先生 (1950年5月)

5年2組 担任 鈴木昇太郎先生 (1951年5月)



卒業記念 昭和 28 年 3 月 (1953)



卒業記念 昭和28年3月（1953）



2017 年の同窓会

大野 正夫

昨年の湯元での喜寿の同窓会で、これから毎年、同窓会をやろうということになり、6月7日に、昼からの会が鴨宮で行われた。高齢になったので良い企画であった。幹事がら、空いている席へと誘導されたが、隣に酒井（高橋）信子さんが座っておられた。旦那さんが同級生の酒井君であり、かなり遠方に座っていた。小学校6年生の時、教室で1年間、岡野（小田）和代さんが私と同席（二人机）で、信子さんはその前の席であった。よく3人で休み時間には、いろいろな話をした。中学2年と3年でも同じクラスで、2年間、沖津（大山）弘子さんと信子さんとは近い席であったので、休み時間には話しあっていた。私にとって思い出に残る女友達であった。しかし、中学を卒業して会うことは、ほとんどなく、60年ぶりの再会であった。手持ちの同窓誌の原稿をみてもらったら、頁をめくっていてフォークダンスの写真のところで目がとまった。小学校6年生からフォークダンスを体育の時間に行った。運動着姿で、女生徒と手を握り、腕を組むのは、少々恥ずかしいが楽しかった、フォークダンスのよいところは、一歩・一歩と相手が替わるので、次に誰と組むかと期待した。信子さんも心に残る想い出の写真のようであった。フォークダンスは、GHQが推奨した新しい教育のなかでは、よい施策であったと思う。今でも小学校では続いている。

同窓会で、かつての女子生徒から思い出話を聞いたが、女子は男子より先生方への思い出を多く話した。しかも、先生方の記憶は男子よりはっきりとしていた。1年生の担任は1組山口武男、2組川久保清子、3組石塚信子、2年生の担任は1組増田昭一、2組川久保清子、3組石塚信子、2年生の担任は1組増田昭一、2組平野良江、橋本京子、3組川口孝、3年生の担任は1組増田昭一、2組田代美智子、3組梶塚カツ子、4組橋本京子、4年生の担任は1組増田昭一と後半は田代琴子、2組鈴木昇太朗、3組梶塚カツ子、5年生の担任は1組和田謙二、2組鈴木昇太朗、3組梶塚カツ子、6年生の担任は1組和田謙二、2組大野公平、3組梶塚カツ子の先生方であった。

当時の先生方は、若く、女性の先生が多かったので、女性の先生方のことが多く語られた。橋本先生は背が高い明るい先生であった。橋本先生はキリスト教など知らない子供達に、クリスマスの授業を行った。「聖歌」〈聖しこの夜——〉を歌う練習した。田代琴子先生の話も多かった。おしゃれで、ほかの先生と違い、膝を組まれて座られた。妹で増田先生と結婚された田代美智子先生は温厚な先生であった。私達の担任の女先生方から、酒匂小学校のなかで3組のカップルが誕生した。先生方は戦後の新しい空気のなかで、私達同様に、希望に満ちた毎日であったのかもしれない。3組は、3年生から6年生まで4年間、梶塚カツ子先生であった。梶塚先生は厳しい先生だったようで、学

級委員の井上正勝さんと大山弘子さんが、いつも職員室に呼ばれていたそうだ。

女性から小学校時代の遊びの話は、ほとんど出てこなかった。男子生徒はチャンバラごっこ、野球や相撲の話、よその家の柿やビワなど取る遊びも話題になった。

当時は学校を離れると、男子生徒と女子生徒は、一緒に遊ぶことはなかった。女子生徒は友達の家を往来して、おしゃべりをし、おはじきや手毬などをしたのだろうか。あるいは、電化時代の前、水道もガスもない時代で、家に帰ると井戸から水を汲み、薪で風呂を沸かすのが、女子生徒の仕事だったかもしれない。小学生でも多忙であったのだろう。家事の手伝いは、楽しい思い出のなかには出てこない。

男子生徒は、家の周りの子供達でグループとなり遊んでいた。クラスをまとめる学級委員がいたが、どのクラスにも遊び仲間をまとめるガキ大将がいたように思う。彼らは卒業後も結束が強く、同窓会の幹事となって活動してくれた。同窓会が、今まで続いたのは、彼らに負うところがあり感謝している。小学校時代の私達の学年は、地元の子供、疎開児童、引揚者児童が混在していた。それでも、差別もなく、皆仲が良かった。

同窓会に参加した多くの女性の方々は、お孫さんの世話をしながら、ゴルフ、絵画、衣装デザイン、旅行など多くの趣味を持っており、日々、時間を惜しむほど多忙のようであった。40年ぶりに合った伊藤靖宏君は銀行マンとして活躍したが、今はボランリア事業に関わっていると穏やかに語られた。キャリヤ警視庁勤務で同窓会に出にくいと言っていた長島隆夫君も、穏やかな顔になっていた。男性の多くは、安らかな日々、ゴルフ、筋トレ、ウォーキング、飲むこと以外は、あまり、趣味がないように思われた。

そのなかで、同学年のなかで、“友遊会”というサークルを作り、小田原駅前のアオキ画廊で、趣味を超えた素晴らしい油絵、水彩画、水墨画、服装デザインなどの“友遊展”を、一昨年より開催されたのは喜ばしいことである。そのサークル代表であった山田俊夫君が他界し残念である。現役時代には、会社の幹部として業績を伸ばしたと聞いたことがあるが、彼には“人をまとめ魅力”があった。

今回の会に出席した者は、30名ほどであったが、皆元気であった。昨年の同窓会まで幹事として人集めに奔走してくれていた湯川汪君が、階段から滑って急逝されたことは残念である。彼はペットブームが、まだ始まらない50年ほど前から、この分野の先駆けのペットショップを開業し大きな店にし、同級生が集う場にもなっていた。

久しぶりの再会した幼馴染の峯尾寿君とは、柿泥棒の話をした。彼は逃げてしまったと思っていたが、ずっと離れたところで、私が怒られているのを心配しながらみていたことを知った。同窓会は、多くのことを想い起こさせた。

友遊会

昭和 22 年酒匂小学校に入学した生徒達が還暦を迎えて、自由な時間がもてるようになり、故山田俊夫氏らが、1組、2組、3組の同級生に呼びかけて友遊会と言う、あまり規約もない自由なサークルをつくった。サークルに入るのも、出るのも自由であり、年に 2 回か 3 回、仲間が集う会である。

サークルをまとめていた山田氏が亡くなった年に、友遊展が内田政則氏の世話になつて、仲間の作品展を 2016 年 2 月 5 日から 7 日まで小田原駅前のアオキ画廊で、「第 1 回 幼馴染の作品展」が開かれた。この道のプロは、写真家の山下洋一郎氏だけで、ほかは趣味として腕をみがいてきた作品であるが、油彩画、水彩画、植物画、水墨画、写真、

和服リメイクなど多様な作品が展示された。

2017 年の第 2 回友遊展には、増田昭一先生もこられて、教え子たちの作品に心打たれたという。

このような幼馴染のサークルが、我々の若さを保つことにつながる。本誌のカット絵として、遊友遊展出品の作品を使わせて頂いた。深く感謝致します。



第 1 回 友遊展 2017 年 2 月 5 日 小田原アオキ画廊にて
前列左より：角田紀子 木村君子 片桐 勉 木村達雄 塩海洋介
後列左より：山下洋一郎 大野正夫 瀬戸君代 今泉俊子 神 正明 秋山安喜
内田政則

2017年6月 酒匂と小八幡を歩く



酒匂中学校前の松林前から小八幡までを望む海浜と酒匂川河口



酒匂中学校校舎前の松林。昔のままである。



中学校校門から、酒匂・小八幡への家路の国道、東海道 1 号線



ゆりかご園。酒匂宿の本陣の門であった。



印刷局正門より。
官舎が多く建てられていた。
正面官舎、左は研究所



“おおせぎ”用水路。左は久保田
鉄工場の工場となった。
(かつて軍需工場跡地があった)



建立の時期は定かではないが、
鎌倉時代以前からあったのではないかと言わる小八幡八幡神社
の森と鳥居。昔より木立が深い。



小八幡漁場前バス停より松並木
を遠望



小八幡の砂浜。西湘バイパスで、一時、砂浜が消えたが、近年、砂浜が回復しつつある。



太くなった松並木。専売公社前



昔からの役場、今は地域の集会場として使われている。



小学校の楠の木

1本が台風で倒れてから保護の盛り土をしたという。



イチョウの木。毎年、銀杏がたくさん実るという。柵も盛り土はしていない。



酒匂地区から、小学校へ通った
通学路。

あとがき

本書作成の発端は、TBC「テレビ未来遺産」、2014年8月、終戦特集ドラマで、増田昭一原作の「遠い約束」を視聴して、1組で増田先生が担任だった岡野（小田）和代さん、山下洋一郎氏、片桐努氏と大野の4人が、増田先生のお宅に訪問したことによる。

その時に、二時間ほどであったが、満州での私達の想像を絶する経験をして帰国し、酒匂小学校に赴任されてからの教師生活を、お話になられた。記憶が具体的であり、大野は満州引揚者の子であるので、再度伺い、口述をして20頁にもなる原稿になった。何とか記録に残したいと3人に相談した。3組で学年同窓会長、友遊会のメンバーでもある塩海洋介君に相談して同窓誌を作ろうということになった。2組には、エッセイ集を刊行している渋谷武文氏がいる。彼から、本書には戦後当時の社会情勢をも記録した方がよい。鈴木昇太郎先生にも執筆をお願いしてはどうかなどと、アドバイスされた。

お二人の先生は、ご高齢である。刊行を急がねばならなかつた。編集委員会などを組織して相談すると、長い期間がかかるので、大野と塩海が渋谷氏の提案をいれて刊行作業を進めた。

原稿を書いて下さると思われる方を二人で選んだ。まず鈴木先生に執筆をお願いしたら、快く引き受け下さった。男性陣は執筆依頼者の半分が承諾して下さった。女性陣も、10名程に執筆依頼をした。皆さんから長文の手紙を頂いたが、原稿は書けないという返事であった。

野入節さんの手紙には小学校時代の思い出が長く書かれており、さらに文章を長くしていただき女性唯一の執筆となった。結果として小学校当時の生活が見えるような良い原稿を集めた。本書に原稿を投稿された方々以外からは、多くの写真が届いた。酒匂小学校に行き、穂坂模範校長先生にも、保存されている写真をみせて頂いた。しかし、1年生、2年生、3年生の写真は見つからなかった。戦後の激動期の時代で、このような作業は怠っていたのだろう。

今回、1年生の集合写真が3組揃っているのは、新制小学校の発足記念として貴重な写真だと思う。本書の戦後混乱期の出来事、子供達の遊びなどは、多くの級友から聞いた思い出話を挿入した。

本書は企画から1年あまりの短い期間に刊行するが、同学年の皆による合作の本と言える。本書は、私達生徒と先生の戦中・戦後史である。

皆さんの御協力を深く感謝いたします。

編集 大野正夫 塩海洋介

戦後の混乱期入学生徒と先生の足跡

6・3・3 制第1回生・生徒と先生の過去・現在

非売品

発行日 2017年12月25日

発行者 新制小田原市立

酒匂小学校第1回生記念誌刊行会

印 刷 有限会社 西村謄写堂

連絡先 781-1164 土佐市宇佐町井尻 226-2

大野 正夫